## 川柳核



No. 796

同人特集·愛 百句 九月号

日川協加盟

# ○○号記念

全 本号の末尾に課題と選者および参加要項を掲 玉 誌 柳大会

載した「参加用紙」を刷り込んでいます。

#### 平成五年度 二賞表彰 本社十月句会 同 人総会と

ところ 交通便 環状線または地下鉄中央線 大阪市立労働会館

森

7

10月3日(日)午後2時開場

下車すぐ(日生球場東側)

同人総会 午後3時から 電話 (06) 941-6331

本社句会 午後5時半から 議事 ①会計報告②会計監查報告③事業経 過報告④その他

## 八〇〇号記念川柳大会

لح ところ き なにわ会館・金剛の間 平成6年1月16日(日)午前10時開場

兼

(各題2句·正午締切)

由多香

晴

選

選

(事前投句) ここ 10月30日までに川柳塔社へ 尾

選

\* 所定用紙に2句を書き、 3000円 (軽食・記念品・発表誌呈)

会費800 同日午後5時から同会場で開催 0 円 (予約制 200名)

懇親宴

会

費

援 催 社全日本川柳協会 Ш 柳 社

後

主

## のよろこび甲吉句碑建立

### 西尾栞

本誌七九五号(八月号)の九五頁に、本誌七九五号(八月号)の九五頁に、組みが出た。私はかねてより塔参与の工組みが出た。私はかねてより塔参与の工を明吉さんの句碑建立を望んでいたもの藤甲吉さんの句碑建立を望んでいたもの藤甲吉さんの句碑建立を望んでいたもの下、昨年秋、弘前の波多野五楽庵さんにその旨お願いしたら、目下よりより協議中とのことであったので、もう出るかと待っていてやっと、八月号に出たので安堵の胸を撫でおろした次第である。二十年前に尼緑之助の句碑が国立公園の日御碕に建立され、今年五月に

足の笑みをたたえておられるだろう。 は、一対が出来て、路郎師もあの世で満 で、これで南の緑之助句碑と、北の甲吉句された。

路郎忌やむつの甲吉いずもの緑之助という愛弟子の句碑が北と南にでんと建という愛弟子の句碑が北と南にでんと建って、川柳塔社も洵に心強い次第である。甲吉さんのファンは、全国にワンサといる。句が非常に上手だ。そして解脱している。更にあの温顔に接したら、もっている。更にあの温顔に接したら、もったまらない。どんな人でも、一も二もなくファンになる。まだ一度も会われない故宮尾あいきさんなどは、高知から大阪へ来た人であるが、大げさだが、こがれへ来た人であるが、大げさだが、こがれへ来た人であるが、大げさだが、こがれていたとも伝えられている。解脱した上手な句と温かい心とニコやかな笑顔とから、にじみ出る人徳のためであろう。

ご協力を切にお祈りする。 が、今からでもおそくないから皆さんの う。除幕式は今年十月十七日(日)だが、 かと甲吉句碑を見とどける心算でいる。 薫風理事長も私も参席して、この目でし の五楽庵さんも迷っておられるのであろ れていないが、余り佳い句ばかりで、母体 願ってのことだろう。建立地は、甲吉さ のであるときく。句碑の句はまだ発表さ 人達も大賛成で、前景気は素晴らしいも れている。地元の尾上町の町長初め町の んの生れ故郷の尾上町の猿賀公園内とさ たのも、一人でも多くのファンの浄財を 甲吉さんの句碑が建つ。うれしいな、 募金締切は八月三十一日になっている 今度の募金も、一口一、〇〇〇円にされ

うれしいな。萬歳、萬歳。もう一度、萬



### III 柳 塔 九月号目次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

川柳塔 川柳の群像 笹百合 水煙抄 ..... 同人特集 ■古川柳 自選集 ...... 同 愛 甲吉句碑建立のよろこび ..... 柳籠裏二篇研究(十八~十九丁) 人吟) ..... 百句 黒 東 西 西 JII 尾 野 出 尾 紫香 大 栞 八 子 選 選 栞 : : : : 1 2 42 52 4 46 44 38

ある。

そんなことがあって間もなく私の句集『蕗

#### 笹 百

#### 合

小

出

智

子



ほどの見事な笹百合に思わ 台の横に活けられた三十本 掛けた日のこと、店の調剤 つい近所にある薬局へ出

ない。私があまりに羨ましそうな顔をしてい なくなって、 ては故里に繋がる懐かしい思い出のある花で たのだろうか、五本ばかり壺から抜き取って 「どうぞ」と手渡してくださった。私にとっ 平成元年六月、 花屋さんにもあまり姿を見掛け もうその頃から笹百合は少 ず見とれていた。

と一冊お届けしたのがご縁となって、 が、二年前店を閉じられた。起美さんは今年 なり大きな薬局を一人で切り盛りされていた してみたい」と言われてやがて五年になる。 の臺』が出来上がり、 十年前にご主人を見送られて、この辺ではか 美さんと川柳のお話が出来るようになった。 「想像していた川柳とは大違い。私も作句 川柳に情熱を傾けてせっせと作句さ 笹百合を戴いたお礼に 山鳥起

路郎賞

JII

柳塔賞中間発表

秀句鑑賞

同人吟………………

水煙抄.....

東

子 介

:

73

:

50

大空のこころ (33)

橘

高

薫

風

:

49 74 :



らと願っている。

打たれて、少しでもお役に立つことが出来た をひっそりと一冊に纒めようとなさる姿に胸 自身の手で作られている。ありのままの思い き込まれ、草花の絵を添えて瀟洒な句集をご

■編集後記	月各地句会案内	界展望	地柳壇(佳句地十選/人見琴記)	月本社句会	■川柳こぼれ話 極限状況と川柳 田 中 正 坊 …	初歩教室「ガラス」 吉 岡 美 房 …	「ひらたい」 大坂形水選 …	路集「願 う」 白根ふみ選 …	「味噌」吉村一風選…	<b>■ひみこさろん「自然と人と」 岸野あやめ・赤川菊野 …</b>	茴香の花 小出智子選 …	河系 河内天笑選 …
108	107	85	94	90	77	88	87	86	86	84	82	78

柄な体に一杯溜めておられるのだと思う。 だけに長い人生を生きてこられた感懐を、 川柳を知らなかったか」と嘆かれるが、それ 私の方が教えられる。 の楽しみにしてくださっている。 月に一度か二度、私がお宅へ伺うのを何より 添えて、私の郵便受にそっと入れられてある。 れて、封筒には何時も季節の花を丹念に描き 十句を越えることもあり、丁寧に便箋に書か れている。句が十句ほどのこともあれば、二 起美さんは今、白本にコツコツと作品を書 このように心のほとばしるままに句にされ 納得のゆくまで自身で推敲されるのには ひとりは一人老いに優しい世となれど 淋しげな牡丹を描いている私 月一つ生命もひとつあるままに 風がいまコスモスと話をしてる 鳩歩むひと足ごとにうなずきて 父ちゃんと呼べど威張っている墓石 高々とラジオ鳴らせてすねている 流氷を見て来られてか今日の月 おおよそはこの世のつとめ卒えたはず わが齢に甘えてふて寝してみたり 「どうしてもっと早く



島 根県 堀 江 IF. 朗

お茶の間

の要所要所にあるゴム輪

まな裏に昔を戻す雨の音 杖僕を置き去りにはしない

ぶつかっ 人は人 た襖びっくりしたろうな 妻と手をとり道を行く

盃はじっと読んでる風の向き いずも神話の大蛇を語る川の音

藤井寺市 吉 岡

美 房

塔婆料もタクシー 勿忘草にうつつ言うほど若く 代も値上げする

ない

黒揚

羽ばかり飛び立つ雨

雨

和敬清寂でんでん虫は

雨の客

歌 Ш 市

福

リハビリの常連さんへ仲間入り マ掛けてきたと八十路の嬉しそう

田

池 しげ お

子の本の栞の位置を読つむじ風シナリオー枚

み返す

むじ風シナリオ一枚見失う

星

0

無き七夕せめて賢

治

読み終えて元の女に戻れない

何事も手に触れてみる若い肌

明にならねば色が見えて来

如

松 原市 小 痩せ蛙わが家の庭を城とする

り部

消えぬ日本の

白 い夏

IF.

な母の分数

西瓜切る

戦友が来る同じ話をするために 五十年戦友より生きた蟬 十六で死を見つめてた兵

しぐれ 0 過去

しかしよう降る雨 父のこと知ってる人に会う夜店 孫のことになり

妻の指九本までは信じてる

尾

栞 選

本 英 子

逃げ道を作ってくれる女文字 四分六になったところで妥協する

の詩 豊中市 吉 あずき

大声でどならなくても一票きめている平均寿命遣きましたがたはこ吸っている	提灯あれからもう十五年	談合で僕等の税金を漁り取り	雨の中五時間待ったのよ雅子さま	柳井市 弘 津 柳 慶	射程距離内をうろちょろ夏帽子	貯め過ぎて遺言状を当てにされ	別れ話なども聞いてる遠花火	自家用の野菜を虫に与えとく	冷房が入り立ち読み腰を据え	松江市 舟 木 与根一	器から涼しさ伝わる胡瓜もみ	湯煙の向うに女神がおわします	隕石が町の宝になりました	芸は身を助ける溺れる人もいる	楽しんで夫婦恋愛しています	松江市柳楽鶴丸	シベリアの捕虜のお蔭で飯が食え	お蔭様その心根があったかい	昇進に順序があってややこしい	弓なりになって耐えてるいい姿	見て飽かぬ男になれと叱られる	倉吉市 奥 谷 弘 朗
死ぬために生きるにあらず獺祭忌ことぶきの回数券でバスに乗る	暫く泣いたこと	水中花 ウソの数だけ愛がある	愛という言葉ひさしく聞いてない	豊中市 田 中 正 坊	老醜の手でめくられるヌード集	読経中と知ってる蠅の二三びき	別れ話が軽い同情から狂う	ドンキーの父が遺したのは駿馬	揚句の果てにくすぐる神の足の裏	富山市 舟 渡 杏 花	秋空へ夢を描いて老いられず	憂い沈めて百合は闇夜に白く咲く	自画像へ野菊一輪描き足そう	激流を乗り越えて来ためし茶碗	転んでも起きても井戸の中のこと	岡山県 嘉 数 兆代賀	スケジュール子も頑張っているのだな	満員電車の中で探している未来	リスを飼ってみたいと丸い瞳の長女	自転車の妻を追い越してみるか	隙だらけの男と握手したくなる	竹原市 小 島 蘭 幸

槻 市 Ш 島 諷 云児

高

出 0 つづきを拾う途中下 車

すぐ涙わたしも齢だなと思う

ときどきは敵にも回る影法師 出る幕でない が気になる娘の 無 

隠れても逃げても妻の視野の 中

テンションを上 げて候 補 0 テリト 1)

屋

JII

市

稲

葉

冬

葉

嫁の発 東大が好きな女将の どう生きて来たかに自問自答する 言 年寄りをよろこば 小さい 胸 ++

試着室 値段のせ 10 か贅肉 か

宮 

奈良市

笛

生

のドラマの老夫婦 旅を組 10

悠々自

悠々自

適 適

北海道の 昼 肉親

0

沈

默手

術

待

0

しじ

主

幸せにしてると女やせ我慢

そこまでもしてまで痩せてみたいかよ

松原市

丟

置

重

人

冷静な目だなやっぱり他人だな

シベリ 豆をむく アの構 妻とはずんでい 図が 脳裡から消えぬ る話

庭にいる蛙 笑顔あかるい以下余白 の餌を案じてる

阿呆やけどやっ

自分では瓦いちまい直 花を買うお金 があれば酒を飲む しせない

こっそりとビフテキ食べて大笑い わたしでも酒を飲んだらよく笑う

辻褄がぴ 怪 しい

市

石

JII

侃

流

洞

たり

なと思う

美人薄命どなたが決めた消去法

宴たけなわカラオケ誰も聞い 健康が財産ですと負けていず てい

おにぎりプラスうどんオフィ ス街の昼が混 す

大阪市

西

楓

楽

2 出

夫の掌出ない程 就職難の まっ ただ中に甥二人 度に翔んでおく

淡白な愛で長持ちする夫婦

夏を越す味方そうめん冷や奴 尊厳死も 13 がやっぱり安楽死

へ涙で越えた坂がある 倉敷市

小

野

克

枝

火砕流見てい 無いやさしさを見た星 あ か

妻に 祝盃

仕事の鬼が白いベッドで鶴を折る る無力なる神 上 n

野良犬に犬小屋のある友ができ

ぱり江 川より 江 夏 取

> 新 家 完

> > 司

鳥

県

6

市

高

橋

千万子

実篤の 切札 文机の夢 畳には座ろうとせぬ脚線美 靴下が濡れて別れを予感する ジンクスを知らない鴉が鳴いてい 男です絵になりたくて樹に上る 膳を向けかえるとどれも許せそう 会うて来て家で味噌汁炊いてい 極楽の暮らしに飽いた大あくび なけなしの金をはたかす深情 弱点を見抜いたらしい変化 見境が無くてよそよそしい態度 聞き慣れたせりふで幕が下ろされる 八十歳加速度つい あと始末終らぬ内にまた女 多事多忙感謝と怒り入りまじり 先が見えすぎて裁鋏はかどらず 食卓のビールに植 やな事聞いた耳ショパンで洗う に万事を託す正 絵 皿愛して出世せず 朔太郎の月が出 た下り坂 木の水思い 念場 る 球 17 3 本市 3 市 市 矢 楊 永 田 野 # 俊 佳 子 南 髭と爪 六月の 散骨は初めてキスをした場所に なにもかも中途半端で 衝 お芝居の 梅 原 古 クーラー 動買 雨 晴間も一 緑

老化の目をこする つ欲しい洗濯 寝屋川 市 江 

水虫かゆい黄線上を往き来する をあざ笑うようヒュー ズ飛ぶ 安 藤

の道に番号つけないで 豊中 市

寿美子

自分史にかかせない 余生には余生のつき合い方があ 爆忌暑さに耐えて歩きます 13 腹い 誘いへ万障繰り合 せ 買 10 の服 のは祖母と ば か n 母 n

い知恵をしぼって今日を生きてい 尼崎 市 3 春 城 武 庫

八連隊にならい阪神Jリ 寡婦の部屋グラスが二つ置いてある 齢にかまわずよくのびる ĺ

尼 崎

市

春

城

年

代

風呂敷包み抱けば亡母のうしろ影 くちなしの闇 がらくたの中で命をいとおしむ じこと二度言うてると思いつつ の深さの暴れ梅 終りそう 雨

度

坊

1

一泊できれいな水を見 商店街 幸福 昼食 三猿を守っ 亀石の感慨 股 仲良しの友と並 下駄のない家にゆかたが届けられ 世渡りの下手さ加減を賞められる 親たちをいつも泣かせる親おも 女たちの煙草に巻かれてる男 善人が集う職安の人 ここだけの話を聞 木偶なりに歩いた道の九十九坂 資 炎天下蘇洞門めぐりの缶ビール 産 泊できれいな水を見に出かけ カピカの柩車でこころ休まらず 0 ゼロ の木の幸福 の記憶消えないにぎりめ へ遊覧船の時 ぞき緑 全部休日 冷奴 で気楽 L た母の花作り 騒がし たたる雨 小な遠 んだ墓地を買う てなんだろう 刻表 いた傘のうち だかり 花 い世相 E h 火 が だ晩さん会 n 名古屋 大阪 奈良県 尾 市 市 市 越 宮 津 守 中 西 村 枯 弥 柳 紀美代 生 梢 伸 許さねば明日からの絵が描けませぬ染まらない染まりたくない白の自負 ジー ああ 許さねば明日からの絵が描けませ 仮 ウエストのくびれもけだし秋に入る なんとなく危険な夜の流 忘れたい 花 義理堅い明治の人と馬が合い ガ よく見れば花の開きは震えてる 女みなきれいに見える目 あわれなる妻ソックスをはいて寝る じいちゃんの特権であり物忘 あ 来語 ス灯 あ 刀彫りの の世を散歩と思うこともあ あるくら 無 の開き女のエロスかな い骨と死んでも言われたい しんど外に言うことないですか パンの勝ち気私のキー 情 ローマ字だけです内緒です 0 荷 事が旅までし 風 深さは祈りの 所によって雨となる の世界散 豊かに盆 つけ 步 深さ す このつか n 灯 星 籠 ワード 糸 # n る 今治市 笠岡 西宮市 H n 市 市 市 松 奥 林 越 野 本 田 忠 2 甦 光 水

U

晴眼 呼び 部 物足らぬ顔で待ってたおとうさん 青虫よ綺 戦盲 老い 神さまに聞こえるように声にする 靴底に支えられている今だった 渚から戻る砂まみ 体内の環状線を走る美酒 影武 秒針 コップ酒隣のチビリへいらい ネギ刻む音なき朝のパン寂 脇役に徹して夢を遊ばせる 裏金が動くと動 終止符を打つのが怖い安楽死 間 寿迎 屋 0 止 抜けるトンボは母か忌が近い の表情までも読む夫よ たるか文字から雑になってゆく のもろいところに杭を打 者が笑い袋を開けたがる の速さ余命 夫から音を消さないで え酒を止めとは何 めてすみませんとは人違 麗になっ く陳情書 を考える て帰ってこ n の羅 事ぞ 漢 東大 0 美禰市 米子市 根県 42 (阪市 安平次 林 堀 森 江 F 荒 芳 弘、 子 介 道 論 父と呼ぶ 本棚 新築の 幾山 新し 胎動 溜 都市 この辺で妥協を許す仏の手 情念の雫を受ける破れ 高速に乗れぬ男でコンマ以下 ガ 嫁選びよりも念入れ靴選 現役の証拠だモンロー 宝くじ美女が売るから買いに行 空港で鳥獣戯 八月の海が奏でる鎮魂歌 不精髯小さな誤解庇ってる 弁天様見舞う病もうわの空 冴えた眸 息を一気に吐いて薊悄げ 育ちい 12 F. 42 0 河越えた夫婦にある温み 風に 並んだ本は酒が好 マンみたい 家に中古の夫婦住 海で明日 名前を娘が が夜とかけっこして 乗りたい六十路坂 つも花束携えて 画 の渦に逢う への夢を抱 12 母が娘と並 プレゼント 愈 歩きする ž います 弘前 弘前 黒石市 弘前 び < 市 市 市 小 相 村 真 喜 内 寺 馬 H 花 善

保

實

花

峯

さ中間ん	び治家の脱税腹に据えかねる 無位無冠酔って啖呵を切っている 無位無冠酔って啖呵を切っている であるきっかけくれた師の言葉 である。	十和田市 阿 部表の外の一十和田市 阿 部長術館 少し女が嫌になる まりも小さくずるい女の脈 変よりも小さくずるい女の脈	行児は一人もいない杉人形作るも丸い石がよくの医学支えるマウスである地の一人の誕生日	十和田市 斉 藤
	和香子	пь	T.s	TOPS:
	子	進	叶	劦
水	例えばの話が刺さった目を見つけ 例えばの話が刺さった目を見つけ を良町の墨の香りの辻をゆく かしてと妻の愚痴 は単さ かける かけん はの話が刺さった目を見つけ	大和高田市 岸 大和高田市 岸 大和高田市 岸 大和を剝くひとの不幸はすぐ忘れ なかあわと思慕閉じ込めて高島田 あわあわと思慕閉じ込めて高島田 はいい とごと沈みゆく封の字	無放ちやる を を を を を を の で の の の の の の の の の の の の の	弘前市 佐 公
	谷	本	葉	治
9	た ず 子	豊 平 次	樹	千加子

冷蔵庫の奥に佃煮忘れられ	祭果てほんの一膳お茶漬を	真剣な顔して聞いてる医者の嘘	女二人猫一匹でマイペース	お隣で昆布炊くらし昼下り	大阪市 大 塚	佃煮は亡母も好んだこの老舗	佃煮と茄子の浅漬けあればよし	引導は渡さず逃げ道あけておく	虚と実の狭間を演じ切る役者	澄んだ目を信じ連れ添う五十年	高石市 浅 野	気遣いが過ぎて自分を見失い	嫁ぐ日が近づき急にだまり込み	梅雨じめり犬も退屈よくほえる	私より役にたってる孫二人	通院も仕事の内と雨の中	箕面市 坪 田	城下町昔を偲ぶ鷹匠町	鶯が語り合うように鳴きつづけ	梅雨晴間 山法師の花もすずしげに	水かけは朝の挨拶 釣忍	丹波太郎今日もむくむく立昇り	姫路市 人 見
					節						房						紅						翠
					子						子						葉						記
犬も子も生き生きとして走る浜	腹のいい人で寝付きがとてもよい	いい人だったとしみじみしのぶ一周忌	半日は潰す覚悟で医者へ行く	猫が子を産んで家中和ませる	米子市 石 垣	義理でした見合い金婚式迎え	冗談へ心電図まで乱される	逢うてきた赤いネクタイから余韻	きつい坂父のジョークも出てこない	弥陀の声聞きたく窓を開けて待つ	米子市 小 西	計量器使うとプロの勘狂う	雨戸軋むふたりの城は事も無し	朝顔の蔓は越境許される	宗教と占い流行る世紀末	ユニホーム着ると連帯感が湧く	宝塚市 丸 山	御仏は指切りなどはなさらない	ひととおり褒めてお義理を済ませとく	病人に待たれ忙しいヘアブラシ	真ん中は何時でも損な役になる	踏みしめて歩くのだよと天の声	寝屋川市 岸 野
					花						雄						よし津						あやめ
					子						Q						津						め

	米子市 田 中 亜 弥リフレッシュしたくてバーゲンにもまれる 心打つ話たくさん聞いてくる これからの十年などは語られぬ 三日 朝歩き樹々からもらうメッセージ	米子市 青 戸 田 鶴 新看板で中身をごまかさないように(選挙) 心の中を流れる川に憶う旅 心の中を流れる川に憶う旅 も おたくしの尺度	水面ゆらいで一匹の蛇立ち上がる 水面ゆらいで一匹の蛇立ち上がる 水面ゆらいで一匹の蛇立ち上がる	米子市 林 瑞 枝
三行半を書く 今週はあなた へのでんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんだんが しゅう かいがん さいかん さいかん さいかん さいかん さいかん さいかん さいかん さいか	思い出は夕日が残る海が 根槌をうまく打つのも芸 相槌をうまく打つのも芸	音のしない家にでがいる。	タ暮れの鏡に笑顔 タ暮れの鏡に笑顔 を結ぶ幸へ小枝	
乗れそうな波を待つ間に耳そうじ今週はあなたが皿を洗う人今週はあなたが皿を洗う人子を叱る姑にも分かるよう叱る子を叱る姑にも分かるよう叱る	<ul><li>株子市 相槌をうまく打つのも芸の内 人許す大きな円をかいてます 底のない船でも漕いで生きてます 底のない船でも漕いで生きてます</li></ul>	来子市 あなたの元気少し疲れて下さいな が差点他人の顔ですれ違う で差点他人の顔ですれ違う でがる があれて下さいる ではない家に向日葵咲いている	夕暮れの鏡に笑顔足してやる 実を結ぶ幸へ小枝もたくましい 気の蝶をさがして野末まで 幻の蝶をさがして野末まで	米子市
うう るい月で				米子市 寺
うう るい月で	米子市	米いる さいる そう た	米子市 る	
うう るい月で 夜	米子市	米・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	米子市金金	寺

<ul><li>魂もわたしも眠りたい夜だ</li><li>妄石に腰かけてから聞くはなし</li><li>大地人透明にして秋立ちぬ</li><li>大地へ透明にして秋立ちぬ</li></ul>	間に合うかも知れぬ世論の安楽死 野幕の明日を恃まぬ小さき花 姿婚に波長合わないまま辿り は線の凜と奢らぬ濃紫	連休あけのタイムカードをたしかめる 耳と目の戦が続く机上論 耳と目の戦が続く机上論 は根の芽が出ぬままの負けいくさ は根の芽が出ぬままの負けいくさ	下積みの汗を太陽見てるかい でネキンの乳房よ疼き知ってるか 政治家の欲など神よ聞くでない なだをの嘘許そうか	鳥取市 両 川 洋
	螢	杖	たつみ	Q
見え透いたお世辞年甲斐なく燃える 長電話お国訛りに妻弾む 嬉しさのあまり自慢をしてしまう がの続き読んでくる	神さまの結んだ紐がほどけだす神さまの結んだ紐がほといたといれ道に都忘れが咲いていた。まれ道に都忘れが咲いていた。	高取県 が大の位置が私の目の高さ がにも影にもこの身置きかねる が成の位置が私の目の高さ	りまっぱけな家を揺さぶるほど笑う を算用に選挙事務所が浮いている がーマネントみたいな声を妻が出す うちの金庫の腹はいつもぺこぺこだ がの日の夜になっても何もなし	鳥取県
	美	江	森	土
	田	原	Щ	橋
	旋	とみ	盛	はる
	風	お	桜	お

ストレス解消 孫に電話を掛けているがん告知 花の種にも見放されがん告知 花の種にも見放され	親切を破ってからはほんものだり染めて若い笑顔になりましたと会うではないのの奥をちょっぴり喋りたい	<ul><li>気象庁お見事でした午後の雨</li><li>気象庁お見事でした午後の雨</li></ul>	は大婦仲良く踊り切る をの蝶 哀しいほどによく笑う をの蝶 哀しいほどによく笑う をの蝶 哀しいほどによく笑う	鳥取市 春 木 圭一郎
団体という保護色にまぎれ込む一合の酒に仮面が溶けてゆく一合の酒に仮面が溶けてゆく	山ゆい涙	ち的 を書 とって	灯を消せば幻想が湧く思慕がわく 好を強んだ誇りひとつの幸だろう 愛鳥の死をみとどけてむなしき日 愛鳥の死をみとどけてむなしき日	鳥取市 西
	本	芝	端	原
	朱	登志	三	艷
	夏	代	男	子

以前から巣食う要素はあったのよ安静で恋の病は重症にあんまりでセールスマンを意見した臍のゴマあなたへの夢醒めました	痴話ゲンカそれから天地かえされる 和歌山市 宮 口	ふっ切れて小豆ことこと煮ていますドアの音(不協和音をそのままに)アドリブで急場を凌ぐいい度胸(女対おんな朱の帯止めにひそませる)	ンナがここにも居ます赤ちょうちん	報りない心で蒼い樹に抱かれ カラフルな薬もろうて夢が消え のラフルな薬もろうで夢が消え	A かっかっ言葉になっしか 剤撒きますこころの隅ずみに 風のタッチで愛の花ひらく 和歌山市 福 井	<ul><li>ぼんやりと見てる燕の餌運び</li><li>ブランドを着ると気負いの出る歩幅</li><li>腕時計見る癖がある元教師</li></ul>	自衛本能不味い相手は目を逸らす 和歌山市 桜 井
	克		禾	准	桂		千
	子		f	F	香		秀
にして怒った父の謎がとけ年へ限界にきた親の脛手他人の癖を言いたがる	口を切ってチャンスを	歯車の惰性がつづく定年後無信仰でも掌は合わすお葬式老いの春効いた気もする蝮酒	n In	Ц	満だだい	海道を大阪弁のバスツアー走路見えて安堵の飛行旅大な土地に人情あふれ旅楽し	カムイコタン車椅子押し息切れす 有田市 松 井
	鉄		声		保		か
	. 2/1		1 to	-4	1/1		13

州

夫

治

の敵はやっぱり同木に憩えば眠気小るめく不倫テレビるの元は貧乏ゆえの	の亡母に見	老兵の作法飯粒残さない老兵の特技新聞完読す	唐津市 仁 部 四 郎バラ色もまだ残ってる絵の具皿 門高下貯えなければ憂いなし 王様の片腕知恵の占い師	第とれば腰は自然と伸びている 権友で明治生れが一人逝き 権力で明治生れが一人逝き をある時間では、 ・	唐津市 田 口 虹 汀
も生徒も親も子たさを溜めてるすれば納得して集散何やってる	で帰る男の面子かもっていいなみどりの	玉葱をいっぱい吊るしひとり者あの人の笑い上手は何故だろう男性は不潔(父さんまで不潔)風の優しさ風の怖さよいま実る	開け物忘れて話し込んでいる お遍路の人に言えない業を抱く お遍路の人に言えない業を抱く は過ぎて姉の出番なし	来さをおろし農 家を下さい敗戦 かに蟬鳴きつく	唐津市 浜 本 義 美

町プラを娘が付き添うたとも知らず古本屋の本掘り返す趣味があり古本屋の本掘り返す趣味があり大雨を歩き車に拾われる	山かに れ	から別れて悔いの日が続いたで歩く夢見る車椅子が足で歩く夢見る車椅子が足で歩く夢見る車椅子が足がある。	い言葉半分嘘で埋め 代住んで平和な音にす みを笑いつづけるのは で手がない。 の家系に四人の老姉妹	4
Ξ	1	井	荻	矢
污	₹	上	野	内
平		柳 五 郎	鮫 虎 狼	寿恵子
できつめてみれば 地の底の声をきい 地の底の声をきい を を り で り で り り り り り り り り り り り り り り	多いのと少ない言葉にもが、柄でも目に物見せる舞不便さはまとも座れぬ痛のが、	しき真こ位て砂爛ぼ無	不器用な腕にま 手の内を知られ 洗い晒しの好き がい晒しの好き	
に は かっか は ま かっと かっと かっと ろり 雨の 音 で しかと ろり 雨の 音 で は だれも 悪くない と は ま かっと からしか と のり 雨の 音 が よく 喋る	困 む 声 の 梅 る 臑 だ み か	節るものがない 色を見てもらい 日本海の恋 岡山県	を を な が に まかせて 置く命 に の 好きな 夫のやせた 肩 を が の が れてからの 猿芝居 の が れてからの な で の ポスト の が れる の が の が の が の が の が の が の が の が の の の の の の の の の の の の の	岡山県
だれも悪くない降り止まぬーがよく喋るーがよく喋るー	困 む 声 の 梅雨 る 臑 だ ろ か が	るものがない は言わぬ自尊心 を見てもらい 本海の恋 の水が舞い戻る	して夜のポスト して夜のポスト たまのやせた肩	Ш
だれも悪くないとろり雨の音がよく喋る出まぬ	困 を を を を を を を を を を を を を	るものがない を見てもらい 本海の恋 の水が舞い戻る 岡山県	かせて置く命 で大のやせた肩 な夫のやせた肩 な大のやせた肩	山県
だれも悪くない にあり にあり にる火の女 にる火の女 にも、 とろり雨の音 とろり雨の音 とろり雨の音	困る語がある	るものがない を見てもらい 本海の恋 の水が舞い戻る 別山県 池	<ul><li>たの生返事</li><li>できのやせた肩</li><li>なきのやせた肩</li><li>なきのポスト</li><li>倉敷市 田</li></ul>	山県山

ちぐはぐな若さも楽し子の古着	通い婚 許したわけでないけれど	女郎花 盆花の名で里に咲き	どんぐりの顔で兄弟かばい合い	扇風機 仲をとりもつかの如く	出雲市 板 垣 草	結局はケツネウドンとなるメニュー	バーゲンのチラシに弱い女偏	旅に出て心の殼を割って来る	愛されていると自惚れ妻でいる	確かめる愛に視線が惑わされ	出雲市 島 祥	紫陽花の藍は孤独の相がある	薬草を軒に吊して病んでいる	一・五K肥って皺が未だ消せぬ	女偏 意地を晒してもめている	亭主関白守り通して米寿とか	出雲市 園 山 多賀子	世に合わせきっちり生きている鯰	遠浅のギリギリで逢う亡父と亡母	辛い日を励ましている遠花火	咲いて散る花は言い訳などしない	一時を極楽にする缶ビール	出雲市 尼 れい
					丘						庵						具子						じ
老いの愚痴を括弧に入れて解いた式	低周波も聞こえる耳で不眠症	親切な伯母だが恩もきせたがり	留守に娘が来たらし皿が洗ってある	全力で守ると園児のおママゴト	出雲市 伊 芸	出た杭に縋る人あり叩く人	おすわりも待ても僕よりポチが上	欠点も長所も知って夫婦です	妻だけが我の偉さを知ってくれ	子の居ない暮らしに慣れてきた時計	出雲市 竹 公	普段着が似合った今日の暮し向き	欠点を盾に間口を塞がれる	持ち味が最後のまとめしめくくる	若づくり鏡は素顔しか知らぬ	ご近所の雀の声はよくとおる	出雲市 久 公	掘り出しへ値切り上手な妻を呼ぶ	裏山の雲はわたしを見捨てない	決断にもう余地のない至近距離	譲られた席で車窓の富士貰う	いつもの場所をあした天気にしておくれ	島根県佐々十
					藤						治						谷						木
					寿						ちか						まこと						鳳
					美						ĩ						_						笙

	一団の中に弱気な僕がいる					大器晩成のんびり孫に期待する
	ニヤニヤと何がうれしいのか総理					女どうし目で会話する恐ろしさ
	よく動く母に損得ないらしい					サングラスかけると何でも出来そうだ
	善と悪その一線がむつかしい					ほどほどの寿命でポックリ願ってる
	せかせかと列島すこし病んでいる					デパートもコースに入れて万歩計
岩	岸和田市	志子	富士	崎	島	岸和田市
	わたくしを旅にさそったのは雲だ					地下鉄の残土で盛った昭和山(千島公園
	馬鹿じゃないから言われなくても解る				(三)	艪で漕いだ源兵衛渡しいま地下道 (安治
	念願が叶って丸い月を見る					甚兵衛の哀愁きこえる渡し船 (尻無三)
	目立たぬがよく働いた夏帽子					木津川に四つも残る渡し船
	色変わりしても放せぬ夏帽子				船巡り)	大阪に八つの渡船いまも生き(大阪の渡船巡り
高	岸和田市	村	狸	地	芳	岸和田市
	いやな事みんな忘れる孫といる					ボーナスもワイロも借金もなく離職
	愚痴ならべ最後は自慢して帰り					車窓から沿線の墓地昏れかかる
	褒め言葉もらって役がまわって来					厚顔無恥青葉の風に嬲られる
	一仕事終えて麦茶がのどにしむ					極道の果てパチンコに辿りつき
	紙めくる音も湿って梅雨明けず					老い哀し夫唱婦随の便秘薬
原	岸和田市	晴	勝	浦	福	岸和田市
	無器用でせかしてならぬ子がいます					百円を払っておもちゃの汽車に乗る
	万一のひとつに心揺れてます					今もなお亡姑の轍が越えられぬ
	冷淡と言う面かぶりたい時も					亡姑に似た地蔵の前で立ち止まる
5	あくせくはもうよしましょう喜寿だから					顔を見るまでを案ずる雨の午後
	決断の勇気のかげにある友情					水が喉通ると生きた音がする
古	岸和田市	子	桂		岸	出雲市

高須賀

金

太

さよ子

野

U

で

佐

ダン吉

これからもずっと続ける夫婦旅	石狩川はすべて知ってる開拓史	スノーポール冬の厳しさ知っている	オホーツクへ続くか直線ハイウエー	白樺にやっと逢えたぞ北の旅(郵政省永年勤続表彰北海道の旅)	竹原市 森 井 菁 居	青春を戦の中に埋めて古希	寄る年に勝てず涙腺もろくなり	病葉を取って細庭生き返る	古希迎え亡父の言葉をしみじみと	傷ついたのも失ったのも遠くなり	姫路市 中 塚 遊 峰	平和だな男が厨に立つエプロン	老父逝きて母の居場所が揺れてくる	言うままに育てて核という家族	当分は雅子妃ファッション巷の風	後ろ指の恐さ翔べない碧い空	姫路市 丁 坪 サワ子	仮面今捨てた男が堂々	訥々と言葉を嚙んで訴える	カシラッ中したまま並ぶ兵の墓	善処という役所ことばにだまされる	夏の天支えて城も疲れ気味	姫路市 大 原 葉 香	
我慢してがまんして我慢できなくなった雨	日輪が傘をさしてる逃げようか	つうかあとゆかなくなった糸電話	こき使い果ては産業廃棄物	体重をどっこいしょっと持てあまし	島根県小砂白汀	万一がすぐ其処にある交通事故	大切なお隣 意外に密でなし	優柔不断右も左も皆身内	世渡りに昨日の友は今日の敵	幸せは庭木手入れの趣味に生き	竹原市 岡 本 清 水	コーヒーでことたる小さな幸である	街道という名の過去を捨てた道	芳名帳親に似ぬ手が固くなる	すべり込み最前列の席が待つ	蟻もまたお休み貰う雨しとど	竹原市 時 広 一 路	それなりに満たされ中流だと思い	砂時計逆立ちすれば甦り	子守り唄聞かす音痴に眠れない	耳鳴りよ老いを苛めてどうする気	神様が見せてはくれぬ余命表	呉市 槇 田 英 詩	

自分史の花は子供に支えられお祝いに母は感謝の涙拭くっトンナの見える窓辺は何時も開け	という性で蛇口を閉めなおす きていく芸がだんだんうまく きていく芸がだんだんうまくがいごと届かなかった流れ星	は は 団扇の か に ぬまわり	榊 原 秀	島根県西村早苗
犬釘と栗の枕木現役だ 真帆片帆 風を読むのに長けた人真帆片帆 風を読むのに長けた人 車帆片帆 風を読むのに長けた人 でんに かんどく	関れた靴かたきのようにはいている を変の花がいち面バスはまっしぐら なのでは貧しくてよい子の姿 大阪府 大阪府 大阪府	お青褒ボ夏ま春めりの	川根茶が届く絆がまだ続く脚根茶が届く絆がまだ続く	八尾市
	z 山	吉村		宮崎
	隆		千 :	シマ子

尾 市 片 Ŀ. 英

またお会いしましょうなどといい調子 替えのないあなたです替ズボ

美人にもまたそれなりの悩みあり掛け替えのないあなたです替ズボ

湯上 +: 一がり 0 深夜爆音やってくる 素足の色香かとり香

長 生きもそこそこでよい薬 漬 Щ

曜

H

0)

因縁と言う親から受けたアレ 欲の根が深くてシャベ

ルが届かな

Vi

つまみ食いという中の

一つがとりこに

L

ルギー

県

松 村 迷

観子

此

処という

繰りごとをニュースのようにききなれる

相槌を打った時

人

村

明

香川県

木

アンティー

クのアラームウオッチは亡姉

0 形

見

上も下も無いよ好餌に弱い 義理人情よりは人格で選ばねば

人の癌

りは医院へ行くのも無

する

香

県

新

JII

#

工

何時までもやさしい

娘で欲

もなく

夏の夜

本のビール

E

救われ

る H

熱燗を薬にしている医者嫌

折り込みで客を招

んでる日

曜

小 夏

企

業自

転車操業目

が回 n

3

空に少し

浮気な流

星

放

任

半世 紀

成り 嘘でよい まな板に載せる体を磨いとく 行きで通 優 文箱で眠る夫の ĩ 10 言葉聞 た嘘のやるせなさ きた 文

ta

突然の

友の計

報に

身を映 妻 む鳥の

0

顔全快近い

と書いてある

に付き合うコ

1

ヒー五

六杯

頼みごと断る役は

0

役

耘

0

後

ic

0

V ば

群

香

111

県

成

重

てあまえる母が居てくれ

つい

跳びこした所に落ち 攻める手を止 める 私 てい の負 分けに た画 なる 鋲

Ш

県

JII

崎

ひ

か

n

ネクタイが緩 められ ずに平でい る

流された先にあなたがい る港

日 記

読まれても困らぬ程度の 香川

る 青 鳥

県

池

内

か

お

n

ベランダで煙吐 所で逃げ 12 てる男 0 座

掘り返すロマンの主も権 夕立ちに話の続きは から自己 また明 嫌 力 H 悪

香川 県

永 峰

伽

-22

お隣とお喋り電話で一時間	老いふたり小さな円の中で生き	すべり込みセーフの知恵をふりかざす	発掘の耳もと化石が囁いた	それ見ろと言うことばかり行政は	京都市	苛立ちを血圧計になじられる	目に見えぬ位置で利いてる母の釘	我がままを通してひとり蚊帳の外	たかが指輪されど指輪の持つ重み	からませた小指が疼く遠花火	大阪市	戦争と平和見てきた渡り鳥	この辺は嘘と補聴器知っている	呼び戻す約束反古にする本社	さりげなく糸屑取ってからの縁	今頃になって悔んでいる妥協		長あい夢まだ続きます七十二	コンパクトおいしい話へついて行き	軌道修正一夜漬けの正論で	猿まわし猿とはり合う永田町	結果は未知数 夜なべ続ける気	か 奈良市
					都						井						河						天
					倉						上						井						正
					求						白						庸						千
					芽						峰						佑						梢
揚げ花火の中にわたしを潜ませる	スーパーで駅弁を買う日曜日	すこし読むつもりの本にのめり込む	電話口夫婦互いに改まり	留守番電話ひとり芝居に似ておかし	西宮市	選挙カー人間嗤うかたつむり	後続車ないのでほっとするミラー	試合するたびに相手が強くなる	置き方で帽子一つが落ち着かぬ	目の高さ変えて進路が見えてくる	大阪市	椅子か畳か聞いて出欠ひざが決め	自己防衛おかず作りも戸締りも	病歴を自慢のように聞かされる	下駄好きな私 貴女はハイヒール	齢やと言うて齢に合わせることは無い	大阪市	キューポラの青い炎を夢でみる	山梔子の萎れて香り未だ残し	ドラマ見てやさしい言葉欲しい妻	色即是空 梅雨のたそがれ沙羅双樹	妻病んでも衰え見せぬ感受性	大阪市

西

П

12

わる

— 23 —

神夏磯

典

子

本

間

満津子

北

勝

美

		2	/	
	1			
V				

夏本 髪型を変えて女に年は 待ち遠し 10 ネ夏帽子 無し 京 都 市 松 JII 芳 子 青春 巢 血 作 一に燃えて見るかこれから六十 の燃える血を説く燃える人(D社長 りの燕にそっとほめことば 茨木市

物忘 責任の重さつくづく女です 言のねぎらい母は忘れない n 昨日の答えやっと出る 市 Ŀ

小五郎

の恋の鴨川

一夏の床

ジジは安心パパよりもママよりも

岡

市

安

本

晃

授

健康 呆けてると妻は淋しいことを言う 法の一つに凝って生き伸びる

プロポ ガラスきらり破れても光ってるいの 眼鏡拭きふきまとめ言葉を選んでる Ì ズあとで気がつく花ことば ち

分 を評 価きっ 2 割は甘 くする 田 林市

片

出

智

恵子

自

エサに食 喧嘩 勝 V って得することもなし つく魚は馬鹿と限らない

子育てに似 に染まって行く娘見ている幸もあり て陶 芸 0 過程かな

梅 ाज 明 H の貌 K 傾 1 花 柘 榴 京 が都市

111

海

友

記

静

岡

県 10

蘭

田

獏

沓

忌が 北 ルリ 海 明 け 霊安かれ > て仏の 0 壁の 崩 供養になる旅 と傷癒えぬ n に似た会議

靴ア

タックする夏旅の地

H 柳

転 職

公者通 下手な妻に段差の 0 チ 10 仲間 + ン \$ ス私 同 E 0 曲 あ 薬包紙 る厨 n 角

医

安楽死 言 Vi 訳 の仮面 なぜか重たい を磨く 蟬 サ 時 ングラス

東大阪市

崎

Ш

美

子

根まわ 生甲斐を探す趣 しは 妻 E たの 味の輪を広 2 であるゆとり げ

ま

父には父 17 んちゃらにまた安請負をしてし 道を知っているのであわて 母には母の道 心があ る な

父の 森林浴カメレ エンヤコラ懐 日 B 下請 か it オンに 仕事は は 夜半 なれ まで 82 僕

氷の た鯛焼き買うて来る 13 旗 現場に会い E ました

腹わ

た

の飛び

出

旗

井 F.

勤

森 生

-24

広島 田 村 新 造

0 氷 が割 n た日 0 歓 喜 (興安領逃亡記

守 軍足に三 日 分ほど粟を詰 80

T

1

ル

栅 ふるさとへ一歩踏み出す棚破る 備隊で四 って機銃掃射に逃げ 年 江 岸知りつくし まどう

条市

西

片 Ŀ 明 水

足音 聴診

がこん

響く

夜の

病舎

器

地 なに

雷を探るように当て

病

舎からメモ妻に書き妻へ書く

灯を消すと病舎を覗く月あかり

臓と明日

は別れる夜がわ

びし

H 市 Ш 本

とつ

お

10

0

思案し

てい

る

吹

返る愛が汚点にならぬよう 傘たたむ未練のひとしずく

今日こそは書こうとペンのひとり言

別れ

0

振

ŋ

予備 人前 に 軍は味方に非ず糖尿病 出ると気弱な影法師

野 市 吉 JII

邓

曳

寿 美

独り

むあやしい翳のな

いように

就寝の畳

一帖今日の

幸

世を捨てていても天寿は取るつもり

手

0

中 棲

0

切

符

が青い

鳥になる

幼稚 ハイ そのうちに浄土が近い 間 ウエ 園 0 また縁 V ーここは地獄に近い 0 ち は り汚職の花ざかり 談を聞きに来る かなし奥尻 カレンダー

生きる日の

限

男と女ボー

ダーラインが蛇行する

若葉この娘もじきに母になる

だんだんと空気になって凡

夫婦

エプロンの端で押さえてもらい泣き

姬

女冥利よ花

あ

か

n

晩学の 足して二で割る答ならすぐ出せる 青春を語 V のちを燃やす本を積 り尽した四 帖 打

烬

曳

野

市

H

中

透

太

信管を抜いて男に逢いに行く も女も濡らす午後 0 ার

切り口上で来る誤 解 大阪市

板

東

倫

子

隣人が

楽し ボ みは洗濯と言う妻 ナスに使途不明 0 明 無 細 欲 書

傲慢な返答 行も役所も休み父無 年金老人課

寝 屋川 市 柴 H

7 スカッ

英壬子

D 市 水

守

原 静 歩

島

とこ

治 市 野 村 京 子

続 < つの 笑 12 罪 袋 か 0 まぎれ 底 が 濡 込 n to

雨

日 期

自 画 0 像 弱 が い鬼と仲良 乾き切っ てる遠 3 する落ち目 花 火

競っ てはならぬならぬと水中 花

尼 临

どの

部

屋

0

ŋ

えて歎

至

抄

てか 灯

3 j

<

餓

紙

生きてある限り 妻も子も寝

0

八月の 開 消

記憶 鬼草

派洗う

嘘

つきが

10

る

顔

洗う

市  $\mathbb{H}$ 

中

薫

叱ら 寿 開

れている最中

iz 0

出るくし 前

4

2

正に父は十年先を言

17

放

つことを最初

に旅がえり

0

字写

L

7

我

自

司とってテレ

ピ

の砂

か

ぶり

方円 或るときは 0 水も

形相 貧

変えるとき

しき

貌

0

朝

鏡

阪

南

市

坂

公

子

意志貫 塔も母 、徹哀しきまで燃焼す 0 L 1 涙

だけは金輪際と言 眩 いあと

いなが 6

高 知 県

赤

111

菊

野

スー 度も着けたことがない

7

タニティー

ドレ

黒枠の亡夫がだんだん若くなり

人旅 太宰治をふところに

矢印 国 0 方へは行かぬいごっそう 続 にく線路 が見えかくれ

我が心

悪魔住んでた時

期も

あ

n

美人ではないが安心できる妻

番 す

台 ~

0)

目

など平気で脱

でる

娘

り台

子供とすべ

、ってい

る無

職

大阪市

中

西

治

郎

逢 顔

之之ぬ

日が続い

て川は深くなる

盆

栽

澄んだ心

ではさみ

入れ

余白にまだ欲 抜けきれず

市

柿

花

紀美女

0

読んでスト 髪型変えて服変えて V スー 寸消え

刺漫画 すみ は 雨 肚も心も据 0 1) ズ 4 0 老 わってくる 0 部 屋

寿

33

0

H から

藷 帰 汗

植えた夜に恵み

0 土

雨

貰う

り道 無駄

袋

0 陽 瓜 0

郷

産

よくできた胡

直

ぐぶら下

が

3

欲

求 生

不満

て

ない

の恵み 真

自

1家菜園

往

き帰

り八

+

ハンドル

気

をつけて

高

知市

北

III

竹

萌

信 な 寝屋 Ш 市

堀

江 光

子

V

早灰朝皿 釈信 今朝 青 近道を行こうとすれば道ぶしん 逆 懸命に露草咲けり孤 橋涼み会釈を交わすだけの 七夕のこよりに老い 调 折 カルシウムだけはしっかり摂ってます また訃報 ファイトには待っ 愛の終りを静かに見てる立ち 時々は終焉の日思う夜の底 炎 カメラ見て握手するとは無神 吊 刊誌持てば忘れる夏上衣 折 ゆるも 士 のネクタイ 眼もゆかた姿の祭り笛 りの作業ズボ は黙って夢に逢いに のうつ受診気になる家を出 の空気ながびきそな話 て夫と違う趣 居士とスラスラ経木書き の知らず凡凡で来た人生 雲あわただしあわただし デートら ンに梅 たをかける骨粗しょう の中で 味 の得意顔 小の道 雨 しい柄 仲 晴 経 あ 間 大阪 奈良県 お 田 市 13 市 市 長谷川 栗 黒 藤 H 谷  $\mathbb{H}$ 春 頂 真 春 留 子 蘭 子 砂 窓際に 塩鮭 前夜 老母 反対 Ŧi. 額 下り坂女優そろそろ脱ぐ頃だ 栄転で過労死の椅子待っていた 晴耕雨読時々酒も呑んでます 梯子酒月を味方にして帰 脇役がときどき花の夢を見る 六 朝 通 センセイ検察庁からお呼びだす 愛犬が苛められたと告げにくる 名人がリズムにのって蕎麦をふむ おとぼけでない本当のもの忘れ + 顔 1 + いて相手そらさぬカウンセラー から ·坂五 の残高気にせず生きてます を焼いて女房と二人きり 0 が よりも の意見呑 ゲンセール軽 いても仕事はさせられる 鏡に亡父が亡母が棲み 梅雨明け待っ 十の花 セリフを練った喫茶店 b み込む たしの物忘れが怖 が咲け V お てたように咲き 財布の紐ゆる ば 茶 に む 羽 # 曳野 42 む 市 市 市 市 榎 大 Ш

本

蕗

児

本

吐

来

美

穂

野

武

太

姿見は正直すぎる程しゃべる美しく齢をとりたく八分目嫁姑ほどよい距離に桔梗咲く老いの坂ファイトも時に空回り温暖化風と桶屋で地球病む	角で選挙の戦の委員	でごまった/ ませい合いの雨も昔は唄ってたの雨も昔は唄ってたくりが好きで続けるアルバイト	に立て母がシャンプーを使い切る 一日の幸せ包むポリ袋 一日の幸せ包むポリ袋 一日の幸せ包むポリ袋	<ul><li>養理堅い子の泣きじゃくる黙秘権</li><li>野負事止めても女やめられず</li><li>脛に傷 噂が走る北新地</li><li>耳よりな噂を肴に飲む屋台</li></ul>	奈良市 米 田
	櫸	1	喜		恭
	子	Ē	<b>五</b> 九	輝	昌
定年退 解りや	透理明想	! 糸 西 ポ ! 電 成 ケ	ネ 短 一 戦 遺ジ 命 匹 勝 伝	負一酒人体	
定年退職してから女房の運転手惚けて欲しい人が元気な総選挙強奪した領土を盾に強請られる解りやすい川柳 三太郎が好き現世よりあの世に友達多くなり	明な水には住めぬ鬼となり 仙台市 川 村悲には遠いか妻にある笑顔	話孫の内緒がすぐ洩れる でどん底までの距離を知り でいに切られた情を追ってみる	ジ山を一つ違えた行きづまり にになってしまった金魚鉢 匹になってしまった金魚鉢 匹になってしまった金魚鉢	だけて勝つあれからずっと負けているでかれた俺に訳など聞くでないでかれからずっと負けているの世は不思議千万逆も真	北九州市 梅 田
退職してから女房の運転て欲しい人が元気な総選した領土を盾に強請られやすい川柳 三太郎が好よりあの世に友達多くな	な水には住めぬ鬼となり 仙台市 川には遠いか妻にある笑顔	話孫の内緒がすぐ洩れるでどん底までの距離を知りでどん底までの距離を知り	山を一つ違えた行きづまりになってしまった金魚鉢になってしまった金魚鉢の宴のあとの内輪もめ	で勝つあれからずっと負けているの虫ですタバコ酒を断つの虫ですタバコ酒を断つがまでない。 の虫ですタバコ酒を断つがよれなど聞くでない。 では不思議千万逆も真	州市梅
退職してから女房の運転て欲しい人が元気な総選した領土を盾に強請られやすい川柳 三太郎が好よりあの世に友達多くな	な水には住めぬ鬼となり 仙台市 川 村には遠いか妻にある笑顔	話孫の内緒がすぐ洩れるでどん底までの距離を知りでどん底までの距離を知り	山を一つ違えた行きづまりになってしまった金魚鉢になってしまった金魚鉢の宴のあとの内輪もめ	で勝つあれからずっと負けているの虫ですタバコ酒を断つの虫ですタバコ酒を断つがまでない。 の虫ですタバコ酒を断つがよれなど聞くでない。 では不思議千万逆も真	州市梅田

悟

郎

喜代

朴

竜

てる

もう何も言うまい子らの古机	病休がやっとみつけた腹の内	口げんか親子夫妻の紐結び	終りないシナリオがある父の靴	高知県 小 澤 幸	メモー枚白紙で置いて留守をさす	辛い事炎天下の旅 嘘に会う	予告せず行けば不在へ俄雨	カメラアイ覗いてストレス人を撮る	岡山県 岩 道 博	裏方の汗に気付かぬ文化賞	やんわりと矛先かわす京訛り	善人にされた仮面が外されぬ	若作り女心に齢はない	藤井寺市 中 島 志	漂白のできない過去が邪魔になる	独身もいいと焦りを慰める	捨てようか迷うて底に置く手紙	旅余情ところどころに恥をおく	米子市 白 根 ふ	台風が去ってショパンの曲躍る	フルムーン浴衣の妻のたおやかさ	まな板のリズム十八番の唄流れ	もぐら叩きスローになった日を重ね	富士宮市 渥 美 弧
				泉					友					洋					み					秀
反骨の尻尾はたかく立てておく	美男美女そろえ新党花ざかり	にんげんを長くやってるから解る	車座でみかんと生きる話する	広島県	お通夜はみんな笑って下さいよ	いのち細ぼそ呼吸ほそぼそ梅雨降る	知らない顔が覗いていった真昼時	老いの耳にも安らぎの子守唄	松山市	潮どきが来たと団交の手を握り	宮沢にへつらい議員は捨て児化し	新興宗教彼の手此の手と亡者呼び	お若いと言われて見ても九十二	八尾市	嘘をつく医者が持ってる人間味	物を持つよりむつかしい減らし方	先生の子供が塾で叱られる	誠実な人だと分かる手の温み	藤井寺市	墓掃除終えふる里の岩清水	裏方の努力でダルマ目が開き	むっつりと墓石洗っている男	闘病の中で見つけた生きる知恵	七尾市
																			1					
				藤					谷					鶴声					福					松
				藤解					谷					鶴声庵					福 元					松高
									谷 真風					声					_					et come

身から出た錆がぼつぼつ浮いて来る	自然美に溶けて佇ってる石地蔵	山の宿旅の詩人が動かない	賞味期限切れて女が浮いている	鳥取県	蠅叩く女房おれの尻も叩く	横着をするほど狭くなるゆとり	避妊術なんかなすびの花知らず	散髪屋が世間をひろくしてくれる	鳥取県	着いて来い言ったあなたにまかれちゃう	再会に未練の糸がまたもつれ	蛙の子親をとびこす手を覚え	赤トンボ盆が来たよと宙がえり	鳥取市	老いてまだ大きな声で海語る	汗という宝を持っている自信	円を描くことを覚えたばかりです	鉢巻のなかに男が住んでいる	鳥取県	話のつじつま合わず共にボケ	性教育 娘めとうに知っていた	お説教も上手エッチ話はまだ上手	衣ぬげば和尚も人並の社会人	諫早市	
				幸					乾	う				前					西					原田	
				家										田					浦					メイ	
				單					隆					_					小					メイシュン	
				車					風					枝					鹿					ン	

山間 の紙漉き唄を生む風土 託 ほど金は持ってない に合わした予定表 というリサイクル

見える辺りに宿をとる 尾ヒレの長い話きく が恋しいグライダー

鳥取県

上

田

俊

路

止めよう年を取りました まない病父を見る辛さ 金はないけど趣味がある ひとり旅 鳥取 鳥取県 県 田 石 村 谷 きみ子

もめが唄う子守唄 が大きく酒と書く 太い絆がもろかった

大 角 代

かけるとハイハイが早くなる(うちの双子たち) 木 公 弘、

笑顔がひとつふたつある

ズが似合う夏衣

鳥取県

鈴

たみ五感を甘くする

ここいらへんでつまずいた

鳥取県

学はいらぬ労働歌

えたり雲の

-31 -

鳥取県	さえき	や	え	鳥取県	津	村
ありがたや梅つけなされ食べなされ				親切にされたあの日の恩がえし		
へそくりの夢 点滴に消えてゆく				母さんの笑顔菩薩にそっくりだ		
ねられ				大声で漢詩をうなる幸せよ		
利金とは名のみTシャツ買ってチョン				いい種をまきたい生きて行く道に		
鳥取県	乾	喜与	志	出雲市	石	倉
父の倍生きても父を追い越せず				おばたりあん自信に満ちた笑い声		
父の歩いた世界十里の西ひがし				上げ底の男と知った生姜糖		
ネオン消す喜び天ノ川仰ぐ				めくるめく歳月ゆっくり蓋を取る		
あの女の紙人形も年を古り				愛故にときどき意地悪したくなる		
鳥取県	羽津川	公	乃	出雲市	小白金	金
そこそこの妻で落第点もある				須佐之男も大蛇も汗拭く舞台裏		
根を下ろす土がなかなか決まらない				目くばりが早い男の胸算用		
逆境で友の本音を見てしまい				ボーナスはないが育てた子沢山		
先祖から清貧という血の流れ				より分けて玉葱つるすあかね空		
鳥取市	岩原	喬	水	出雲市	板	垣
居眠りの議員に手当ついている				整形をして血縁の血をうすめ		
成婚の年に金婚式ができ				腰据えて飲めよと激し雨の音		
強敵も金が味方に寝返らせ				汚しては暮らしを守る作業服		
アデランスつけても皺はのびません				脇役が陰で立派な力だす		
鳥取県	黒田	<	に子	出雲市	小	玉.
蕗味噌へ嫁のぬくもりよく香り				もしかしてガンではないか乳房抱く		
過疎に住み山菜たっぷり食べてます				菓子折りで小さな溝を埋めに行く		
女は菩薩 乳房ふっくら満ちてくる				水割りへ女一時油断する		
土曜です今宵菩薩へなりましょう				好きだから他人行儀な電話する		

夢

酔

房

子

満

江

芙佐子

新の川の流れに落って始かくる 気取りともとれる和服の裾さばき 見えぬ紐とけては結ぶ内緒ごと おろうそく信心ごころ預けます コスモスの強さ少しは学ばねば ドラ鳴ってからの涙がやっかいで ボトル一本ゆっくり変える人脈図 ざんな過去だろうか口に出るお金	ループで四時には帰る娯越しのあいさつ素顔よろいープで四時には帰る娯なる。 しい権が潰がって里がく	腰に急げば負担限の話でアレも	を おわる静かな海の藻がゆらぐ 恋おわる静かな海の藻がゆらぐ 恋おわる静かな海の藻がゆらぐ かんしょく	
小	北	玉	エ	富
倉	山	井	藤	田
P	好		吟	蘭
#	笑	太	笑	水
何回も戴材させているカメラ 何回も戴材させているカメラ ささやかなお願い晩酌もう一本 ささやかなお願い晩酌もう一本 吹田市 嘘だよと思おうとする百か日 嘘だよと思おうとする百か日 嘘がよと思おうとする百か日 で田市 ない糸 四十年もよくもった	(外のちょっと佗しい缶のくあじさい絣模様に庭のくあじさい絣模様に庭のです)たいで	くだみを干くだみを干	吹田市 最低のルール守って住むマンション 長雨に抜歯の痛み取れぬまま よく伸びたGパンにまた追い抜かれ	
井	藤	古	茂	堀
上	井	市	見	
照	正	三	よ	良

江

雄

子

天狗さん壁に当たるも鼻のせい母の嘘すぐに感ずる外出着母の嘘すぐに感ずる外出着	必要な梅雨に被害もついて来て 井	ぜてあしたの味誓う医者の梯子に疲れて出ても良いよと言う	ノフョル	か 年 か あ お	しきたりの重さに光る伝統美 み殴す 池 音		ス券つかっごきごきしてるん」日銭ほしさについたものうのこうのとまだいうの	政治屋の烏合離散に国憂う 政治屋の烏合離散に国憂う 政治屋の烏合離散に国憂う	ÆΠ
	東		柳		ح	2		忠	瑞
	雲		右子		<u>ا</u>	きと美		雄	穂
話すこといっぱい溜めて友と会う手の上で踊らされてる振りをする追伸に女心を読んでいる	かろうじて昔を残すふ	ら というしてもわたしにうしてもわたしに	į	アイシャドーだけは入れたく刻む音今朝はリズムにのって許す事になれて自分を見失う	さぐり	二次会で妻のリモコン故障する	付け人の背中に乗ってVサイさむらいがミルク飲んでる映献立を黒板に書く縄のれん	見学の真珠溜息だけにする人の人を偲んでいる画廊はやいる画廊では、	
友と会う	る里だ 芦屋市	だい出す たい出す	米子市	れたくない古されたくない古さ		故障する米子市	てVサインのれん	にする大阪市として	
友と会う	る里だ	とするがあ	米子市	ない なる 古	う <u>デ</u>	大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大 大	ン画	さしく	大阪
友と会う	る里だ 芦屋市	とするがあ	米子市	ない なる 古	خ ر آ ت	子市	ン画	さしくて	大阪市
友と会う	声屋市 黒	とするがあ	米子市 光	ない なる 古	) = i	字 市 中	ン画	大阪市神	大阪市 町

窓際で定年までの飼い殺し 窓際で定年までの飼い殺し 様やかな顔に戻って職を去る 父権健在 一番風呂に入る老父 いつまでも妻が味方でいてくれる ・
岩
本
笑
子
控えめな涙が好きな月 風船が富士より高い夢 点滴の生きるいのちを 雑草のように生きたい 今日も雨パチンコ玉の 今日も雨パチンコ玉の バス停にはぐれ軍手の バス停にはぐれ軍手の
昔のままの夢を見る され軍手の雨しずく でれ軍手の雨しずく が好きな月見草 が好きな月見草 が好きな月見草
夢を見草 雨しずく 雨しずく のたれ出る
夢を見草 市 は の た れ 出る 市 しずく

子

芳

瑛

良

子

潮どきはわたしが決めるかすみ草 帯どきはわたしが決めるかすみ草 世間の目なければここで燃え上がる 世間の目なければここで燃え上がる で束もよいがお札もよい世間	ぎりめし三角四角丸になり下美人開き始める胸さわぎれよりわたしの捻子がゆるん	歳なんか気にはしないと言いながらまた増えた白髪芽を出し根っ子出しまた増えた白髪芽を出し根っ子出し一目ぼれの嫁に狂いはなかったよ	根	面れい	守口市
野	辻	<u>t</u>	藤	岩	結
中	JI	II J	原	津	城
御	慶	是	鈴	ようじ	君
前	子	子 ;	江	ť -	子
夕闇がロマンチックに誘い込む もろもろの礼を省くと他人めく もろもろの礼を省くと他人めく 女系家族の船だ難破はさせられ 女系家族の船だ難破はさせられ	"危こふり見が留りてた地蔵の頭巾が好きな赤ト下街で旅人となる孤独症来の端くれ言いたい事が	連絡船みんな同方向を見る 運絡船みんな同方向を見る 連絡船みんな同方向を見る でするバラックの海の家 でするバラックの海の家	で で で で が が で が が の で が の が の が の が の の の の の の の の の の の の の	程れてもいいから咲けよこぼれ! でまずいた石の小言をききもらっまずいた石の小言をききもられ!	宝
むれく倉吉市	更	古	市	泉種する市	塚市
ぬ	त्य त	市	口 俵	泉種する市	塚
ぬ 音市	村村	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· 古 俵 市 森	泉種する市	塚市
となってきます。米	西 村 村	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	· 古 俵 市 森	泉種する市	塚市 吉

喧嘩にも乗ってくれない妻と居る というでは、一人で泊る不しあわせと かり という	豊中市 滝 北 博 史 旅心 湯女に想いの露天風呂 大原目の見合いか今年も秋が来る と	大和郡山市 坊 農 柳 弘気持だけやせたと思う紐ゆるむ くの日にゆとりをくれたいい家族	朝満開 鬼も笑っている平和 音楽を肥やしにメロンよくふとり	<ul><li>汚職国許認可大国票一票</li><li>大阪市 清 水 利 武会釈の手 新世紀への息吹き見ゆ</li></ul>	西宮市 瀬 尾 六郎太
で東魚冷たい仕打ちと睨んでる はどほどのとこで気楽に生きている ほどほどのとこで気楽に生きている 場が当るそれにも増して風当り 陽が当るそれにも増して風当り	露天風呂旅の疲れが浮いている。野水中でも見るより踊る方が好き浮いた噂あった昔が花だった	入院を神の与えし休養と 溜まってる新聞やっと読みました おずおずと貸した催促自己嫌悪	<ul><li>大生は神の下絵にゆだねられ口笛も弾む明日は退院日</li><li>日進月歩 孫に置いてきぼりを食う</li></ul>	父帰国子を抱く腕が軽くなる 金魚鉢朝の挨拶忘れない 介書子を抱く腕が軽くなる	倉吉市
田	西	太	瀬	野	最
中	Щ	田	戸	П	上
文	和	幸	まさよ	節	和
時	子	枝	よ	子	枝

### 日選集

もう二度と故郷へは 姑 千般桜 賽師 優五一 桐 子ろがのい 待パの 方の 待 若 桃 郎 銭の 病 0 を持 は便 経 忌 忌 花 日をついる映画 る人 ルが 虫のの C 0 香り 察に に句 路郎 8 0 人かもほの苦きかき氷が生まれ一汗多くかきめをにっこり嫁かわし 字は 身に ラ つぶっててもおけ子一字が手本めた画はシニアの料へ ブ 0 を憶うことしきり 0 7 時間待たされる 梅 ある日なり 如 二十一あっ 帰れ命 き女 雨 ルに 0 か ぬの 長 海蟬 な 眠 V の時 く金で こと 地 た る 碧雨 蔵 有 松 T. Ш 藤 杜 芳 甲 仙 的 吉 お念仏 座り 笑西蛇掌 旬 Lu セ 夾 竹 だ若いと言われて老けたのがんどい日 歩幅を狭くして歩 瓜切る手応え里に亡母 Vi 0 > 行 10 顔を花 束を見 するバ 花 だこピタリと和服 か セ 戦 声 桃 れきれい も確 友が 入れる頭を空にする 1 げ 今夜もひ 元せて冷 方にピリ 戦 火に染めて妻若 h んな奴だがうまく世れいに咲かせ植木吉 ス故里は亡母 いる かに 記 だんだん惚けてくる びく鬼 たい 元 あって通り過ぎ ッと皮肉効 大尉 ことを言う 動 瓦 木市 かない 眠の 世 る声 がくコラム 金 を泳 b 3 かり 恒 遠 松 井 Ш

文

秋

叮

紅

п

住

小 林 由 多 香

赤

ラフ

T

Va

譜

しさ

八

木

Ŧ.

代

Va

0 +

甲

斐

h

7

負

1+

惜

2 か

和 新雨 P 聞 か が な食 休 2 卓 \* ŋ 白も て F V てあ かい 1 降 ます る ン 0 15 なら 1 グ

年 本 当に 金 か ちょっ 効 < か ドリ ぴり増えた乾 > ク飲 んでみる

風 14

ば

か

ŋ

摑

む

10

掌

に

なっ

だろう

0

頃

肩 鏡

を凝

6

す

0 1 懐

たは

まし

0

縮

む

0) 寂

だけ

は

許さな

村

女

忘れると

10

う仕

せをフト h

思

う

岩

本

雀

踊

n

か

3

が

死 合

でたまる

か

12

多 野 Ŧi. 楽 庵 あ

b

だ 0

ち

草 讨

憎

ま

n

ながら実を弾

故ふ晩

里

0) 鎌 Va

> 倉 橋

> 五 0

Ш 大阪

無

10

還

話どちらも負けてな

42

郷 3 鐘 0

情

12

出合う赤とんぼ

この

6

如 縁のな

男の

絵

位

無 ままで終

冠

あ

2

だに

か

ぶる

癖 双六

かい

0

ŧ

F

しとどお

金 余

12 生

10

男

JII

な

物

波

意

だ

戻

児 島 与 呂

母

0

0

温

忘れ

冷

中

酒

で乾

悼

む

0

お

ぎり

かず

8 2 杯

根来門

愛す

3

頑

固

0

こす ば

じょっぱ < つく

n

\$

桃

源 击

鄉

夢に休みたい

休みたし

南

17

婆さん

0

愚

痴

聞

43

てやる

0

ち

ŋ

0

店

C 0

昔 ば

0 ŋ て九月盆 友

味 似

と会 合う

にまで土産持たせる三次会

駅

長 行

0

時 10

計

に長

13

紐 鳥 ンを嚙 夜 をなぞる

が の片想い

あ

3

機 心のうま 形 出

なり

たい

誘 调 旅

惑

10 0

V

E

んでい 茶

る

お

だや

か

な

हिंह

晴 ま

n

間

12

7

0

石

碑

指

で話

終

る

0

お

志

ここつ

無

取

島

か

な

心

で相 そう

槌

打

見 n

びられ

孫

孫

よ爺

は身体障害者

肌 H 素

野 郎

らしに 6 死 なって馴 2 掃 除ぐ 義 顔 頑 姉 固 6 0 染 白 だ 10 h 0 は だ縄 た叔 L 7 父 お n < (高木石子 n h

野 村 太 茂 津

- 39 -

Ш コ 向 心 北 承 母さんの掌 新 止 陸 やか 菜摘 1 でう人 迦牟尼 無月の う 瞬に 病と仲 H 白 羅 知 調 ŋ 軍 0 0 かい ない く仏 E 奏よ 木 そうにカラー 白 島 0 0 な隣 てい 2 ス う は まだ生きてい 地 < 顔 沙羅 良 は を みな大臣を呼び で漫画 る唇は 出 ホ 太陽ま 訪 咲 n は何よりもきれい ツに ŋ 0 7 く暮すことにする 堕ち に昏れ るを惜 かい ta 上で駄目とい た婆さん " 1 イク東 ぶかる鶴 て沙 用 1 て沙羅 深 を読 た奥尻 う沙 ぶしすぎな 目をほそめ をうながされ 0 る仏 錠剤数えてる 冷房効い るや藤戸 ねて嘘を言 んでは が 羅 0 WD む名を惜 捨てる 戻らない 藤 白 0 戸 間 です てい 寺 寺 3 10 しむ か る 大 月 水 矢 原 宵 Ŧ 仕 男 翁 郎 明 時差 年齡 生 寺の 露路 選 退 時 病 俎板を新しくして若返る 点 百 きる力を貯 刻 坦 n Vi た頃 来て何も変ったこともなし などない 表 ボ を感じさせない な道でつまずく要注 後 四 道 内 0 でまた もゆ 病 目 湯 旅 すぐに ケが寝不足さげ 定 13 に尋ねる が 両 I に 新緑 がすきだった友のこ Ŀ. 手 n 2 新 る政 葉の が 楽 手 12 8 0 0 緑 だんだん深くなる 緑 て八八 晴 以上は持 があり b 汗 中 てくれる研ぎ屋さん だ 0) くしし 天なの 溝 が を i 色を手ですくう な 治はどう変る iz 家 握 か にくら 十路を句を友に 僕 て舞 犬がい こてくれ 足 0 6 to とら 王子 は t 0 てい 3 1 さま る 戻 3 る 小 本 藤 IE. H 井 本 出 智 明 水

朗

子

曲 雑 泳 す す 税 老 花 冗 曲 3 仰 草と言う草は 事 n かい 2 務 几 形 談 す ŧ こと と言 なり せ 署 は 4, に かい 妻 7 せ 言 首 0 4 兆 かい まだ人生は遙 ta 夫の L 0 前 か て見てもどうに えて見舞い 礼 居 b to 状 ら腕 たら 42 0 詐 2 n えい 書 後 小 欺 妻 お をつ を吊 と思 け な 石 0 えどうも 3 10 H は 蠅 を笑わ 名は 17 度 らされ な またけら 叩 II 3 ってみる 右 ど治 此 か 6 鬼 手 もなら か 言 行き 游 n せ 3 0) n to 負 3 n n る 違 如 金 13 高 植 村 杉 鬼 游

### 第7回全国川柳大会

10月24日(日) 午後1~5時 ころ 工学院大学 (東京都・新宿)

「日本人とユーモア」

慰長

80

0

H 10

13

ち薬を聞きあきる

梅

雨

3

8

け

た音 た夏

0 休 7 而寸

夏

一祭り

病 病

袖

様

<

n

2

床

0 E

夜

長

つさをも

余

1)

1)

0

3

えるあ

3:

ら汗

西

H

柳

宏

7

n

角

かなり

放送作家 織田 正吉

游

宿題と選者(各題2句・事前投句)

新 坂本一胡選 「越 斎藤大雄選 磯野 いさむ 選 野口初枝選  $\pm$ 仲川 たけし 選

席題と選者(各題2句・当日出句) 神田仙之助 渡邊蓮夫

投句締切 9月20日(当日消印有効)

投句料 2000円 (作品集郵送) 投句先

〒186-01 国立市富士見台2-36 NHK学園全国川柳大会事務局

NHK学園 主催

言 110 六 甲 華 を重 夜 尻 \$ 望 澱 肺 ね 遠 h B て落 た ま かい ち H 」を覚 は 目 かい 眠 ます n 0

守 科 玉 伍 電 0 違 話 う は す

留

風 む た 声 鳥取 Vi

市 西

村

光

塔 追 加

市

中

純

次

111

柳

は

n

段

黒

Ш

紫

香

-41 -



とは、洵に残念である この句集(『光背』)が、 遺句集になったこ

を患って意識不明のまま九月二十四日あの世 川柳を知った。昭和五十八年九月三日脳閉塞 年病を得て、羽曳野病院に入院した。そして をマスターされて、個性豊かな酔々調なる境 へと旅立たれたが、僅か十六年の間に、川柳 思えば酔々君は天才であった。昭和四十二

という一文を書いておられる。借文すると 会報がある。西山幸さんが「悼酔々さん」 地を開拓された明晰なる頭脳は正に天才であ ここに昭和五十八年十二月発行の菜の花句

> を生かして 講師として活躍されていたが、 豊かな自分の句を作れ。本社句会はじめ各地 集部スタッフとなってからは、出版社の経験 業されて、学習出版社に職を得、桃山学院の と述懐されている。このような彼は、既に自 の大会で入選した句でも(あれは君らしくな っていた。明晰な頭脳は、九州帝国大学を卒 信を以て人を指導する力をもち、一見識をも い)沢山抜ける句よりも、自分の句を、とい つも注意されるのが常だった」 川柳塔社の編

の句の如く校正、展望欄に腕を振われた。 酔々君は柳号の如く酒は大好きであった。 辛口の味も家系と共にあり 起きて酒また起きて酒三ヶ日 一本の味校了と書いたゲラ

JI

うなら美しい言葉をつかいたい。そしへ個性

勿論だが、川柳は詩であるから同じことを言

「川柳は人間を掘り下げ、追求することは

この酒が命とりになったのである ろう。犬五匹に猫が十匹とか飼っていた。 子供さんが無かったから淋しかったのであ 彼はまた、朱雀と号して俳句をよくした。 季語をうまく入れて、川柳にしている腕も こおろぎのシュプレヒコール造成地 残菊と飯粒残る犬の皿 徳利のゴボゴボゴボと秋の音 悠久の歴史を見たり山焼く火 梅咲いて紀州の海は陽をはじき 船頭小唄にすこし傾く犬の首 牛乳で育った猫も爪を磨ぎ

深いものがある する筆者の、なみなみならぬ気の入れ方が窺 幹の序文の一部である。この文脈は故人に対 年2月川柳塔社刊) 序文の西尾栞川柳塔社主 われ、その死に対する哀惜溢れる心証は感銘 以上は、香川酔々川柳句集『光背』(昭和59

が五十三年度路郎賞になり、その受賞感想が 柳塔誌上にある。 香川酔々さんの句 満開の花に誘われ修羅出土

はとても嬉しい。これまでいろいろな賞もい 一建前も本音もなく<br />
路郎賞がいただけるの 確かだ。

陶冶の詩に通じるのではないかと思う。ますの眼で捉える努力が、先師のいわれた、人間のは人間の存在における一現象を、流れの中では人間の存在における一現象を、流れの中で捉える物語詩であると、私は考えている。こ ただいたが、やはり路郎賞ともなると重味をただいたが、やはり路郎賞ともなると重味を

ますの研鎖をつみたいものである。

昭和五十七年柳友清水健司氏建築の念願の昭和五十七年柳友清水健司氏建築の念願の合うと思うほどの川柳の詩句集、文学全集の合うと思うほどの川柳の詩句集、文学全集の高書。「天神さん」や「郷土玩具」のコレクション。愛犬と愛猫。そして洋酒の瓶。顔をもかせると「一パイどや」と誘い、うまそう合わせると「一パイどや」と誘い、うまそう合わせると「一パイどや」と誘い、国語の発生を表している。

本名・香川昇、大正9年9月28日長崎市生 を著書・著述多数。

ったのですね。それから次第に川柳に興味を初めて川柳を知り、あなたと出会うようにな十二年ごろ、あなたは毎月句会に顔を出し、川柳会の指導に当っていましたが、たしか四川柳会の指導に当っていましたが、たしか四川柳会の指導に当っていましたが、たしか四川柳会の指導に当っていましたが、私は麻生路郎先生

躍されたのは誰もが知りつくしている。 柳会に出席し、益々熱心になられ塔同人へ、 がられ、独自の優秀作品を世に発表され、活められ、独自の優秀作品を世に発表され、活

書出版の月刊ECOを世に出し、高校生の学書出版の月刊ECOを世に出し、高校生の学習指導に力をつくされました。その間、ECOには私に筆を執ることを依頼し、「現代川柳に親しもう」という文を文芸欄に掲載して下さった。あなたは学習指導に川柳を忘れなかったのですね。また某高校のPTA婦人研かったのですね。また某高校のPTA婦人研ではこのように私をお役に立つようにして下さったのです。この酔々さんがなぜ急逝されたのですか。私より約二十年も若い。心身共にガタガタ何の仕事も出来ないで私はまだ生きている。諸行無常、痛恨の極みです」(川きている。諸行無常、痛恨の極みです」(川野好郎悼文要約)

々、鬼遊、史好といった三人一対で呼ばれて々、鬼遊、史好といった三人一対で呼ばれて。真き先輩』という懐かしさで接してきた。。良き先輩』という懐かしさで接してきた。。良き先輩』という懐かしさで接してきた。 ではいいない。自信家であった。川村好郎門下の酔いない。自信家であった。川村好郎門下の酔いない。自信家であった。川村好郎門下の酔いない。

まった」(谷垣史好悼文要約)いた。その一人が本当にあっけなく逝ってし

苔青く梵の一字があれば足る

峰一つ越えて仏の声を聞く

たようであるのも哀しい。名である。なんとなく自分の死を察知していも仏さんの後ろに、燦然と輝く、光背という等の淋しい句が見える。そしてこの句集の題

最後に

ユニークなものである(『光背』序文・西尾 では、常にベレー帽を愛用していた。 大才がひっそり死んだ町という での告別式のあったのは、奈良県の上牧町 というひっそりした町であった。 というひっそりした町であった。 というひっそりした町であった。 というひっそりした町であった。

▼次号は「浜田久米雄

# 柳籠裏三篇研究(+<~+六)

藤 田 秀行 要人 . 八木 敬 恒 久 七 西 久 原 保 博 亮

大 Ŧ • 青木迷 朗

甫

鈴木倉之助 故 岡 田

岩田=不明。だが、想像をたくましくするに、 かる。「渡し場で」の意で、特定の場を指し 七久保―中七の「渡シて」がちょっと引っか の者をよこさないで、中間についでに頼んで 八木―文使いであろう。若い者など、文使い あろう。 あろう。つまり、中間を箱屋代りに使おうと れ」と三味線匣を渡してよこしたというので いう、これはあまり頂けぬ安芸者のふるまい の場合は、主人の命で呼びにきた中間に、 のは明和年間のことらしく、主題句の踊り子 佐藤―西原説に賛。箱屋がつくようになった 「すぐ行くから、これを持っていっておく (箱屋なしに) ので、安芸者といわれるので

よこすところが、安芸者なのであろう。

311

中間に渡シてよこす安スげいしや

312 男斗カいとまを出して気味わるさ

時なるべし。

岡田―同。恐らく御留守居役などの船遊山の

鈴木 = 佐藤兄説で明解

ではある。

とにかく三味線箱を一括して中間に渡した 西原=「渡シて」は品物を渡す意であろう。 中間に、その三味線を渡したというのではな

って来て、「渡し場」の所で、留守居に従う

「はこ屋」を従えないで、自分で三味線を持

ているのではなかろうか

員と女の従業員か。 **七久保** = 男ばかり暇を出すとは如何なること

八木―人間関係がはっきりしない。 男の従業

か不明 とまを出すと解していた。残るのは女ばっか 岩田―小生は単純に、男の使用人ばかりにい

好色な亭主であろうか。 なる。何となく気味が悪いものであろう。 りだし、何か下心でもあるかと気も回したく 西原=出替りに男だけが暇が出て、女は残る。

なかろうか。かげに主人の好色な目が光って 残されたので、薄気味悪くなっているのでは 出たが、女の方は何の咎めもなく、そのまま て「不義は御法度」と、男の方ばかりヒマが 青木―使用人同士の恋、隠しおおせず露見し

鈴木=青木説に賛 佐藤―青木説のような場合と思う。

いるような気がする。

と思う。主人がその後どういう処置に出る っては不安な日々。 か、ハッキリするまでは、それこそ姦婦にと 生は一歩進んで、妻と使用人との密通露見か にヒマを出してもそう不安なことはない。小 岡田=使用人同士の恋愛沙汰なら、男ばかり

44

### 313 紅葉と鹿を笠で買下駄で買

七久保=「紅葉」は例の伊達綱宗をふった仙

台高尾、

「鹿」は尾張の徳川宗春に身請けさ

如雀 境でもある。

下駄笠ではると秋との女郎買 大きなどらは春の笠秋の下駄 天五宮1 四35

れたという巷説の春日野を指している。

### 岩田 一 賛

沓冠としての縁語と考えてよい。 の取り合わせ物であり、「笠」と「下駄」も また、「紅葉」と「鹿」は和歌の時代から 下駄笠につゞき材木きつい事 笠と下駄おつつかつつの御大録 = 38 四 33

句が多く作られている。 西原―賛。紅葉の名所高尾山、奈良春日野の 川柳には綱宗と宗春、 べつ甲と伽羅は栄花の沓冠 綱宗と政岑の対比 四四15

春は笠秋は下駄にてきつい事

天七・十・十五

314 もそつとの事伏見町迄ハ有リ

美徳

に、大坂町のないことを言外に含めた洒落で

たないと言えよう。要は、岩田氏のいうよう

伏見町があるのに、三十石舟で一またぎの大

集めたところであり、遊女の器量の上下玉の ぐ左方にある狭い一町画で、小見世ばかりを 七久保―「伏見町」は吉原の大門を入るとす

けながら、上方文化よりも優位になったこと は洒落なのでそういう事は問題にならない。 町があるではないかという論もあるが、これ っとの所だ、という洒落である。しかし、堺 しかし伏見町があるので大坂町までもうちょ 岩田―江戸町、京町とあって大坂町がない。 を暗に仄めかしているのである。 句意は、京、伏見と大阪の距離の近さを掛

するに大坂がないというだけ。 西原―礎稿および岩田説でよろしかろう。要

はないか」という反論は、実質的にも成り立 ですが、伏見町が明治になっても生かされて 二丁目のうちである。伏見町と同様、俚俗名 佐藤―賛。堺町はまた境町とも書き、江戸町 消滅してしまっているので、「堺町があるで 天明年間には、五丁町の中に堺町の俚俗名は 絶したのでした。従って、主題句の詠まれた いたのに反し、堺町の呼称は、明和年間に廃

> あろう。 坂町がないのは、腑に落ちないという意味で

岡田―岩田、佐藤説に賛。

315 川魚をせんたくをして飲メる也

雨潭

七久保―釣って来た川魚(例えば鯉など)を れを肴に一杯やるという事か。 洗いすすいで、きれいにし、作り身にしてそ

現したところがミソであろう。落語「青葉 岩田―賛。礎稿でよいと思う。それを称して 「洗い」という。そこを「洗濯をして」と表

にも出る夏の風物詩である。

よう。 八木=牛島の中田屋、葛西太郎まで考える必 佐藤―賛。鮒の洗いもあるが、やはり鯉でし

の家では滅多に作らぬ。従って八木説の葛西 岡田―鯉の洗い説は申すまでもないが、普通 要はないか。 掃溜の向ふで洒落る洗ひ鯉

太郎説はボクも考えていました。

新町41·篠山町教育委員会川柳祭係へ。 添え、9月10日までに兵庫県多紀郡篠山町北 「策」「深い」(各題1句)に応募料千円を ふれあいの祭典93川柳作品募集

### 同 人 特

### 百 句

可 平 人吟 成

か 年 6 1 平 編 成 集 几 年

橘 高 薫

尾

栞

惜しみなく愛は奪えと曼珠沙 老妻の愛の言葉は脅迫か 華

紫 香

渥 美 弧 秀

愛染の

終の

部

屋から富士

仰

元旦や愛の一字を筆太に

嘉 黒

数 JII

兆代賀

野

0

和顔愛語

b かい 愛枯

れる川

面

0 風

が

冷たくて

吉 岡 きみえ

春

風に愛の死角をのぞかれ

北 加 JII 民 子

計算に合わないものに父母の愛

葉 部 冬 葉 進

塩

加減してますこれも妻の愛

愛すればこその苦言が横すべり

黒 小

田

砂

谷

美っ千

めちゃくちゃに愛してほしいカンナの朱 恋愛ごっこ目立たぬようになさいませ

桜

井

秀

阿 春

城

年

代

究極の愛あじさい寺の

貰い泣き

すぐ怒る貴方

へ愛が過熱する

うれしさに訛って愛が伝わらぬ

そんじょそこらの愛とは違う冬椿

味噌汁によう溶けている妻の愛

雪は愛

忍の一字を教えこむ

スパイスが効きすぎました愛の スプレーでかためた愛が崩れだす

鞭

子

由多香

小 田 稲

あ

じさいの愛の 色から情

宵を待つ愛とはこんなものなのか 0) 色

原 士. 吉 田 橋 さよ子

西

風

にらめっこよそうよ愛があるじゃない 花を知ったときから愛目覚め 師の教え嚙みしめて 堀 波多野 J: 田 五楽

板 尾 江 岳 芳 子

垂

井 千寿子

庵

愛たしか湯吞みが二つ置いてある 振り向 母の 愛別 行間 偽り ジェラシ 愛に全力 愛という言葉の色があせてい 白旗をふってふり向く愛でなし わが町を愛して火山には負け 乱暴な言葉でくれる父の 五十年だまし通した夫婦愛 抱いた愛抱かれた愛も夢の中 人間 愛語 愛に迷うシャンパングラスの細 恋はドキドキ愛はどうして来るかしら 行 玉 離苦 海 詩 の愛の小道具サングラス のまごころを読む愛を読 の条件 it 愛し孤独も又たの の愛をわが身に問うてみる 遍 ーを愛の ば愛に彷 愛の深さは測れ 女はそれから光るも 六十代と二十代 僧 愛なら持ってい あなたをまた許 証と思うま 徨 酒 ない に 愛 逢 82 63 脚 恒 門 宮 宮 松 西 安 竹 IlI H 樫 矢 4 椎 永 信 新 舟 谷 治 松 III П 西 本 原 藤 本 中 谷 内 江. 谷 尾 本 渡 垣 H 今日 寿美子 ちかし 寿恵子 たず子 叩 克 玉 正 寿 清 緑 博 IF. 杏 史 代 子 生 子 子 恵 坊 馬 芳 良 子 子 花 子. 好 愛され 深追い 結ばれ 仏壇 嫁 弁当箱 春い 稜線 そば かりそめ 愛恋のザ П ひとときの無言を愛し老い 落花さかん愛の挽歌を聞く思 ひらがなで包むと愛はやわらかく 純毛の 愛情を小 愛果 冷たさもひとつの愛として受ける の荷の風呂敷一つ愛ひとつ 転木 途 ろで一 0 がくっ 0 てた乳 る事は 愛 中 手 はやめてきれいな愛にする 馬 ぬ愛と承知の紅を引 花不毛の愛と言うけれ ンバ のエ 編 の愛にはらは 途 にたくさん愛が 出しにくれる樹の温 昔の愛が去来する 中下車など考えず 途な愛を染めようか が愛のプレリュ きり村を包む 房が憎いことを言う ラ髪か曼珠沙華 1 もうな ル が 63 つめてある ら銀 仮 面 棲 杏散 ふたり 脱 < む ( 佐々木 青 福 浅 美 石 崎 江 福 田 松 小 仁 田 松 袁 木 遠 野 宅 Ш 枝 城 井 中 原 島 田 部 辺 本 本 Ш 芙佐 芳 鬼 不 旋 美 鉄 修 桂 透 四 元 良 可

史香太子幸郎六

江.

子

夏

住

子 正 子 治

遊

子朽風

遍路 古い 天秤に 人の輪に小さい愛の線を画 愛されて愛して西陽やわらかに 愛という字余りは糾すまい 百姓に嫁いで愛す農 ほのぼのと煮えた大根の愛しきり 愛情を計る物差しほしくなる ポケットに入れてる愛が動き出 結び目にやんわり積る夫婦愛 信じねばならぬと思う愛だろう 愛かしらその気になってみるもよし 愛と言う一字が華奢な絵となり まだ愛があって引き金ちゅうちょする 距離置けば愛がひしひし押し寄せる ワープロ 愛一つ千のばらにも変えられ 騙されてくれた女の愛だろう 名の菊に一途な愛がある 仏の けた愛など欲しくない 0 手 愛にけつまずき 紙に愛を盛られても 詩 82 小白金 板 児 荻 西 小 Ш 小 片 奥 藤 林 武 富 松 内 西 岩 島 野 垣 JII 本 Ш Ш 西 島 寺 岡 田 原 Ŀ H H П 与呂志 美智子 鮫虎狼 智恵子 雀踊 みつ子 諷云児 13 房 花 鈴 瑞 夢 光 雄 わ 峯 子 江 枝 酔 代 子 美 雀 Z 五 子 手加 愛千語. 父母 風 愛よりもお金に惹かれ嫁く気なり アベマリアほんとの愛を恋うてます 殺し文句が見事で愛が育たない 殴られて初めて知った深 花愛す人ならいくさせぬだろう シナリ 両方の手では持てない 宝石の流転哀しい愛を抱き 紙つぶて愛する人に当らない ロボットの故障は愛に飢えたらし 素直さを愛し何かもの足りぬ ドライフラワー愛の化石かも知れぬ 花言葉愛することのすばらしさ ときめきも愛も枯れてたフル コスモスが揺れると愛がゆらぎだす は四季の色となり人愛す 減はしない厳しい父の愛 の愛が重 オ 吐いて昨日の刺を抜 通 りに たい 愛が 時 がある 母の 終らない 11 爱 ムー 2 安平次 高須賀 辻 吉 西 有 神 高 野 西 板 岩 春 玉 吐 両 松 保 本 置 田 田 橋 몸 出 東 城 JII 岡 本 村 柳宏子 千万子 武庫 金 重 弘 Ŧ 芳 拓 右 楓 公 文 洋 美 文 子

坊 人 道 平

房 子

女

仙

生

太

近

# 麻生路郎の作品とその周辺

# 3

橘 高 薫

風

(33)

る。第一回は蛭子省二氏のプロフィールであ この号から路郎は「柳壇の人々」を書き始め は『川柳雑誌』第七巻第五号に出ているが、 前号に記した路郎先生の句 次にその要点を抜粋する。 夕桜とんぼがえりがしてみたし

と同時に古句研究家の重鎮であり得る所以で 根強い持続性の熱がある。君が短詩人である るが、蛭子君にはそれがない。君にはかなり ものは事にあたって多く熱を欠くの嫌いがあ からに君子という感じがする。所謂君子なる この写真そっくりのふくよかさはある。見る なるほど蛭子君はこんなに肥ってはいないが、 いんですが」と注意書きをした写真が届いた。 朝鮮の蛭子君から、「こんなに肥えていな

は博覧強記の君が、引用の多岐に亘るのと、 の文であることは全く別人の観がある。これ 意の名文であるのに比して、考証の難読渋滞 る考証であり感想であるが、感想の多くが達 その執筆するところのものは多く句に対す

> 時の柳壇を裨益する点が一層深められはしな うが、その学究的態度から更に一歩を出でて いかと思っている。 今少しく嚙みくだいて発表されたならば、 期するために止むを得ない弊であろうとは思 つとめて原文を抜萃して誤りなからんことを 現

号及び四月号の「粒々集」からの数句を抜く。 ている。光っている。 人格の総和ともいうべき隣人愛の心が滲み出 蛭子君の近頃の句風を示すため本誌の新年

断の通信をする。その通信文中には必ず君の

君は趣味として日課として柳友その他へ不

平素研究に没頭している古句に災いされて、 から遠ざかっている。たまたま作句をしても 古句の研究家と言われる人々は殆んど作句 母の座布団をひきお仏飯を頂く 橋の真ん中で春らしくなり 書斎中心の間どりかく妻はねそびれ 妻とならび元日をまつ背のび みなれぬ大もいて落葉たく旗日

> 向を称えた頃の句調に一脈の類似点を持って その調子を検するに、碧梧桐氏が始めて新傾 言っていい。君の句には、そうした古調もなけ はあろうが、蛭子君はその点全く例外の人と 静な真面目に接触することが出来る。 てすら蛭子君の謙虚な心や、環境に生きる平 いるように思う。僅かに抜いた上記の句に於 めない。寧ろ俳味を帯びた心境作家である。 句研究に煩わされた黴臭い痕跡を何処にも止 れば詩想の立脚点からして異なっていて、古 のあまり陥る弊であって万止むを得ないので に立脚している観が多い。これは研究に熱心

研究と創作に生きている。 四十四歳の男盛りだ。もともと石井姓である め、二、三年前遂に久良岐社を去り、 である。後年、久良岐氏と主張を異にしたた 時代に久良岐社に入って柳壇の人となったの 学の二年頃だそうだが、明治三十九年早稲田 だそうである。君が川柳に指を染めたのは中 生国は金の鯱鉾のある名古屋だそうで、本年 が、いささか担いで蛭子姓を名乗っているん 君は目下は朝鮮の光州に住んでいられるが

川柳研究家西原柳雨翁の死が報じられた。 奇しくもこの号に蛭子省二氏が父と仰ぐ古

自然その創作には古調を帯び、詩想も又古句

詠んだ句の多いのも故なきことではない。

君は又大の愛犬家だそうで、君の句に犬を

### 同 人吟

―8月号から

荒

介

林

いる毎日である。 発見してほしい、などと自分に言い聞かせて 自分を見つめてほしい。そして新しい自分を

### 哲学を夫に少々侵される

て短詩文芸に係わる者の覚悟を考えている。 ろである。川柳塔を通読して、私自身を含め

七月も半ばが過ぎたのに梅雨冷えのこのご

川柳を文芸に昇華するか、日常雑事の報告

である。 を侵した自分を承知で、侵された、侵された、 しんでいられる姿が浮かんでくる。夫の哲学 て怒っているのではない。むしろその事を楽 分の哲学を持っているが、それを夫に侵され 紀美代さんの作品に悲壮感はない。誰もが自 侵した、侵されたと、紛争が続いているが、 るのか、興味は尽きない。世界各地で哲学を いてみたい。八月になればどんな内閣が出来 たが、価値観の違う人達の水面下の動きを覗 ○余名、社会党は惨敗、新しい党に票が流れ 衆議院議員選挙も終わった。自民党も二 中 紀美代

# マニアにもコレクターにもなりきれず

れると判るように、川柳も自分の言葉で以て

話振りを聞いていて、あの人が話しておら

る。そうすると自分が見えてくる。

雑詠でも自分の今を見つめながら句にしてい

ための川柳である。昨日があって一昨日が有 えてほしい。僕の場合は今の自分と話をする ほしい。何のために川柳を作っているのか考 にあたって川柳とは何かと問題意識を持って ただ単なる伝習に終わってしまう。作句する られていかなければならぬ。そうでなければ は違う。伝統はそれを踏まえながら新しく作 とか革新とか言われて久しいが、伝統と伝習 に終わらせてしまうかが問題だと思う。伝統

っての、いま現在の自分との会話、

題詠でも

ずっと以前に拾って帰り、忘れていた瓦の欠 去年から話題を浚った上淀廃寺近くから、

う。そのためにも異質の句会にも参加して、

ば十色の川柳が生まれる。それが個性だと思 納得の行く作品を発表してほしい。十人おれ

> 川柳の時間がなくなってしまう。 る。マニアも大変、コレクターも大変です。 続かなかった。それはそれでよいと思ってい 便切手を集めかけたこともあったが、これも し、上淀廃寺近くの古墳を探索する意欲もな この欠片も、そのままで研究の対象ではない 壁画騒ぎで思いだされ机に席を貰っている。 片がある。引出しで忘れられていたのだが、 い。それでも机に鎮座している欠片。以前郵

## 古い服捨てる理由が見つからず

見つけようではありませんか と取り入れることが出来る。お互いに理由を 捨てる理由を見つけねばならぬ。そして、大 ある服もあるのだが、思い出は思い出として は判っていても、これも至難の業だ。愛着の 安心した。身辺を整理すれば身軽になれるの が、捨てきれないでいる。僕だけではないと きな空間が出来れば、新しいものをどんどん 何年も手を通さない服が何着も何着もある

# 丸い絵が上手になった二度の職

もある。この句の丸い絵は何回も聞いた言葉 りが上手くなる人も居れば、片意地になる人 なかの事では角が取れない。歳とともに世渡 二度目の職で角が取れれば立派。 人間なか

一番。人間関係は難しい。 機だが、まだまだ角ばかりだ。でも二度目の くいで、まだまだ角ばかりだ。でも二度目の が、まだまだ角ばかりだ。でも二度目の でが、やはり丸い絵だなと変に納得してしま

### 離したら無口になった鍵の鈴

一人では響かない。松籟がガラス戸に届いた。 芽から離してどこに置いたか判らない。 芽胞の声に応対をして、鉢の棚に帰ったら鋏がない。 応対をした部屋にもない。 いまだに姿を見せてはくれぬ。 手元で爽やかな音色を響かせてくれた鈴だが、ご用が済んで所定の場所せてくれた鈴は響いてはくれぬ。 鎌田 頂留子藤田 頂留子

# よく見ればぶらぶらしてる蟻も居る

誰が僕を見ているか判らぬ。誰が僕を見ているか判らぬ。
がはるものだと思っていたから、庭に出てみでけるものだと思っていたから、庭に出てみでいるのがいた。人間も一緒だ。どこで遊んでいるのがいた。人間も一緒だ。どこで

# 賑やかに値踏みされてる胡蝶蘭

木本朱夏

でもだが、見事なものほど人々の眼が口が集友達を迎えたお茶の間でもよし、展覧会場

なことだろう。

# 政治改革 あじさいのくび重し

士の首も重いことだろう。 福 井 桂 香 でなるかも判らぬ。長い梅雨の雨に濡れて紫になるかも判らぬ。長い梅雨の雨に濡れて紫になるかも判らぬ。長い梅雨の雨に濡れて紫になるかも判らぬ。長い梅雨の雨に濡れて紫

# 蚊も蠅も一人ぐらしの友である

宮崎シマ子高のない暮らしは寂しい。蚊に刺されて痒れところに軟膏を塗る。蠅が出たと新聞紙をれる。軒からはかすかな風鈴のひびき。シマ子さんがお一人で暮らされているのかどうかは知らぬ。でもこの姿勢が好きだ。心のおくそこに仏さまを抱いていられる。蚊も蠅もくそこに仏さまを抱いていられる。蚊も蠅もくそこに仏さまを抱いていられる。女と思っている。

### 見せて下さい飼主の血統書

三 宅 保 州三 宅 保 州三 宅 保 州三 宅 保 州

### 看板は迷惑工事わびている

は看板である。
は看板である。
が記者板である。
が記者板がお詫びをは平和だ。しかもこの作品は看板がお詫びをは平和だ。
しかもこの作品は看板がお詫びをは平和だ。
とかもこの作品は看板がお詫びをはでれる。

# 原色着て夏を手玉にとっている

カーで夏を手玉にとることにしよう。 とは夏にも弱いが、梅雨の湿気にぐったり。 とりしているのが判る。 実は夏にも弱いが、梅雨の湿気にぐったり。 実は夏にも弱いが、梅雨の湿気にぐったり。 ではと勘繰ったりしている。



# III

湯豆腐のとろとろ君 0 背にまわ を近、 0 余り 一づける たり Ш 新 子

サル

ビアの炎のように燃えている

ンスかな夕陽の赫が映えすぎる

歌山

辻

32

7

品

子には負けぬ硯は火の匂

青く透く亡母が写ったラムネ

瓶

ルシウム不足か今日もよく眠る

砂

III

市

大

橋

政

良

人恋し 逝きし「刻」弟は一 梅雨の雨足長き日に 歳なり

市

本

か

ŋ

ありったけ父の日贈

る物手紙

両 方を立てて二人になじられる

まだ背が拗ねて返事が他人めき

内緒ごと少しまぶし マンネリの中で安心してしまう い父の目だ

くせくとして夕映えに辿りつく 宝塚市

永

H

暁

風

ずじまい

本心は聞け 哀しくて秋の男は飯を盛る 向けば萩がこぼれる未練だな 昏れゆく秋を酒買 の鮫 小 いに

秋空に冬の台詞で逢うてい

3

回振

n n

子の居ない部分ではめに軒借り

屋も夏間は窓を開

け

6

れて

雨戸開けられず

歌山

市

Ш

П

さようなら書けない

果たし状になる

が出たので降りる縄梯子

近すぎて相手の上辺しか見えず

背信

を小耳にはさむイヤリング

涯

の贅沢でした霊

極車

波風を正直者に立てられる

寝する時間があって忙しい

昼間

を置

いて許す重さを考える

— 52 −

大の字へ空の青さと草いきれ	雨上がり虹を渡って逢いにゆく	風鈴に風の言葉を教えられ	昨日まで無い草今朝は伸びている	手が逸れた手毬にとどけ母の声	富山市島ひかる	自堕落ないちごの果てのジャムの味	思いすごしだとレモンの酸っぱさへ	恋などで死ねるか蟻の長い列	幻へ太鼓たたいて笛吹いて	指切りの指は一番好きな指	西宮市 岡 本 道 子	わたしだけの歌を唄って黄昏る	ファッションより夏を乗り切る策をねる	物思いの囚になっている守宮	伺えば座が抜けそうな蔵書部屋	暖かい息が見えそう如来像	広島市 森 田 文	エンピツの芯が折れてる程の乱	週末になると弾んでくるヒール	ひとときを粋な会話のコードレス	夢のゆめ硝子の靴が履けません	いまもまだ時々雲に乗っている	広島市 流 奈美子
あれ以来母の涙は涸れたまま	折々の詩がふる里便で来る	黄昏て愛しき日々を掌に	あれ以来黄色い薔薇は人嫌い	風を摑んで美しく帆を上げる	富田林市 池 森 子	故郷の絵馬堂大志が掛けてある	今日こそはけじめをつける髪洗う	肩書をぬいだ夫がよく笑う	稼ぐ苦労 小銭を馬鹿になどしない	記憶の糸手繰り合いつつクラス会	熊本市 宇 野 照 代	笑い流す度胸だって持ってます	走りつづけ風のやさしさみつけだし	梅雨明けて用済みの傘忘れられ	心に残るシーン過去帳に見出せぬ	流星が音無くかもす宇宙ショー	熊本県 大 川 幸 子	満員車 性別不詳に押され居る	カラオケ屋で元気を拾う皿回し	口をきく名刺で肩書きがずらり	清濁を呑んであでやかなり笑窪	緑陰の流れに心洗わせる	名古屋市 藤 井 高 子

ルルである靴に暮しを視られたり ・ 大阪市 尾 崎 ・ 自転車で来たというので労わられ ・ 存む集いならばいつでも行きまっせ ・ 仲直りさせて屋台へ連れていき ・ 死んだふりしたろかという老いの拗ね ・ がんだふりしたろかという老いの拗ね	に 鼻突っ込んで食 は は は は は は に よ な な な な が が が が が が が が が が が が が	<ul><li>とおりますのまたではいる</li><li>おいますがえる流れホタルの灯がもつれまみがえる流れホタルの灯がもつれまみがえる流れホタルの灯がもつれまみがえる流れホタルの灯がもつれます。</li></ul>	孤独でも楽しい趣味という支え素晴らしい夢を断ち切るべルの音素晴らしい夢を断ち切るべルの音素晴らしい夢を断ち切るべルの音	静岡市 沢 田
黄	鹿	春		き
紅	太	嶺		L
とは決めているのに顔見い人にされて振る旗持たさい人にされて振る旗持たさを抱き走り続ける闇の中を抱き走り続ける闇の中を抱きませ私の貌になるイバルのアキレス腱を探し	あた出してこんなこない日量半 は伝子と思えど淋し髪を梳く は伝子と思えど淋し髪を梳く	しとど娘と語り合う夫の笑みれの師を目前にして無口がらも値段の内というディナのの灯獅子吼の如く燃え猛れ	相熟れても実らぬ恋が歯痒けてたつ齢に早いと怒鳴ら旋階段のぼると闘志萎えて麻の実がはじけて愛が深く	久留米市
森	朝	田	杉	鶴
安	倉	中	Ш	久
夢之	大	み	精	百万
助	柏	ね	子	両

タ暮れの浜に安堵の彩がある 夕暮れの浜に安堵の彩がある 定刻に帰る時計で生きてみる へ治市 渡 辺 南 奉 社は宝などと言うからプレッシャー ねむくなる生きているんだなと思う わむくなる生きているんだなと思う 付き分けをよしとはすでに負けている	米子市 足 立 由美子ゴメンネを先に言う日の深呼吸 ユーモアが欲しいと思う五十肩判断がつかずに仰ぐ神の指示 鈍行で何時か着いたら手を振ろう	藤井寺市 高 田 美代子プライドが邪魔して困る老いの恋鳥取の砂丘ゆったり駱駝の背の武者羅に月日を越えて共白髪ゴルフ場寂れて蕨まっ盛り	というでは、 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 というである。 はいのできる。 にい	尼崎市 的 場 十四郎
朝散歩 野菜作りの講義きく 電話機もカラフルになる子供部屋 長雨に一日話すこと忘れ 相合傘並んだ雨はラブソング 西宮市 亀 お伽噺の亀が可愛い手話の指 豪邸を一回りする散歩道 西宮市 亀	で 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	打ち水を蝶が来て吸う梅雨晴れ間 打ち水を蝶が来て吸う梅雨晴れ間	大間の欲が出てくる銭の音 なめくじのゴールは鉢の裏だったなめくじのゴールは鉢の裏だった	今治市 越
岡	池	渕	置	智
哲	トミエ	富喜子	当	青
子	3	音っ	代	袁

伸びするたび雑草は引	石鹼の泡から生れる虹の彩	口惜しさを嚙みしめる歯は残ってる	年金へ招待状が多過ぎる	尼崎市	償いの輪廻親から子へ続く	騒がしい一団となるクラス会	母さんの作るお寿司はAランチ	こっそりと月も見ていた花盗人	尼崎市	英語しか喋れぬ孫に育てるな	絶ち切れぬ思いをつなぐ飛行雲	餞別はドルに換算し直して	親離れ試されている子の赴任	摂津市	三ツ葉の香りふと思い出す母の味	腰痛が起ってくると雨が降る	色黒を歎いて芋の皮を剝く	味しめた蚊に襲われる寝入り端	和歌山市	ノートルダム寺院 歴史のしわの中	アイガー氷壁 登山電車でまのあたり(スイスにて)	当然だがベンツばかりが走ってる(ドイッにて	まず成田の免税店で口紅を買う	西宫市
				Щ					野					木					岩		スイフ	にて)		Щ
				本					瀬					下					本		(にて)	075		本
				す					昌					道					美知					義
				4					子					子					智子					子
玄関の	外出	平	衿																					
用心棒は分	一の父のおしゃれはベレー帽	平凡はいいけど一寸もの足りず	もとを開けて気分をリフレッシュ	東大阪市	言い分は浅漬けぐらいに止めておく	傘に名を書いた時から忘れない	それからの甘い言葉は信じない	乗り出した舟だとことん漕いでみる	島根県	お見舞の言葉につまる脳軟化	古都めぐり雨もまた好し二人傘	追伸の封筒ピンクにして母娘	先頭でうっかりアクビして転げ	兵庫県	風鈴が鳴り出し今日の凪終る	パトカーに遇って微妙な緊張感	均一の出店すかさず消費税	弟が関白ですと笑わせる	熊本県	教職の癖でレターに朱を入れる	愛想いいポチに気疲れする散歩	そうめんの箸休ませる大花火	即答をさけゆっくりと善後策	尼崎市
用心棒は分	の父のおしゃれはベレー	いいけど一寸もの	けて気分をリフレッシ	東大阪市 指	い分は浅漬けぐらいに止めてお	名を書いた時から忘れな	からの甘い言葉は信	り出した舟だとことん漕いでみ	根	見舞の言葉につまる脳軟	都めぐり雨もまた好し二人	伸の封筒ピンクにして母	でうっかりアクビして転	庫	鈴が鳴り出し今日の凪終	トカーに遇って微妙な緊張	一の出店すかさず消費	が関白ですと笑わせ	本	職の癖でレターに朱を入れ	いいポチに気疲れする散	んの箸休ませる	答をさけゆっくりと善後	崎
用心棒は分	の父のおしゃれはベレー	いいけど一寸もの	けて気分をリフレッシ	市	い分は浅漬けぐらいに止めてお	名を書いた時から忘れな	からの甘い言葉は信	り出した舟だとことん漕いでみ	根県	見舞の言葉につまる脳軟	都めぐり雨もまた好し二人	伸の封筒ピンクにして母	でうっかりアクビして転	庫県	鈴が鳴り出し今日の凪終	トカーに遇って微妙な緊張	一の出店すかさず消費	が関白ですと笑わせ	本県	職の癖でレターに朱を入れ	いいポチに気疲れする散	んの箸休ませる	答をさけゆっくりと善後	崎市
用心棒は分	の父のおしゃれはベレー	いいけど一寸もの	けて気分をリフレッシ	市指	い分は浅漬けぐらいに止めてお	名を書いた時から忘れな	からの甘い言葉は信	り出した舟だとことん漕いでみ	根県武	見舞の言葉につまる脳軟	都めぐり雨もまた好し二人	伸の封筒ピンクにして母	でうっかりアクビして転	庫県森	鈴が鳴り出し今日の凪終	トカーに遇って微妙な緊張	一の出店すかさず消費	が関白ですと笑わせ	本県 岩	職の癖でレターに朱を入れ	いいポチに気疲れする散	んの箸休ませる	答をさけゆっくりと善後	崎市 長

互いの個性ぶっつけ合って夜一つすいっと消えた亡母のよう	い出せぬままに会釈を返に来て捨てたきことの多	ゆう自適やっぱりお腹の底で失投だと気づき吠える犬で単細胞にみペース年金ほどは金が	下をぬいで我が家を踏みしめるつぶしに出してる竿へ釣れますいざめへ後悔ばかり駆けめぐりれますれもせぬ竿へとんぼがきてとま	横浜 の手で摑んだ倖を独り占め の手で摑んだ倖を独り占め の手で摑んだ存を独り占め	十和田
市	県	る	市のり	市	市
平	円		宮	菱	阿
ЛП	増		尾	田	部
幸	純		み	満	喜
枝	子		9	秋	久江
嫁の味ほめて我が家も変りだす国訛り聞いて磁石は揺れている	惚れて井蛙の比喩に気付生の油断を諭す百日紅	せを計る目 めいいお払 由金利 気	狂わない時計で遅刻ばかりする ほどほどに呆けて余生もまた楽し ほどのいで妻は動じない をしまた楽しができる。	野に咲いた花が会釈をしてくれる 野に咲いた花が会釈をしてくれる 野に送いた花が会釈をしてくれる	兵庫県
権	岡		大	大	倉
	1020			9-32	垣
	いの個性ぶっつけ合って夜 嫁の味ほめて我が家も変りだすつすいっと消えた亡母のよう 国訛り聞いて磁石は揺れている	互いの個性ぶっつけ合って夜 一つすいっと消えた亡母のよう 国訛り聞いて磁石は揺れている 国訛り聞いて磁石は揺れている 自惚れて井蛙の比喩に気付かない は来て捨てたきことの多かりき 人生の油断を諭す百日紅 弘前市 岡兵庫県 円 増 純 子	互いの個性ぶっつけ合って夜 一つすいっと消えた亡母のよう 一つすいっと消えた亡母のよう 一つすいっと消えた亡母のよう 三いの個性ぶっつけ合って夜 互いの個性ぶっつけ合って夜 一のすいっと消えた亡母のよう 三の底で失投だと気づき 兵庫県 円 増 純 子 人生の油断を論す百日紅 小出せぬままに会釈を返しとく 自惚れて井蛙の比喩に気付かない 自惚れて井蛙の比喩に気付かない 自惚れて井蛙の比喩に気付かない 自惚れて井蛙の比喩に気付かない 自惚れて井蛙の比喩に気付かない 自惚れて井蛙の比喩に気付かない 自惚れて井蛙の比喩に気付かない	はいの個性がつつけ合って夜 いの個性がつつけ合って夜 いの個性がつつけ合って夜 八尾市 平 川 幸 枝 をせぬいで我が家を踏みしめる に出してる竿へ釣れますの 松山市 宮 尾 みのり 自由金利 気にするほどの金がない 松山市 宮 尾 みのり 自由金利 気にするほどの金がない 様のいいお払い箱さ定年は 態のいいお払い箱さ定年は 態のいいお払い箱さ定年は がのの金がない がのの温字庶民の頭越し 幸せを計る目盛りに個人差が 東屋県 大 も惚れて井蛙の比喩に気付かない 田世ぬままに会釈を返しとく 日惚れて井蛙の比喩に気付かない 真の黒字庶民の頭越し がいっと消えた亡母のよう いの個性ぶっつけ合って夜 八尾市 平 川 幸 枝	大田

舞鳥影

文

次

恵

美

花

匠

康

女

瓦一枚寄進して来た寺詣り 「「大」では、「大」には、「大」には、「大」には、「大」には、「ない。」には、「ない。」は、「ない、「ない。」は、「ない。」は、「ない。」は、「ない、「ない。」は、「ない、「ない。」は、「ない、「ない。」は、「ない、「ない、「ない、「ない、「ない、「ない、「ない、「ない、「ない、「ない	環の子の愚痴を金魚が聞いているとうきびを丸かじりする夫の歯を金魚が聞いているが立く話は遠い日に置かれ	十日を無事に過した般若経 一日を無事に過した般若経 と思う人から聞く厭味 教沢も許されてよい無駄遣い	を う油断しない兎へ亀困り では、	片言の笑顔は無類の応援歌 超守ばかりする鍵穴がいとおしい 留守ばかりする鍵穴がいとおしい にある流転
	田	塩	澤	野 居
	<b>絢</b>	智加恵	裕子	宵 ひ で の
潮騒の音は亡友への思慕を呼ぶいいわけの言葉につまり抱き寄せる風渡る砂丘は哀し訣れの日	<ul><li>両方をほめて中立保ってる</li><li>関悩をばらばらにする鬼の面</li><li>切なんの陽気な顔が頼もしい</li></ul>	<ul><li>が人になって道問うことも慣れ 同郷のよしみで言葉飾らない を が大にあふれる如く曼珠沙華</li></ul>	要びが顔に出てくる父の酒 をいてなお古里恋し山恋し のと仕事終えて時計が九時を指し のと仕事終えて時計が九時を指し	夏時間 冬時間でもマイペース 映心の迷いがみえる靴の紐 かタカナの名前ばかりで百花咲く カタカナの名前ばかりで百花咲く
	田	中	永	中 松
	中	嶋	倉	澤浦
	孝	千 恵 子	柳	向

拾われた小犬が奪う主導権	の電話ベル聞く	奥尻のニュース悲しい梅雨末期	閉鎖工場くちなしの白今盛り	京都市 小	鼻息が荒くて影で生きられず	将棋	足 足 足 寂しく帰る足もある	京都市本	惜しい人言われ逝きたい雲に乗り	裏町の此処にしかない味の店	背中見て育ってくれた子供達	立ち読みの本か一番面白い	・ は、)に、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		くもまあタイトルつけ	草取りを元気な振りでやってます	て朝仕事	福岡市井	ひとつ済みまたその先の愉しみを	薬屋は薬を呑まず息災で	この靴を履いてあしたを愉しもう	極楽で退屈なのもつまらない	貝塚市 池	
				林				荘					倉					崎					田	
				英				福					キク子					ミサ子					寿美	
				子				子					子	•				子					美子	
マイク持つ男の嘆きはほろ酔いで	童謡は母の匂がいたします	歌になり絵になる心の地図がある	寝屋川市 宮	長雨におしゃれを変えたうさ晴らし	寝返りを打っても海鳴り責めてくる	線香の残り無縁の墓におく		と自み捨て着も見	日っちで	亶易で笑える男は本勿ざ		鳴り物は女剣劇村祭り	給料で辛抱年金でも辛抱	じいちゃんとばあちゃんがいてある故郷	熊本市 遠	ボーナスを神に供えた妻の功	切れ味のまずいハサミで過去切れぬ	不夜城に紅バラ咲かす選挙戦	鳴門市 八	下手な字がきらいで今日も長電話	いわし雲娘の挙式近くなる	茜雲送った友が還らない	岐阜市 渡	
			崎				田			j	井				山				木				辺	
			菜				とし			F	Ч				夏				芳				杏	
			月				し子			3	女				生				水				村	

紙人形は背中合わせに良く眠る追い抜いてそこから坂は七曲り		いるといって、日を守って、日を守って、日を守って、日を守って、日を守って、日を守って、日を守って、日を守って、日のののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日ののでは、日のでは、日	下手が可愛い彼女連れてしい合間にちょっと紅を削などまともに読めぬ新	しものを気づかいながり はのまうに指図する	は互いに地ができないに地ができ	枚方市 森 本 節 子
大義名分 老兄とデートに肩が凝る華咲かぬままに律義な父の剣選挙権つかんだ孫の男振り	味期限すぎた夫の 利さをカードに乗り という。	ころさすがのどかなころさすがのどかな	時計外すと影が痩せていたオタード脱いだ女がうちに	ハビリの肩に冷たい梅雨の化球投げる男に草臥れる	のまに孫の意見とこつかれ笑いの香りを楽しむ	島根県
	芦	河	湊	吉	江	三
	田	津		永	城	代
	静	正	修	伊 三 郎	修	朝

失敗へ臆病風が強くなる全力を出すポイントを間違える出遅れて振り向くゆとりない私	和歌山市 堀	ゆっくりともつれた糸を解いている	耳底で亡父のやさしい声がする	宝くじまたもや夢が遠ざかる	出雲市西山	蠅を追う目が段々とつり上がり	汗だくのブラジャー外して飲む冷茶	枝豆とビールおしゃべり大好きで	今治市 白	本心をさらけ出す人見せぬ人	思い出の場所が二人を和解させ	うっかりと潮時はずし悔いている	静岡市小	悲しみの涙はきっと星になる	飾っても飾らなくてもある真価	一寸陽気に浮かれ一人の城歩く	岡山県 江	時々は上手に鬼を利用する	北陸の旅で拾うて来た寓話	風向きはどうあれ靴が乱おこす	岡山県 大 石
	畑				尾				石				木				П				
	靖				和				サダ				久				有一				あすなろ
	子				子				ダ子				子				朗				ろ
せせらぎに西瓜ひやした里恋し噴水に青春の声抜けてくる	静岡市	伝言板「もうお別れネ」下にNO	佗助の雨にうたれて貴船菊	身に合わぬ背広に一家を背負わされ	寝屋川市	出し物は義理人情のドサ回り	タンポポはさりげなく咲く路傍の主	犬猫の抜け道がある路地の奥	池田市	よい返事来ればと思う午後の雨	一人居にハイハイハイと家事雑多	手配写真どこかで父母が泣いている	大阪市	追伸が本文よりも長くなり	初恋も別れも海は知っている	この森に童話の好きな鳥がくる	鳥取県	消しゴムを使い果して総選挙	わだかまり捨てて発想裏返す	成り行きで川の流れに乗るも策	天理市
せらぎに西瓜ひやした里恋水に青春の声抜けてくる水の音さえ初夏のよろこび	岡市 宇	板「もうお別れネ」下にN	の雨にうたれて貴船	身に合わぬ背広に一家を背負わされ	JII	し物は義理人情のドサ回	傍の	の抜け道がある路地の	田	い返事来ればと思う午後の	一人居にハイハイハイと家事雑多	が泣いてい	大阪市 清	追伸が本文よりも長くなり	海は知ってい	森に童話の好きな鳥が	取	しゴムを使い果して総選	だかまり捨てて発想裏	り行きで川の流れに乗るも	天理市 飯
せらぎに西瓜ひやした里恋水に青春の声抜けてくる水の音さえ初夏のよろこび	尚市	板「もうお別れネ」下にN	の雨にうたれて貴船	身に合わぬ背広に一家を背負わされ	川市	し物は義理人情のドサ回	傍の	の抜け道がある路地の	田市	い返事来ればと思う午後の	一人居にハイハイハイと家事雑多	が泣いてい	市	追伸が本文よりも長くなり	海は知ってい	森に童話の好きな鳥が	取県	しゴムを使い果して総選	だかまり捨てて発想裏	り行きで川の流れに乗るも	市
せらぎに西瓜ひやした里恋水に青春の声抜けてくる水の音さえ初夏のよろこび	岡市 宇佐	板「もうお別れネ」下にN	の雨にうたれて貴船	身に合わぬ背広に一家を背負わされ	川市井上す	し物は義理人情のドサ回	傍の	の抜け道がある路地の	田市木	い返事来ればと思う午後の	一人居にハイハイハイと家事雑多	が泣いてい	市清	追伸が本文よりも長くなり	海は知ってい	森に童話の好きな鳥が	取県土	しゴムを使い果して総選	だかまり捨てて発想裏	り行きで川の流れに乗るも	市飯
せらぎに西瓜ひやした里恋水に青春の声抜けてくる水の音さえ初夏のよろこび	岡市 宇佐美	板「もうお別れネ」下にN	の雨にうたれて貴船	身に合わぬ背広に一家を背負わされ	川市 井 上	し物は義理人情のドサ回	傍の	の抜け道がある路地の	田市木	い返事来ればと思う午後の	一人居にハイハイハイと家事雑多	が泣いてい	市清水	追伸が本文よりも長くなり	海は知ってい	森に童話の好きな鳥が	取県 土 橋	しゴムを使い果して総選	だかまり捨てて発想裏	り行きで川の流れに乗るも	市飯

見てる人ないからそっと拾ってる 風景が変って見える股のぞき 御堂筋お洒落な傘について行く 扇子持つ手が止まってる良い話 大阪市	<ul><li>出事で好きな男をついて見る</li><li>お事成やひばりつかった湯にはいる</li><li>本歌山市</li><li>本歌山市</li><li>お事で好きな男をついて見る</li></ul>	を要よ先に発つなと念を押し 戦争の語り部終章空しくて 戦争の語り部終章空しくて	忘境石	激流に小石は丸く丸くなる松島の松に魅力を吸い込まれ来来より今が大事と花咲かす兵庫県
勢理	木	Ш Ш	佐野	酒
客	村	原門	木	井
ト ミ 子	親	昭幸	み	靖
子	蹐	水 夫	え	子
筆 悲 夜 今 貝 書し道 日割	す がんご がせくよ	なよ巧んうい	手か食術けい	幻聞紫想の
きは妻に任せた硯箱をおり出来た孫だけはのんびり出来た孫だけはのんびり出来た孫だけはの海を葬う花を投げ	し家の平和がすけて見え がの姿勢にある重み がの姿勢にある重み がの姿勢にある重み	のこと笑い袋に笑わされ笑う娘三人よく食べる世辞言う孫の顔見てします	法漫画で示す医師は画家ものの恨みが肩を怒らせるものの恨みが肩を怒らせる。	の墨絵の中に佇ち尽す流す妻の小言が追いかける似合う婦人と乗り合わせ島根
きは妻に任せた硯箱とは妻に任せた硯箱とは妻に任せた硯箱となが追いかける。こればお月さまが追いかける。こればお月さまが追いかける。こればお月さまが追いかける。こればお月さまが追いかける。これでは、一般では、	見岡音花	れまう東大阪市	法漫画で示す医師は画家ものの恨みが肩を怒らせる。高槻市の恨みが肩を怒らせる。	の墨絵の中に佇ち尽す流す妻の小言が追いかける似合う婦人と乗り合わせ島根県
きは妻に任せた硯箱 こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればおり出来た孫の留守 こればおり出来に孫の留守 こればおります。	見 岡山県 富	れまう東大阪市安	法漫画で示す医師は画家ものの恨みが肩を怒らせる 高槻市 執	の墨絵の中に佇ち尽す流す妻の小言が追いかける似合う婦人と乗り合わせ島根
きは妻に任せた硯箱 さは妻に任せた硯箱 だけはのんびり出来た孫の留守 だけはのんびり出来た孫の留守 だけはのんびり出来た孫の留守	見 岡山県 富 坂	れまうまうまう	法漫画で示す医師は画家ものの恨みが肩を怒らせる 高槻市 執 行	の墨絵の中に佇ち尽す流す妻の小言が追いかける似合う婦人と乗り合わせ島根県森
きは妻に任せた硯箱 こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればお月さまが追いかける こればおり出来た孫の留守 こればおり出来に孫の留守 こればおります。	見 岡山県 富	れまう東大阪市安	法漫画で示す医師は画家ものの恨みが肩を怒らせる 高槻市 執	の墨絵の中に佇ち尽す流す妻の小言が追いかける似合う婦人と乗り合わせ島根県

物の名刺へ深く礼物の名刺へ深く礼りの名刺へ深く礼がたよりり	日舎首也被へ会尺して重ら	知 す L		う山県福
礎		知 き	天	辰
石	進	子 た	5人	江
古代から安らぐ母の子守歌古代から安らぐ母の子守歌	って貝客らても思り く花も日影が欲しい く花も日影が欲しい	減庫は空っぽ妻 高が歯を食いし	隠しごと一つがこんなに重肩を揉む孫の善意を褒めて二人三脚妻はよろめく足が	夏休みプランひとりが先走絵日記もなれたものです三日焼けした笑顔はじけて波
歌っていた鳥取県	る鳥取県	多数決がが、一番である。	夏屋 川市 かとは 福岡県	る年しぶき島
歌っていた鳥取	る鳥取	多数決の肩車の肩車が勝両市浅	夏屋 川市 かとは 福岡県	る年生ぶき
歌っていた鳥取県	る鳥取県	多数決がが、一番である。	度をいやるに、福岡県本	年生 とぶき 元 :
歌っていた。鳥取県植	る鳥取県奥	多数決の肩車の肩車が勝両市浅	度を用す と 母 皮留いとは 田岡県 本 田 忠	年生 に

虹が出て会話戻っている二人三歩下がると夫がきょろきょろしてしまう	このあとと言うがCM長過ぎる損得で渡る世間の味気なさ試食までちょっと暇ある握り飯	程型の 月給はひと足早く妻の手に のっくりと進まぬ試歩の汗流す	アンケートに答える趣味も持っている失業手当貰うて体駄目にする趣味の会仕事の名刺出ししぶる	新潟県 高 野 不 二元気さを玄関先の靴で見る 相手より味方ばかりに気を遣う	夏の日にサルビア燃えて待つ国体配念切手きれいで大きくはみ出しそう	香川県田中ふみ
幾何模様雑巾を刺すホットな眼よいとまけ強い呼吸が突っ走る止り木に帰りたくないコールする	松江市 安 食 友 子あの人もおんなじ星を見てるかな チケットが手に入らないJリーグ 背伸びした分だけ肩が重くなり	<ul><li>等立てお茶をどうぞと引き留める</li><li>禁々に泣きを忘れて地蔵様</li><li>手土産を提げて愚痴聞く姉妹</li></ul>	受う方が安いが趣味の畑作り 登より人賑やかな螢狩り 気のゆるみ思わぬ事故に見舞われる	全球風呂明日の策を練るところ 子等の絵に緑の絵の具足してやる 田と語り稲と話して農に生き	出雲市 園 山 かおる改革の多様な仮面惑わされ 出雲市 園 山 かおる期待せぬほうが気が楽タイガース	寝屋川市 瀧 本 八十八

				ゼロ一つ読み違えてた値段表					傍にいるだけの絆で満ち足りる
				冷蔵庫娘が来ればまた空に				る	どしゃ降りへてるてる坊主しょげてい
				とうきびのひげでかつらの村芝居					子につくし夫に尽した皺の数
早久	章	原	Щ	大阪市	る子	はる	尾	丸	姫路市
				脱げそうな靴を穿かせる母がいる					騙されて治まるほどの嘘を聞く
				出欠の返事を懐にたずね					なまくらを梅雨におわせてごろ寝する
			る	ほくろにもまたそれなりの意地がある					どの趣味もかじりましたと道具増え
尽呂久		外背	妹	河内長野市	枝	美津	Щ	出	大阪市
				年金があるから孫にあてにされ					お師匠も弟子を帰してマーケット
				慎重に声聞き分ける白い杖					わいわいと穴場を探す宿の下駄
				沈黙が続くお金の要る話					すまんなとベッドの上で涙ぐむ
ね	つ	一浦	Ξ	静岡市	豊		岡	西	吹田市
				これきりにしようと潮が引いて行く					お年寄居るらし国旗掲げてある
				救われた気持を作る蒼い海					素晴らしい日の出良い事ある予感
				味方だと信じて呼んだのが誤算					鉢巻で父が料理の腕ふるう
津志	伊伊	沒邊	渡	今治市	子	靖	木	柏	河内長野市
				同居してよかった姑の知恵袋					日曜日一人のどかにお留守番
				じゃんけんで決める客間の残り菓子					客帰りのどかな午後のティータイム
				先生も落選すれば過去の人					見わたせば辺りのどかなローカル線
たま	た	沢	柳	静岡市	子	悦		林	出雲市
				方言で車内が和むローカル線					タコヤキが大きく見える夜店の灯
				あの二人いつの間にやら雲隠れ					四世代同居の玄関の靴の花
				愚痴聞いて貰いに海へやって来る					乱筆の手紙に一句添えてあり
よしみ		上	辻	香川県	壺	-	井	酒	羽曳野市

お気前が良いと財布があきれはて	励ましの心に浸る趣味の会	大器晩成まだ信じきる妻の顔	和歌山県	自分の位置を確かめる本籍地	あなたは若いですね呟いてみる	私は今も東京に憧れる	鳥取県	うるさいと言うよに返事ハイ三つ	おおらかな妻にすっぽり包まれる	走り書きの伝言板に見た決意	藤井寺市	足りないとこ夫が庇う夫婦仲	旅ならの朝風呂肌が白く透き	川螢待つこと忘れバーベキュー	姫路市	ポストまで花のパラソル軽い足	唐辛子律義に小さな実をつける	空を仰いで無口になった通夜の帰途	羽曳野市	旅に病む留学生に代理ママ	ジーパンがよく似合ってる共白髪	父さんのカレーどの子もよう食べる	西宮市
			吉				清				楠				福				徳				古
			田				水								島				Щ				谷
			武				加				昭				姫				み				ひ
			治				代子				子				女				つこ				ろ子
よい便り来そうポストの埃ふく	裏方に徹し人間まるくなり	旅仕度 妻の衣装が派手になり	鳥取県山	朝食はバイキングです共稼ぎ	子守などしながらカレー煮ています	思い出の中にしばらく佇ち止まり	島根県	真夜中の静けさ針の落ちる音	煩悩に励まされては生き続け	雑音は聞かずひたすら我が道を	八戸市 島	身辺整理ガラスの埃拭いてみる	恋に酔う津軽海峡唄がある	残像がどっと崩れた地平線	弘前市	選挙戦お祭りムードの改革派	列島を火攻め水攻め世紀末	菜園のトマトも茄子も個性派で	吹田市 馬	金比羅は下る方から声かける	闘大場人の匂を消してゆく	舟賃を山分けしてる県境	弘前市 中
			本				田				田				戸				渕				Ш
			本 正 光				田かつ子								戸ッネ				渕光子				山雅城

売り出しのさんま肥えてる順に売れ	借金をしている方が肥えている	秋風にそろそろ女取り戻す	河内長野市	子煩悩 遅れさしてる子の自立	一大事 妻が川柳やりだした	俄雨かがり火揺らす薪能	大阪市	君ヶ代に威儀を正して腰伸ばし	半世紀逢えば二十歳が甦り	雨蛙ガラス戸越しに知らぬ顔	唐津市	溜め息をついたら猫と目が合った	生ごみを出すときに会うお隣さん	わたしんちいちばん高いのはお仏壇	島根県	ネクタイをとれば三児の父の顔	噴水の虹に夢のせ小半時	快適な旅の余韻に澄んだ顔	静岡市	あっけない別れぼんやり数珠を繰る	半分は見栄アンケートにある答え	友情へ決心つかぬ保証印	佐賀市
			水				中				Щ				小				増				古
			谷				井				門				林				田				Щ
			正				正				9				延				扶				かず
			子				秀				""				子				美				のり
太陽へ小ばなししつつ梅を干す	汗の色変えてふき出る自民党	鳥取市	片付けぬ子が居なくなり妻不満	応用が効かずにいつも乗り遅れ	綾部市	子の帰省 西瓜 包丁弾んでる	大声はチラシを置いて行っちゃった	松江市	雨の日のお茶に心のゆとり知る	長雨に紫陽花さえもうなだれて	岡山県	ナイターは美味く不味くもなるビール	PLの花火音だけを聞き夏盛り	羽曳野市	試着ではもっと似合っていたものを	影法師だけは私を見捨てない	今治市	グチ言うて帰った人のグチを言い	三文の得もないのに目が覚める	泉佐野市	馴れ初めは敬老会の同じ席	里帰りお国訛りの和やかさ	静岡市
		中			藤			浦			牧			西			村			河原			片
		西			田			辺			野			村			上			崎			平
		智由			芳			静			秀			りつ			久羊			礼			静
		恵子			郎			江			香			つえ			美子			子			代

古稀過ぎた余生を伸ばす万歩計浴衣着て老いの背筋がピンと伸び	有り過ぎる余暇に財布の軽いこと 唐津市 入 江 喜久亭水道を揺れば湛い水か出る	く直になしば温いない出っ 八尾市 秦 正 子だんまりの二人連れなら夫婦です ようやくに妻が頼りの杖らしい	だんだんと小さくなって老母の病むお見舞いに小さい嘘を置いてくる	添寝したつもり積木の音がする 野のひらの温さ伝わる握り飯	海鳴りを耳に今宵も子守歌 和歌山県 藤 井 春 子言いわけを模索しながらペダル踏む	天気予報当たり過ぎても腹が立ち真っ白なキャンバスに描く未来地図	当り前の事ができないのも歳か 出り こ ふさ子 稲光 亡父の背中がなつかしい	島根県松本聖子
樹々緑 眼鏡の奥も和んでるサヨナラをマタネにかえて老人会	コーク ヒ カ ー 1	ドクターに乏比ですかともことで 側光地どころか我にも長い梅雨 田中喜	総選挙この一票を考える 豊中市 み き わきみ遊び疲れ帰りつくなりへたり込む	衰えを思い知らされ写経する 豊中市 田 中 道待ち時間不安ばかりが先にたち	政界は昨日の敵は今日の友 兵庫県 安 達不況風身近に迫る子の会社	例えばの話に重さのしかかる 唐津市 江 川 青	老人の余生楽しむ刀のあと 唐津市 浜 本 治誘ったのか誘われたのか歩いてる	唐津市 福 島 紀

日時場所後は読まない案内状	困ったらお願いしますと受け流す	神戸市 岩 田 信 義	恐竜が居たよと卵掘り当てる	投票がすめば主客が転倒する	熊本県 増 田 一 乗	雨降れば緑きわだち山近く	親ばなれした子を思う馬鹿な親	島根県森山修光	台本に出てないセリフが大当り	ズボンはいて見合いに行って気に入られ	池田市 水 木 博 男	改革や言うても候補者同じ顔	夢の島ゴミもりっぱにリサイクル	大阪市 平 井 露 芳	スペアキー無くしてからの子の自立	アンカーは父を背負って母が行く	鳥取県 武 田 照 女	風当りよけて通るも処世術	突然の目まい脳裏に死がよぎる	泉佐野市 内 田 倫 子	アルバムが時の速さを教えてる	忘れてた愛と言う字が目を覚ます	米子市 永 井 三津子
留守の日に遺書をゆっくり書いている	一万円一度透かして見る癖が	広島県 森 川 抜	台所も夫婦の愛を分かちあい	選挙戦 梅雨の晴れ間を狙い打ち	大阪市 乾 哲	再会へ過去を楽しく語りあう	子が巣立ち夢は小さくして余生	大阪市 三 浦 千	会議場沈黙破る挙手の声	菜園に愛の丹精実を結ぶ	静岡市 松 下 正	般若の面捨てた時から強くなり	父の日を二人の息子覚えてた	島根県福間博	バーゲンの服が気ままな旅をする	梅雨晴れ間順序ただただ白を干す	岡山市 山 磨 行	悠然と歩く 子供の前だから	飼い犬に咬まれた傷だ洗っちゃお	吹田市 古 川 喜	首にかけた鍵と一緒にお留守番	門前町元祖本家が入り乱れ	唐津市 市 丸 は
		1次 智			静			津子			枝			利			子			美子			る子

すり切れた辞書から会話弾みかけ仏間の灯会話ひとつをとり戻す	今日も雨いろんな事を考える 兵庫県 北 川 とみ子追憶の音を溜めてる耳の底	に刻み込む母の唄声寝つき母の心を休ま	に発え	妻がに言	絵日記に田舎の夏がたんとある 夏バテを少し残してもう九月	羽曳野市 福 田 悦 子おしつけの親切だった叱られるメダか掬う橋の上から母の指示	片べりの靴に染みてる老父の汗 島根県 岩 田 三 和孫一人来ると明るくなる茶の間	香川県 山 地 マツヱ
地金出す人はお供をはずされる図書館で豪華な本を借りて来る	大水に行く先まかせ木の根っ子 柳 金 吾噴水にはしゃぐ子供に虹を見る	一番 ではも入われも人なり負けはせぬ おしい出してる亡母の鍬	おりあえず別居のうえで考えよう (調停室から) 一億も持てぬものなら諦めよう	歌医さんマコと呼ぶ名でカルテ書きもう一度鍬を持ちたい手術台	旧友が来て休肝日繰りのべる 泉佐野市 大 工 静 子老い二人戸締り気になる旅の宿	下駄購うて昔のお盆を懐かしむ 墓参り幼馴染が孫連れて	十和田市 小笠原 敏 夫ひたすらに幕を引くまで夢を抱く	鳥取県 橋 本 孝 由

雑学が充分役に立っている 香川県 堤 く に 子	ともあり	鳥取市 谷 口 侑 里神様に見せてから入れるお賽銭	7	とおう ままれる おおおとり という とうしょう おおい とり とうしょ おいま とり とうしょ おいま とり こうしょ しょう しょう はい かいしょう しょう しょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう しょうしょう しょうしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう はいしょう しょう しょうしょう しょうしょう しょうしょう しょう しょうしょう はんしょう しょうしょう しょう	計会が, マンニンの談が通じず球がすっ	大阪市 中 橋 恵美子	選抜は負けてる方に味方する	新品の小ちゃな長靴雨を待つ	大阪市 大 河 未佐子	傘立てに見知らぬ一本気がもめる	一人旅峠は風と共に越す	寝屋川市 坂 上 高 栄	福砂屋のカステラとどくご命日	亡夫の手に馴れし小筆やふみ机	寝屋川市 豊 福 路 子	寄せ返す波に足元たしかめられ	娘の料理みんな小さく刻んでる	唐津市 岩 崎 實
和歌山県 村 中 悦 男子の担任名前出てこず妻まかせ	). }	「	ĵ	7件等に送迎されてアルムーン 寝屋川市 前 た も つ	友自慢私も負けず孫自慢	鳥取県橋谷静江	思いきりしゃべる夕餉の和がぬくい	にわか雨カレーの匂う雨宿り	島根県 安 部 美恵女	菜園の曲った胡瓜も神前に	うっとりと火山の隣湯につかり	泉南市 坂 根 流 水	行かないで猫がズボンの裾を嚙む	爪に灯をともして貯めて子に取られ	大阪市 小 糸 昭 子	高屋根にふとん載ってる出水あと	手拍子で踊る浴衣の裾さばき	静岡市 大 村 正 雄

友達 上鰻 失うも 梅 好 服 効 病院の梯子している七十歳 しょうもな 信 お祭りに 老人施設ナース笑顔に最敬礼 刈きな け落ちをしても一緒になるつも 用 42 か 13 をあ でよいとクチナシ句 を食べて命 きでとパ 晴 は 6 に戻るブランコゆ 0 のに好きと言えない のひとつも下げて敷居越え n は 雲の 地域住民連帯す B n これ もうな 応 肌 V 男 峰 1 にさっ 聞いたことにする より 探す暇な人 がまた延 奈良漬だけで酔う 0 10 顔は陽にひかる ば 男 Ш り北 高 0 らりこぎ 高 10 15° だし 自 0 笑 東大阪市 藤井寺市 尊 風 米子市 豊中市 鳥 吹田 米子市 心 取 n 市 市 池 月 松 菊 服 近 吉 部 尾 原 Ш 地 藤 JII 保 敏 朗 秋 ti 7 郎 降 男 子 星 洮 若作り 礼服 父の 居 満 愛牛と別れしきりに泣いてくれ 足の汗を流して今日を終え 酒 墳 かをぬ H 屋の酒は か

第7回

3 9月26日(日)午後1時開場 堺市立栂文化会館3階第1講座室

(泉北高速鉄道とが美木多駅3分)

おはなし 作二郎 題(各題2句・締切午後2時)

「抜ける」 重谷重比呂選

「昇 る」 桜井 千秀選 「飾 る」 竹山 逸郎選 猫 塩谷 幸子選 礫 柿木 英一選 「太 鼓 河内 天笑選 「自転車」 梶川雄次郎選

参加曹 1000円 (作品集・参加賞呈)

堺市文化団体連絡協議会

堺市·堺市教育委員会 後援

どうしても私読めないつなぎ文字

嘘も ⇒ジュニアの部 たまには必 香川県 (小6)

米子市

木

鳥

取

市

中

澤

IF.

惠

ら欠け

た瓦

が

宝

に息子気づかうプレ

セ

ント

島

根

県

大

坂

藤

7.

げ

ば

我

が家の顔になり

明石

市

小

Ш

酔

月

おでんがよくにあ

63

 $\mathbf{H}$ 

中

な

2

村 春

枝

**—** 72

#### 水 煙 抄

8月号から

### 東 倫 子

ります。人間を見つめ探究した陶冶の句を私 なりに見つけ、鑑賞させていただきました。 陶冶とは練り鍛え養成することと辞典にあ 川柳は人間陶冶の詩である 麻生路郎

# 都合よい耳で都合よく生きる

うまく生き抜く戦術でしょうか。 とても便利な耳。毀誉褒貶の渦巻く世間を Ш 子

# 忍耐を胸にたたんできく話

とりは優しさでしょうか、強さでしょうか。 しいですね。忍耐を秘めてなお、話を聞くゆ 胸の奥底にたたんであるものが忍耐とは悲

# 何も言うまい嘘の続きが生臭い

臭いくらいでは済まされませんよ。どこかの 言い切る潔癖さ。まして欺瞞や方便の嘘は生 可愛い嘘、罪のない嘘でも続けば生臭いと

## 国のウソツキ総理大臣様 豪快に駆ける振向くのは止める

ける姿には活力と自信が満ち溢れています。 た頃に比べると何と今日の爽快さ。豪快に駆 自画像がだんだん他人めいて来る あちらこちらと配慮して振向いてばかり居

めいて来るから不思議です。 姿を透徹した目で見据えたら、何となく他人 客観的に物事が見られるのも貫禄。自分の 生鳴ますみ

# 神さまの前は無実の顔をする

の神は人は裁かず、人を許し給うでしょう。 の前では無実の顔が出来るのです。全知全能 自分史に恋愛二三足しておく 人間の愛より神の愛を信じているから、神

# いい人と言われるわけを考える

スをおまけして自分史の完結。人生悔いなし。 々。でも一寸色どりが欲しいな。ラブロマン

山あり谷あり懸命に生きて現在の平安な日

市 丸 はる子

どと本気で考える貴女はとてもいい人です。 取って誰かに笑われているかも知れない、な 私はいい人なんだろうか。言葉通りに受け ひかる

翠 らっているけれど一番母に甘えているのは父。 肝っ玉母さんの頼もしい首。お疲れさま。

をついて見せても本心は嬉しくてたまらぬ母

す。念仏はお坊さんにまかせて精いっぱい人 人生の達人。洒脱味溢れる截り口に脱帽で 念仏が下手で成仏致しかね 大西 文次

## どの窓も幸せごっこの灯がともる マツエ

しかねたく念願して居ります。

間臭く生きましょう。私も念仏下手で成仏致

争った夜も布団は敷いてくれ

## ありがとう生きたことばを今日も聞き 山本正

ともす。それが幸せごっこであったとしても。 難うは生きた言葉。生きた言葉は幸せの灯を って布団を敷き、夫は有難うと胸で呟く。有 窓の灯はどれも幸せそう。争っても妻は黙

# 父までがぶら下がってる母の首

母は一家の太陽。亭王関白で威張らせても

# ため息が出るほど親に似てくる子

反発し合った時期もあったのに何とよく似 小糸昭子

て来た父と子。悪い所ばかり似てなどため息

JII

柳塔賞

# 路郎賞候補作品

## 黒川紫香

越智 一水落ちつかぬ時は風呂屋の風呂に行く 叱ってる孫ににっこり笑われる 吉岡 美房たこ焼が好き人情家かも知れぬ 西出 楓楽

らっきょうの歯ざわり夏は至近距離

フィルムが残ったそうで撮ってくれ入れ歯からはじまる老後設計図 山本希久子 長泥にわざと踏み込む孫の靴 山海 友熙 吉川 寿美

医者へ行け行けと電話の向うから ビル三つ持って貧乏くさい伯父 丸山よし津おとぎ話に狸寝入りの心地よさ 舟渡 杏花おとぎ話に狸寝入りの心地よさ 舟渡 杏花

ちちははが見え隠れする長い坂 林 荒介奥の院まで頑張った母の足 中西兼治郎

犬が逃げ探す私を探しとる 二宗 吟平息子らがいとも上手に無心する 浜本 ちよ電話でもしろと電話で子を叱り 山田 高夫

# 野 村 太茂津

好きだから少しじらしてみたくなる好きだから少しじらしてみたくなる 黒田 真砂なの涙時に刃となることも 黒田 真砂なの涙時に刃となることも 黒田 真砂なの涙時に刃となることも 黒田 真砂なのだけで がっておればよい 西出 楓楽 はんはヒョッと自分かも知れぬ 木村 明人

出る杭も打たずにおけば役に立つ 桜井千秀教そうか抱こうかそっと叱ろうか 土橋 螢石川侃流洞

情念の森で振り子が蘇る

祥庵

橘高薫風

にも占うものがある 奥田みつ子

負け続けるととても明るい顔になる 一手 ゆき 平成に昭和の疲れどっと出る 秋元 てる

ときどきは岩戸へ消える妻と居る お川寿美姑が来てくまなく指紋つけて去ぬ 吉川寿美わが影も直立不動の日を忘れ 小砂 白汀わが影も直立不動の日を忘れ 小島 蘭幸

隣の花賞めると枯れた家の花 丁坪サワ子その花は嫌だと言わぬ石仏 林野 甦光泣き出してからの話は嘘だった 片上 明水

## 阿萬萬的

ロボットでないから欲も愚痴も出る

馬鹿が持つとペンもカメラも恐ろしいお湯の出る蛇口に慣れてゆく恐さ。吉川寿美地球自転それも忘れておりました。内海幸生地球自転それも忘れておりました。内海幸生

新家 完司

ちぐはぐな絵をあたためている夫婦

下駄箱を開けると捨てるものばかり 重人

色のない映画の中の自分かも 信心をしてから老化すすみだし 残ったのはロボットだった消去法 古希過ぎて耳だんだんに素直なり わが影も直立不動の日を忘れ 古野ひで 身 武太 玲子

]]]

柳塔賞候補作品

役立たぬ指はつめだけよくのびる 女ですほんのり香る位置でいい 人形は笑ったままでほっとかれ 西原 堀端 吉岡きみえ 三男 趣味のない父だが人の世話が好き 片上明水

安平次弘道

### 西 田 柳宏子

死んだふり眠ったふりをして生きる 蘭幸

叱ってる孫ににっこり笑われる 風呂敷に包んであった亡母の考え 陽の恵み毒草までも花をつけ 全自動故障 半自動にもならぬ 生涯を薬味のままでいる私 矢ガモがかわいそうだと焼き鳥屋 都倉 田中紀美代 天正千梢 美房 求芽

生きるには逃げるほかない命がけ 火消壺一気に燃える夢を抱く 軒下の石臼 父母はもつ居ない 石川侃流洞 奥田みつ子 淡路ゆり子 田村新浩

父権地に墜ちていびつなにぎりめし

宮尾みのり

素うどんの味に似てきた凡夫婦 嫁も留守ぼやき漫才始めるか 筍の一尺伸びて生き残る 奥田みつ子 舟木与根一 山海 友配

無人駅になってもつばめ帰って来

安平次弘道

#### 小 出 智 子

息止めてみてもだあれも慌てない 吊り橋の揺れを気にする村長さん 頼り合う夫婦に小さいかくしごと 古川かずのり 高畠五月 大西文次

ポイントを軽くおさえて妻が立つ 新聞で顔かくしてる仕掛人 はすかいに見れば世間はみな喜劇 晩に聞く鶏鳴の懐かしさ 中塚 向井末貞一 土橋睦子 礎石

自己主張孔雀が羽根をたたまない 村上久美子

故郷が実感できる墓の道 嘘少したして話の角削る ありがとう生きたことばを今日も聞き 背のびして柱を拭けば亡父の声 クラス会 花も嵐も越えた顔 森田 勢理客トミ子 牧渕富喜子 市丸はる子 藤井高子 文

> 女々しさの限りを尽くし亡妻記 永田

宮 口 生

易々と敵が渡って行った橋 母の手に返すと甘え癖が出る 顔のない男の意見なら聞かぬ 返し縫い女の意地がまだ迷う 不眠の夜 亡母なる星を探してる 亀井円女 均等法 男優しくなり過ぎる 少しずつ命が動く木の芽どき 待望の太郎泳がす鯉のぼり 勢理客トミ子 永澤 鶴久百万両 国米きくえ 大橋 政良

はすかいに見れば世間はみな喜劇 孔雀が羽根をたたまない

そっくりの似顔絵だから気に入らぬ 励ましてあげよう男は弱いから 尻尾振る癖で男の貌がない 自信ある影はうしろ振り向かぬ 宮崎 朝倉 的場十四郎

故郷が実感できる墓の道

大川

牧渕富喜子

局田美代子

子離れも口で言う程やすくない 鬼

サクラさくほいほいはずむ熨斗袋 秦 包丁に週休二日とってやる 会釈した男は葱を持ち代える カーネーション今日はあなたが主役です 岡本 木下 井崎ミサ子 市丸はる子

高田美代子

フルムーンやっぱり世話の焼ける人

賢い人のそばに座らぬことにする 永田暁風困ります叱られますと貰っとく 中井 正秀田のます・ 上野 照代

一に一たして二でないのも答 藤井 高子味方だけの暗号ぼくは聞いてない 指宿干枝子

ひとりより二人がいいとパンを分け

組でみじんに刻む消費税 尾宮 弘治許されて許して花の下に居る 古谷ひろ子使い捨てされない前に暇をとり 森 茜

## 板尾岳人

父がいたら母がいたらと豆ごはん 弾んでる毬の行方よ風は夏 さくら餅うっかり秘密口に出し 赤い糸切りそこねてる糸切り歯 返し縫い女の意地がまだ迷う イントロの長さに岸が遠くなる 亡母とした約束がある花のみち 枚の絵に会いたくて逃亡者 一杯咲いて悔いなき落椿 沢田 中尾まゆみ 国米きくる 流 池 浅子まつゑ ひかる 奈美子 きん 翠子

罪ひとつ母の背中に裁かれる

明日と書く墨がだんだん滲みますでん手まり弾んでいます女です。宮尾みのりてん手まり弾んでいます女です。宮尾みのり

念仏が下手で成仏致しかね

大西

スタッフ9名を決定。

剪定の枝生き生きと捨てられる 宇野 照代人間哀史何処まで飛べば春の海 大峠 可動結び目が一寸ゆるんだ赤い糸 大川 幸子

玉置重人

吐く息の深さにしあわせが落ちる 池 森子

遺伝子がこんなはずではないと言う

芋粥が吹きこぼれてるインターホン 藤井 高子

別荘番になり別荘で暮してる 禁煙のホームで煙草売っている 世界は一つ何と悲しい絵空事 老人と猫連休の留守守る 裃を脱ぐと構図が描けてくる 父がいたら母がいたらと豆ごはん 顔のない男の意見なら聞かぬ 賢い人のそばに座らぬことにする 永田晩風 嬉しい日みなに挨拶したくなる 植田 八間哀史何処まで飛べば春の海 期一会 幾度襟を正したか 高田美代子 森山 亀井 宇野 鶴久百万両 大西 古川かずのり 修光 円女 文次 一京

▽全国誌上川柳大会のPR強化と事務担当の 近藤豊子(堺市)3氏の同人推薦を承認。 で大橋政良(砂川市)塩谷佐代子(海南市) で大橋政良(砂川市)塩谷佐代子(海南市)

▽事務局員の交替を承認。

新同人紹介

大橋

薫風・紫香・太茂津・諷云児推薦

良

太茂津・緑良・英子推薦 谷 佐代子

<u>.</u>

--薫風・清芳推薦 --薫風・清芳推薦

近

# 極限状況と川柳

## 川柳こぼれ話

中正坊

川柳はいかなる時、いかなる所においても原状況においても。その一つが『戦時』であり、『戦場』であって、高崎隆治選著『川あり、『戦場』であって、高崎隆治選著『川あり、『戦場』であって、高崎隆治選著『川あり、『戦場』であって、高崎隆治選著『川あり、『戦場』であって、高崎隆治選著『川あり、『戦場』であっている。

第二次大戦の末期、神風特別攻撃隊員が出第二次大戦の末期、神風特別攻撃隊員が出第二次大戦の末期、神風特別攻撃隊員が出る。 まだ生きているかと友が訪れる 雨降って今日一日を生きのびる 下メリカと戦ふ奴がジャズが好き 特攻のまずい辞世を記者はほめ 今日もまた全機還らず月が冴えこれは、戦歿海軍飛行予備学生の手記『雲 これは、戦歿海軍飛行予備学生の手記『雲 た四名の百句中から抜いたもので、本誌の七た四名の百句中から抜いたもので、本誌の七

考え得る最低生活に耐えた。それは原始社会

次号に同氏からのメッセージを紹介する。

題して、黒パン狂詩曲、・捕虜は、ほとんど

起こされて受取るパンの肌ざわり

年2月に再び日の目を見たものである。 ら20年前の昭和47年に『カマの舟唄―エラブ ともに収められている。実はこの本は、今か ラーゲリ(収容所)で詠まれた川柳で、鬼川 ○九号(昭和61年6月号)に掲載した。 重な検閲網を潜って持ち出したという。 氏(元札幌二中教諭)が丹念に書き留め、 ゲリの壁新聞に掲載された作品を石井理八郎 という俳号を持つ藤本秀太郎氏が選し、ラー 者自身の作品だが、川柳については「酉三」 を送っており、この本に収録された短歌は著 太で敗戦を迎え、シベリアの奥地で捕虜生活 店の「同時代ライブラリー」の一冊として今 のが、加藤周一氏のはからいによって岩波書 カ文学史』と題し、私家版として刊行された 太刀雄著『ラーゲリ歳時記』に多数の短歌と た極限状況の最たるものであったシベリアの さて今回、紹介したいのは戦争がもたらし 著者は、軍医候補生(見習士官)として樺 生活の中で最も切実なのはやはり食物 まえおきが長くなってしまったが、ラーゲ 匙なめる頃によっやく味を知 献立の放送 いびきびたと止み

は分かるが、エラブカ川柳、白眉、の句一 釈がなくては理解できないものが多い。 という句になった。粗末きわまる住居、 県在住の同人、田村新造氏が本誌「川柳塔」 を紹介したいが、予定の紙数がつきた。 立った」と著者は語る。もっと多くの作品 を費すよりも、川柳の一句は、その間の状況 私には何を意味しているかがつかめない。 は捕虜の思想教育に関するものだとしても、 な労働(ラボータ)についての句もあり、 のようである一と著者は言う。それが 柳小説〟を綴っているのをご存知だろうか。 って川柳を迎え、あらゆる文化運動の頂点に 欄に毎号、シベリアを回顧して連作し、 つたえて余すところがない。大衆は拍手をも いわゆる民主化運動)を心にくいくらいに これは、注釈はいらないだろう。「百万言 ところで、シベリア抑留の体験を持つ広島 民主主義 鉄条網のなかで生き 屁の音で居どころ知らす不寝番 進化論 人はだんだん猿に似る 黒パンで生きてちょっぴりマルキスト 言論の自由を壁に貼っておき 赤よろしいづれ浮世は六百けん 言論は自由だそうなと声ひそめ 過酷



#### 河 内 天 笑 選

としよりの縄が脆いと限らな 受け皿と我慢袋を修理中 花火屋さんの前ではいつも立ち止まる 米子市 八 Va 木 千 代

短編の夢ばかり見る真夏の夜 信号が僕に意 地悪ばかりする

豊中市

中

IE

坊

線

書く事がやっ ぱりあった日記 富田林市 帳  $\mathbb{H}$ 

泰

子

揺り籠のムード 二等寝台車 二人きりこれが新婚時代なら

罪を消すようにれもんのひと雫 巨神戦どこから来るか五万人 和歌山市 芝 登志代

トントンと階段駆ける若い音 へそくりがばれて作戦練りなおす

許すのに勇気がいった若い頃 肩パットみんなはずして楽になる 米子市 中 P

3

吃水線超えて試してみたい愛 ゆっくりと塗り足して行くわたしの彩 ひとさまの目には愚かな願いごと もうー 度と白には戻れない 寝屋川市 ページ

海南市 保

気がつくとひとりで旗を振ってい 漁業補償されても海は戻らない

冗談にしてはからしが効きすぎる わたくしを刻みつづけてゆく顔だ 中

一本あるかないかで引く字引 今治市 野 佳

雲

根を張らぬ浮草楽に世を渡り

気が向けばトコトン掃除する男 松原市 池 しげ

お

盗み酒見たゴキブリは殺される

十和田市

劦

君にだけ雨が降ってる訳でない 都市計画今年限りの稲の花

油さし過ぎたか妻がよく喋る 香川県 地

7

"

工

若

(直ぐに帰れば妻が不審がり

真

引き算がだんだんうまくなって来た 句読点いつもどこかを打ちそこね 鳥取市 默

田 あやめ みつ子

銭

のないときの親父はよく叱る

鳥取市

西

原

艷

子

まず一杯ことの始めは立ち飲み屋

江

原

とみお

州

嘘つくと右目がすこし細くなる

大

角

幸

代

踊り疲れてみんな仏の手に還る しがらみを抜けた女がよく踊る

た

楓 ていねいな言葉が傷を深くする

大阪市

本

蕗

児

観 転木馬時には君も乗ってみろ 覧車妻は無言のままである

豊中市

Ш

慶

子.

子の意見入れてシナリオ書き直す たそがれにノータイで行くビアガーデン

八尾市 片 英

三つ巴相撲にJリーグに野球 白い息かわす北ぐに魚市場

和歌山市 桜 井 千 秀

**雲行きに仕すと碌なことはない** 

白黒をはっきりさせた風当たり

い娘が一人も来ない露天風呂 馬 花

床柱へし折れそうな子の学費 違えてゆったり座る指定席 広島市 中 村

しにしたりだしにされたり友同士

光

要

思い出の駅なつかしく途中下車 先輩も後輩もない番付表 人間 ふりかかる難儀を神の試練とも 詫び時をはずしぎくしゃくしてる仲 潜りっこなら父ちゃんはもと河童 にたにたと貧乏神がやって来る 寝不足の電照菊が咲いている 居酒屋の夜学に五十年通う お惣菜売場で解散をする旅帰り 点滴台曳いて面会室へ来る 総入歯夫は保険妻実費 おいしかったきつねうどんで旅終る 白 どの党もお願い電話かけてくる 私より花好きだから嫁にきめ 捨て犬にチョッカイ出して連れ帰る エリートのつもりで吠えるマルチーズ いユニホームの黒いアンカーだ に休め休めと雨が降る 岸和田市 羽曳野市 大阪市 兵庫県 米子市 大阪市 H 田 橋 橋 はるお U 頂留子 絢 П 智加恵 ただし 子 7 子 住 螢 k" 刑 子への愛とても妻には歯が立たぬ七人の敵ひとりでも手に余る 慣れていても同じ失敗くり返す 夕ご飯そこそこにして夜店の灯 縫 死んでもいい!がだんだん言えなくなった 父の日に初めて買った男物 円満の秘訣 私の胆石娘の腎石よく育つ 雑兵が円周ばかり歩いている ユー 誰と歩こうと天下御免の齢になり ぶどう酒も飲めぬ男で疲れます 63 リンクも飲んで大いに頑張ろう 務所がポツンとあって丸い月 上げの取れた頃から父と距離 モアの原点 あきらめ思いやり 河内長野市 羽曳野市 寝屋川市 愛と見つけたり 松江市 岡山県 弘前市 倉敷市 熊本県 米子市 遠 井 JII Ш 野 П 村 中 和 和香子 黎之助 有 登志子 喜 荒 甲 夏 克 文 久 朗 生 代 介 子 壶 枝 時 吉 サッカーを好きにならんと遅れそう 五六ヶ所印鑑捺して役所出る 安物のお茶で茶柱立てている 言 漂って梨の花咲くこの村へ 見え透いた温 行こか戻ろかええいままよと突っ走る 渦にいて建て前ばかり口にする 文字を見てあいつからだとすぐ分かり バランスが崩れて妻に髭が生え 王手箱よりも嬉しい嫁がくる 核心になかなか触れて来ぬ電話 クライマックスないまま人生黄昏れる 無味無臭そんな若者増えている いたいこと山ほどあろう丸い石 い芝居もしてくれる 和歌山市 藤井寺市 寝屋川市 平 吹田市 西条市 片 米子市 小 倉吉市 大阪府 Щ 村 岡 浦 端 松 П 倉 Ш

紅

たかし

小

鹿

子

水

かすみ

雄

17

節

子

いわる

求

芽

的

完

司

豊

隆

昼酒に寝酒のくせもついて古稀 婦唱夫随あなたビールを飲みましょう 名物にときどき旨いものがある 軽 日記には書くこともなし梅雨の雨 負けつづく力士を思う雨つづき 血統の美学のために走る馬 懐を読んでるように会釈する また先が見えなくなって流される その時が来たらおてもやん踊る うつくしき浮名の数を抱いて老い もうあかんあかんとしたたかに生きる スクリン入れて極楽鳥になる さかいはせぬやりたい事が他にある いウソいつか自縛の縄となる 和歌山県 羽曳野市 寝屋川市 羽曳野市 米子市 尼崎市 米子市 倉吉市 月 野 中 垣 JII 中 城 島 原 金 宵 夕 みつこ 花 悦 寿 年 御 露 きみ子 恵 ようじ 造 吾 子 男 代 美 子 明 子 前 杖 タバ 紫陽花に抱かれて休むかたつむり 「春月庵」も雨漏りがする梅雨 軽い 路 着 神のつくっ うれしくて昨日と同じ道辿る 集中豪雨天気予報の当たりすぎ ふる里の新茶便りと連なって 雨降りのケト 七色のラッパを妻は使い分け 傘さして草も抜きます梅雨最中 年金の花壇にきゅうり茄子トマト 飾っ 天風呂わたしひとりの月に コ吸いに行くスーパーの休憩所 返事を勝手に誤解したあなた た美 人の声が男です た芸術品よ蝶の羽化 ル 悲しい笛を吹く 寝屋川市 和歌山県 和歌山県 岡山県 鳥取県 米子市 宝塚市 熊本県 八尾市 鳥取県 Ŀ 丸 神夏磯 福 古久保 する 野 Ŀ Ш 原 水 杉 H 本 田 宵 志 高 加代子 よし津 美智子 T 瑞 俊 辰 和 芳 7 サエ 子 草 重 栄 枝 路 步 江 子 郎 陰口 ザ・演歌女は弱いものなのね 文学の小径 街の名がか 旅疲れ地底に沈むよう眠り 心 も一人のわたし二の足ばかり踏む 乾杯を一気飲みするうれしい日 謝っ 地位名誉かねとだんだん欲が張り 市場に行く時間 正面の女が目立 燃え尽きてウインクしてる螢光灯 円のサー 臟 を叩 が八十年も休まない たり謝られたりして昏れる 42 ビスもない郵便物 芙美子の声がする わり昔が消えてゆ た口で誉め殺. が惜しい農繁期 一つ砂かぶり 和歌山市 和歌山市 和歌山市 箕面市 高知県 有田市 広島県 今治市 奈良市 大阪市 兵庫県 H 池 細 森 <

2

ta

南

奉

田

恭

昌

Œ

雄

利

武

とよ子

柳

華

勝

美

重

放

任

]]]

菊

野

江

清

芳

井

かなめ

Ш

稚

代

Ш

抜

智

<b>単情のハストも最と引力には勝てめ</b>	-	和歌山市 楠 見 章 子	ずけずけと言えた若さがなつかしい	和歌山市 森 口 恵 子	濡れ衣が晴れて空気の美味いこと	藤井寺市 菊 地 繁 男	浴衣干す河内音頭が滲みている	藤井寺市 高 田 美代子	恋ひとつ出来ぬ男でたよりない	鳥取市 美 田 旋 風	本音とは違う返事をしてしまい	岡山県 小 林 妻 子	1	鳥取県土橋睦子	出しゃばって三羽ガラスの名をもらい	兵庫県 酒 井 靖 子	男一匹裸になってから強い	倉吉市 奥 谷 弘 朗	生んどいて良かった気だてのよい末娘	大阪市岡田ふみ	ジョークかも知れず本音かも知れず	出雲市 竹 治 ちかし	親孝行出来ぬ分だけ経を上げ	静岡市沢田きん	寝たきりの姑の涙を見てしまう	静岡市浅子まつゑ	新幹線の席は一番Eが好き	大阪市 亀 井 円 女
金つるの党にも未練少しある	が、のだこのた東マーク・	和歌山市 福 本 英 子	サッカーに取られたファン帰らない	羽曳野市 福 田 悦 子	この酒は本音を吐いてならぬ酒	和歌山市 宮 口 克 子	七夕へ去年と同じ祈りごと	鳥取市 近 藤 秋 星	食卓でまた新聞を読んではる	上和	気負ったがあっさり笑顔返される	鳥取県 植 田 一 京	三日とはとどまることのない日銭	和歌山市 青 枝 鉄 治	他人さまの口を恐れて墓掃除	唐津市浜本ちよ	ライバルを何時も射程距離におく	静岡県 薗田 獏 沓	日曜の買物婦唱夫随なり	香川県 木 村 明 人	ちょっとした風に人生揺さぶられ	枚方市 海老池 洋	光るもの好きな私の薬指	香川県川崎 ひかり	伝聞に十人違う耳を持ち	大阪市 本 間 満津子	てにおはのミスに不信感残す	吹田市 山 本 希久子
痛いとこ突かれて眼鏡拭いている		旭川市朝倉大柏	夕立にあわてて帰る散水車	西宮市 亀 岡 哲 子	娘から父の日ですと宅急便	唐津市 山 門 幸 夫	あの人やこの人に似る石仏	唐津市 山 門 タ ミ	来客に自慢の出来る井戸の水	唐津市 山 口 高 明	ばあちゃんが振る袖をまだ持っていた	唐津市 仁 部 四 郎	暑気払い姑には姑の消夏法	大阪市 町 田 達 子	苦労して育てた菊が市長賞	岐阜市 渡 辺 杏 村	就職へハードル高い不況風	岸和田市 三 輪 通 彦	老人も小遣帳をつけている	仙台市 川 村 映 輝	序列から外れほんとの顔になる	砂川市大橋政良	みそぎ済んだ済まぬはどこでどう決める	阪南市 深 日 白光子	前回の次点へ入れる浮動票	寝屋川市 江 口 度	秘書だけに通じる地図を渡される	守口市 結 城 君 子

## 女性一一十一年在在在在在在在在在在在在 出 子 選

かい

b

な

ŋ

0

る

務署に妻は信用され τ

安在在在在在在在在在在在在在在在在在

こんな坂ぐらいが重い 夏草といくさの話などしよう なないろの鉛筆がまだ揃わない 日本が変わる 赤を着る八つ当りでもするように 胎動ききながら 通夜帰り

子 円が人待ち顔でお のままでい 供等が近くに来いと言うてくる 42 かと背なで声がする

FF

F

りまず身辺

の整理

から ねてい

林檎

未来を量

1)

か

る

さくらんぼの一 満月と約束があり急が つ二つは水子 ち てい ね ば

島

V 年ぶり なお 0) 鏡 つかわたし せば安定剤 素 選挙サミッ 顔 のままで会いにゆ が消えて が効いてくる トあっ ゴミだ 63 3 1

7

正を着

て残り火をちらつ

か が

せ P

Ш

富

もこの

花

も待つ

步

道

になり

切れずに鼻が

むず

10

和歌山 富田 米子市 伊丹市 歌山 米子市 歌山 林市 林 H 杉 福 前 石 中 Ш H 岡 垣 智恵子 ゆう子 瑞枝 花子

米子市 田 林 क्तं 寺沢 宮本 小 藤 西 H いみど里 かりん 小 泰子 雪

和歌山 松本 木本 稲本 高橋 たず子 夕花

吹田

幸せを 雨 カテー 0 だから傘のお 2 7 声が打ち寄 お 杯咲いた花にも好き嫌 粧う ばさん テル小さな夢をまたつ 医者の言 書き無職 薔薇を憎 気取 しゃ 一葉を嚙 せてくる 0 れをし てみたい め 書 な h で飲 Vi 電 しまし 話 10 10 時 10 よう かい あ

友達 窓少しあけて噂も聞いてお 横顔に去年の お ちぎり絵に螢 お金婚僕は贅沢言わぬ 衣縫う 0 笑顔がに 遠 い記 飛ば 日 焼け 能憶を辿 くい時もあ してみよう りつ 3

か

な

か

京都市

小

林

英子

制服を着ると私が居なくなる ウンドして弾 h だ 毬 まだ残 のよい 主 n 着

否定 月見 全く 生き 人の子叱る勇気をため 々は見ない から入っ 草 0 が 残る判断をする二 誤算内堀埋 無言を破 人恋しさを匿 振 ŋ るように落 して切 まう めら 枚 して 癖 n n 6 かい 3 舌 抜 いる b あ 17 ず 3 地

> 寝屋川 心曳野市 尼崎市 歌山 松山 井寺市 大阪市 竹田 春城 高田 H 吉 西尾 阪 さやか 美代子 秋子 寿美 年代 菜月

大阪市 歌山 兵庫県 兵庫県 八尾 大阪市 鍛 森脇 秦 秋 鈴 倉 渡 古久保和 木 原 部 元 垣 ざと美 てる 恵美 和子 Œ 節 子 子 7 里

和歌山 和泉市 鳥取 歌山 唐津 浜 堀 谷 桜 中 # 畑 口 本 Ш 百合子 干秀 ちよ

屋川 西宮市 F H みつ子 わ 高

冷房 砂の 漬物石 走ろう やわらかいご飯が好きな御仏飯 一歩引くことも考えてから喋 誰よりも大事な私もてあます 空耳と思えど夫の影を追う 七七忌明けてひとりの坂に佇つ 夏祭りみんな子どもの瞳にかえる 仏様きっと気に入る嫁ですよ 玄関の杖に催促されて居る 出来ごころ抹茶で染めてみた上衣 雨しとどとても明るい集金人 生き甲斐を分かちあってる定 の時の亡母と別れたまま日 風に耐えたと一人よがりか り子をとめていちにち秋の椅子 浴み たいことい へ手首足首など庇 擬音ひとりぼっちの胸に鳴る FFF の重さに泣いた一頁 て極限までの手をつなぐ n あ どりの きらめ 青 n 信号に しさがあり つになっ 羽が生えてくる っぱいの人と会う 切れ 問うてみる ぬ 人に 種 たイヤリン を蒔 1 傘 期 券 7

> 寝屋川市 寝屋川市 大阪市 守口市 熊本市 大阪市 米子市 吹田 大阪 市 柴田 上江 結城 永田 津守 太田 白根 高杉 小 Ш Ш 本希 例勝子 英壬子 とし子 久子 俊子 柳伸 君子

和歌山市 大阪市 吹田市 倉吉市 鳥取県 米子市 本間 細 井上 淡路ゆり子 さえきやえ 小塩智加恵 JII 高満津子 照子 稚代

和 歌山市 八尾市 歌山市 取市 岩本 植 宮西 高橋千万子 美智子 弥生 京

n

和

歌山市

英子

る

彿とさせる。

味

がある。

ゴシックの

六十にして母は健 ここまで来てやっと終りの 向きが変ると火の 仙 いやだと言うて 在 ありが 粉 降 か 0 て来る ったし 絵 かい 画 1+

る

弱気だな古里の夢ばかりみる あの日から 洗面器に見慣れ 私の 中の た顔が浮 保守が消え 10 てい 3

質問 教えられること許 僧堂の 幸せをじっくり煮込む落 にのぞかれている胸 仏に学ぶ普茶料理 りの子の のうち し蓋 鏡

雨宿り 夏休み目を光らせるおばあちゃ 涙の雫乾くまで h

松江市 貝塚市 京都市 宝塚市 今治市 倉吉市 島根県 米子市 松江 大阪市 米子市 米子市 路市 野村 板東 野中 浦辺 松浦登志子 丁坪サワ子 池田 山海 丸山よし津 B 寿 美子 あき子 静江 友熙 京子 倫子 WD 玲 前 き

された人達のことなど思い遣り、 ば出来ない句である。 的な句としても、 たところがユニークで、 何となく目立つような気がする。 変りつつある政 三句目 二句目 税務署に信用されるような人とは、 一句 今ならまだ似合うかもしれないと赤を着てみたもの 目 女性の感覚で捉えられたよさがある。 治の動 通夜帰りの複雑な心境を句にされてい 殊更「妻は」と言っているところにこの 四 句目 向だ。 ユーモアさえ感じられる。 身につまされる。 作 それを「八つ当りでも」と表 ・者はそれを胎動だと言う。 世間で喧しく報じられている 男勝りな女性を彷 作者の優しさで 女性でなけ 句 0

弘前市

佐治千

加

酒井

投句先 <del>-</del> 544 大阪市生野区勝山 南 1 18 10 小 出 智 子

追

い風が吹いて私を急き立てる



## 自然と人と

### 岸 あやめ

所を選んで定住したはずだと、夫婦の意見が り道などの危険からなるべく安全であろう場 知識の限りを集めて、地震、洪水、台風の通 住みついた所な訳で、当時は言わば日本全国 千年も二千年もの大昔(すみません。私歴史 が、何が気に入ったかと言えば、ともかく太 その勤め先の会社が開発、分譲した住宅です えば三十五年昔に当地へ転宅致しました。 が山林原野だったのですから、技術者集団は 音痴で)、中国から集団で渡来した技術者達の 秦と言う地名なんです。このような地名は、 川は太秦です」と言うことになりますが、思 寝屋川と申しましても広うございます。寝屋 致したのでした。 私の主人は電鉄会社に勤めて居りまして (寅さん風に) 「私、住居は寝屋川です。

「財産に近所の人情加えとく」という句が らしてよかった!

たぬ」と頑固に信じて居られる向きもおあり ありますが、天災の次に難しいのが人間関係 の大安心、大感謝なのです。本当に此処に暮 のようですが、私はそうは思いません。 で、世間には「女の間に本当の友情は成り立 っている夫を持つ身の私には、それが何より た交わりです。思いがけぬ大病をここ一年患 合い、後はあっさり忘れるみたいな淡々とし 当に協力、助力の必要な時は、快く力を貸し 普段は即かず離れずの理性を保ちながら、本 周囲の奥さん達は皆本物の大人ばかりで、

### 私の菜 袁

## JII

その場に投げ出して野菜・花の生長をたしか 落ち着いた一日が送れない私です。旅行から 作って楽しんでおります。 帰ると、家に入る前にまず裏に回り、 トーに見よう見真似で四季折々の野菜や花を ます。百姓の経験のない私は、無農薬をモッ 雨の日でも一度は必ず畠をのぞかないと、 我が家の裏に五十坪ほどの畠をもっており

> る私なのです。 め、気がついてみると、それらに語りかけて

では私の大切な生き甲斐の一つになってしま らは、私にとって可愛い子ども同然です。今 ことでしょう。種から蒔き大事に育てたそれ いました。 他人様の目にはずいぶん変った女に映った

あります。 よろこんで頂くのも、私の楽しみの一つでも また、採れた野菜をご近所に分けて上げ、

然に足は畠に向かっております。 ました。そのうち癒えかけてくると、もう自 でただ生きているという状態がしばらく続き 畠ができないことは、私にとって生き甲斐の を持つことなどきつく止められております。 た。医者からは決して無理をしないこと、鍬 一つを失うということです。とても落ち込ん 今年は病気勝ちで、入退院のくり返しでし

# 川柳塔用箋 (1冊1100円

手足の動く間は止められそうもありません。

土を起こし、以前のようにはできませんが、

左手で草をむしり、鍬の代りにスコップで

※数量がまとまれば「ゆうばっく」実費で送ります 二五〇円・二~三冊三六〇円

## 柳

ならごめん 小池しげお

#### 編集部

賞を得た佐藤利恵さん(東 は昨年4月の九州大会で大 川柳大会の文部大臣奨励賞 京都秋川市)に決定した。 ★平成4年度のNHK学園 嫁がせてまだ門灯が消せ 年記念大会は10月2日

月1日 で101名が参加して開か 選任した。 副幹事長の片岡つとむ氏を 長の後任としてこのほど、 ため辞任した亀山恭太幹事 ★第11回夜市川柳大会は8 ★番傘川柳本社では病気の 次の本社同人5氏が秀 、堺市総合福祉会館

信号は赤だが臨機応変に えられぬ ヒントーつ雲の流れは変 一枚の一筆箋が根を下ろ 黒川

鰯—西山金悦、各題3句。 泉福▽情け―藤本静港子▽ 寄る―越郷黙朗▽顔―鈴木 選者は、念願―志水剣人▽ 句を募集している。課題と 月10日締切で宿題の事前投 可 に連記し、参加料千円を添

し方の川柳大会事務局へ。 八戸市町組町5・豊巻つく ガキ大の用紙に書き、一切 為替)を添え、各題別にハ 投句は1000円(郵便小 ★大阪市内居住者を対象に

指導課 ―20) へ。入選作品には賞 阪市環境保健局保健部保健 (北区中之島1-3 9月17日までに大

★はちのへ川柳社創立60周 文時 上大会が9月30日締切りで 状・賞品が贈られる ★第15回川柳せめんだる誌

るが、その第1部として9 戸市三八教育会館で開かれ 原爽介、各題2句、読込み ちお▽潔=井上信子・小松 ▽白=宮本めぐみ・勝野み 純 = 佐藤美枝子・田口麦彦 6句を便せん大の用紙

の特選賞と10位まで合点賞 5-21・石田明へ。各選者 之、〒75小野田市新生2

募集している。官製ハガキ 健康をテーマとした川柳を 長などの柳界各氏のメッセ 本社相談役·橘高薫風理事 を短文・講演集と東野大八 判314頁) 風柳像の全容 別冊柳都『大野風柳の世 マ出 (柳都川柳社刊・A5 版△

句賞を獲得した。

無駄な芽の方が元気があ

死ぬとまで思っておった

に作品(1枚につき3点)

ージでつづった雑誌形式の

江原とみお

と住所・氏名・性別・年齢 6判184頁)八坂俊生序 眇眇』(記念文庫80刊・B 個人特集。 ■ 松岡十四彦川柳集 価1500

文。五十代・四十代の川柳 と文集で構成、

行われる。課題と選者は、 尾序文。 書·A5判112頁·20 集『散華詩集』(みどり選 00円) 松岡辰彦・渡辺和 ■なかはられいこ川柳作品 やがて男はほっ

6判・150頁・2500 ■ 『大石鶴子自選川柳句文 桜散る とする (柳樽寺川柳会刊・B

行委員会事務局 申込は所沢市北野718-0句とエッセー数編を収録 円)渡邊蓮夫ら序文、 103・西沢比恵呂方の刊 ▽同人消息△

で紹介された 版の出版ガイドに写真入り 月29日付 ■福浦勝晴氏

「朝日新聞」大阪

一人酒よりも佗しい独り 1000円 田市)の「庶民文学として ットライン』に掲載された の川柳」と題するコラムが 『中央公論』 8月号の "ホ

(理事・岸和

婚内祝として金一封を拝受 妻(同人・尼崎市)から金 しました。 春城武庫坊・年代さん夫

▽ご芳志△

して金一封を拝受しました ご遺族から川柳塔碑基金と ■後安江山さん(岡山県

三宅辰雄氏(同人の三宅

50 自宅で行われた。 は7月6日、肺炎のため死 つえ子さん尊父・豊中市 97歳。 告別式は同8日

## 正▲

■西尾栞主幹のずいそう集 『水鶏庵こらむ散歩』が7 る」の作者名・俊治→俊路 ■7月号=P85中段19行目 故里の森の緑に濡れてく

題

(古)寿

吉 村 風 選 味

曾

薄味の味噌にこの頃やっと慣

味噌樽に生命まかせて海を漕ぐ 減塩の味噌で堪えてる血圧計 味噌汁の残りチンして母のひる ホームステイ終る頃には味噌に慣れ 白味噌が京の銘菓のかくし味 味噌汁とスープで和む三世代

根

S

み 選

お土産の味噌は重いが母の味 味噌汁は父の好みを知っている 蟹の味噌酒をそそいで残さずに 病床に厨の夫の味噌匂う 退院後味噌汁うすくうすくする 木の芽あえ香りに味噌のあたたかみ 退院の日まで馴染めぬおみおつけ

靴

しげお 英壬子

転作の 大豆で白い味噌ができ

ĪĒ

雄

はる子 多賀子

母さんの味噌汁で朝動き出す 味噌汁が心豊かな朝にする 味噌汁の香りに朝を起される 味噌汁の匂いに今朝の掌を合わす 姑を大事にしてる合せ味噌 胃がすっきり味噌汁飲んで朝の 味噌汁と梅干一つ朝のめし 田舎鍋味噌で田螺の煮転がし 手前味噌たっぷり盛った予算案 好きなこと並べ立ててる手前味噌

てんやわんやを心得ている朝の味噌

すり 牡蠣鍋の味噌に地酒が良く馴染み 味噌田楽のめぬお酒の旨い夜 ンションの朝 鉢の味噌へ小指の味加減 外人がお味噌汁

IE.

あずき 美代子

味噌汁にふる里捨てた悔いが浮く 土手焼きと牡蠣たっ 古い倉味噌搗き唄の杵がある ぶりと味噌を吸い

帆

雀

童心に返り短冊笹につる

サワ子

公

雀踊子

諷云児

子

男

重 達

ここが味噌とうっかり野師にのせられる 田村新造

耳打ちの孫の願いはみな叶う

への願いしだいに無理になる

味噌しょうゆ足りて人情うすれゆく 味噌漬けに凝って悪女になりきれず 長旅を迎える妻のお味噌汁 手作りの味噌おふくろをだぶらせる 味噌あじの工夫に見える家の顔 味噌料理真似の出来ない母の味 田舎味噌亡母の手作り思わせる からし味噌妻のなさけが効いてくる 味噌汁は姑の味つぐ嫁がくる 味噌雑煮妻の家風に合わせとく

賞取った味噌がうまいと限らない

武庫坊

n

梅干と味噌が重たいパスポート

新正 あやめ シマ子 柳五郎 やすお 蕗 希久子 兼治郎 念願が叶い過疎地に嫁が来る 満願のお百度清しく素足拭く 願い叶うて少うし紅を濃ゆくする 三浪の願いかなってサクラサク 俺よりも早く逝くなと言う願い パレットへ溶け合う二人の願いごと 白

里の母幸せ願う字が温い お願いはしないしっかり洗う首 喜捨願う雲水の瞳は本物だ お願いと言われて男弱くなり 一筋の願いを託す千羽ヅル

螢 昌

合掌の手にありあまる願い事 栄光は願わぬ男たくましい 願うた絵馬すめば空しく風に鳴る 願いごと菩薩を拝む背の丸さ 大願を小さな絵馬 へ書き綴る

願いごと大波小波の度毎に 願い事あるから神に逆らわぬ 子の願い手のり文鳥聞いている

∰ 正水 照和しげ 書 よし津 章久 はる子 寿恵子 ひでの ふさ子 重杜 雄 惠前知 芳

願

う



美しくなりたいという娘の水着 最後の願いワラ一本に重すぎる向日葵は太陽だけを願ってる 子宝の願いに熟れるさくらんぼ 花を盗られたぐらいで願う事はない 身勝手な願いで神を困らせる 廃線にさせぬ願いの切符買う 少年の願い下絵を太く描く 孫の目の位置で平和を願うのみ てるてる坊主信じて吊った子の寝顔 消しゴムで消える罪なら願うの 四島の願いは口にせぬ握手 尼御前にお願いがある三千院 大それた願いは持たぬ茄子の花 い事絞れば健康だけになり いごと届かぬうちに流れ星 い長い祈りを母が持っている 生の願いに負ける甘い母

2

Z

英壬子

郎

#### 大 坂 形 水

たつみ

子

雀

扁平足ひきずり父の道険し 妥協癖ついてひらたい文字を書く 鉄砲水山をひらたくした咎め 振り返る過去はひらたい花畑

希久子

劦

隆

ちかし

嬉しくて少しひらたい貌になる 謹啓を略しひらたく書いておく 受け皿のひらたい中にある安堵 ひらたい胸がふくらみ始めた孫娘 長男がひらたくなって農を継ぐ

サワ子

はるお

美代子 しげお 諷云児 雀踊子

螢 子 弘 裸婦像がひらたい画布の中で媚び 老いた今ひらたい道にたどり着く 仏壇にひらたい心置いてある ひらたいとこばかりで弱い土踏まず 平坦になった油断が蹴躓き

智加恵

和 公

俊

公

夕

路

受け皿の母の願いは深くなる

ゲンマンをさせて可愛い願い事

いつまでも青い地球であるように

新正

いが秋風に秘む涙壺

II]

住

子 ひらたい言葉とひらたい心でおつきあい 登りつめて憩うひらたい石がない サングラス掛けるとひらたい顔目立つ

釣り橋で平たい板がおどり出す 百歳の道がひらたく敷いてある 車座になれる平たいとこ探す 性教育ひらたく説いてやれぬ母 蝶ひらたいミイラできあがり

> 可佳 御 時

晩鐘に明日の命をゆだねてる

びのびと育ってほしい紙かぶと

田中正坊

選

癌告知ひらたい家をぐらつかせ

モンタンの声音ひらたく胸に沁む 片すみにひらたい心が刺を出す 大臣がひらたくなったスキャンダル 地球儀をひらたく画いた戦略図 脇役に徹しひらたく世を渡る 造園家ひらたい土地は好まない 塾年のひらたいでこにある愁い 善人の父のひらたい足の裏 泣きに来た海がひらたく無表情 夕凪に暑さを溶いて陽は沈む 灸の跡ひらたい背に行儀よい 真ん中にひらたい石が据えてある 平らかにならす仏の慈雨が降 ひらたくて短い母の葉書来る 委任状ひらたく言えば顔がない 小面を外しひらたくなる炎 芸術家ひらたい里に住みつかず ストレスをひらたい皿に入れ替える 3 (新) 正 知正 雀踊子 は虹四雄喬お汀郎々水 とよ子 正 保 云児 坊 昌和坊剣 子乃

アヒルたちひらたい足で坂上る 平らかな楢山みちを模索する 風葬の丘がひらたくなって行く あすなろの苗をひらたい地に植える 枯 富喜子

希久子

舞鳥影

山門タミ 梢

87

# 和步数室

### 一 ガラス 出

房

どです。私自身、いい句が出来ず、難渋して 平板な句にとどまらず、句の向うに大きな広 見すると、それほど難解な句ではないのに、 なドラマを感じさせるような句づくりをして おりますが、たった十七音字の句から、大き がりのあるもの、いわゆる深みのある句が殆 いきたいものと思っております。 秀句鑑賞などで取り上げられている句を拝

(ガラス張り政治期待をせずに待つ ガラス張り言うほど選挙嘘っぽい 浅間しきガラス張り政治程遠し ガラス張りそんな政治があるものか 乗

ガラス張りとはいうもののそこまでは 議事堂をガラス張りにという選挙 議事堂がガラス張りなら起きてます 幸 き X 夫

連合がガラス細工にならぬよう 野合ではガラス細工になるが落 ガラス張り政治言うほど信じてず 辰 男

> ガラス越しママの眼差しマリア様 試験管ガラスで命つくる罪 バイオの芽母はガラスの試験管 (古)和

ガラス器に注ぐ眼差しマリア像

行

子

(パパはまだガラス隔てた御対面

(ベッドから飛行雲追うガラス越し)

紫陽花をガラス越し見る美しさ

美寿子

「雨の日の美人に写る窓ガラス」

ガラス越し飛行雲追う余念なく

友

5到

懐かしいものにカフエの色ガラス)

色ガラスカフエの中を見透せず

春

風

雨の日はちょっと美人に窓ガラス

円

女

小さき指ガラスの指輪灯にかざす 幸

ままごとの花嫁飾るガラス玉 ままごとの花嫁ガラスのイヤリング

(子に孫にガラスの詫びを繰り返す 割ったガラスのお詫びをさせた子も親に 円 女

食卓にガラス皿増え梅雨明ける 梅雨明けで出番となったガラス器具

ガラス器で涼味で演出暑気払い 義 男

風鈴売りガラスふれ合う音とともに 節 子 (次々と夏もてなされガラス皿

風鈴はガラスの音色買っている) かき氷ガラスの鉢でなお美味しい IE. 子

(ガラス鉢涼を彩どるかき氷

(唇を読んで別れはガラス越し) ガラス越し別れの言葉とどかない ますみ

見送って名残りの尽きぬガラス越し 尽きぬ名残りガラス隔てて手を合わす ガラス越し螢数える老夫婦

がラス越し螢数えて佗住まい

ガラス越しに対面をする新生児 義 子 子

子

(孫の指ガラスの指輪灯にかざす

侑 里 がラス越し勉強部屋を信じない ガラス越し雨の紫陽花見て飽きず ガラス越し勉強部屋がよく見える

突き当りガラスの固さ戸で解る

忠

男

静

子

(総ガラス自動扉に体当り) 自動ドア慌てガラスの固さ知る 透明な自動トビラに体当り ふゆ子

芳

念珠繰りガラスと思う朝にする ガラスとも思う朝へ繰る念珠

郎

(すりガラスそこで疑問が突き当る 疑いの眼が向けられるすりガラス はる子

あの人が来る朝ガラス磨き上げ あずま

窓カラス磨き上げたら彼が来る ギヤマンのシスター染める朝のミサ 辰 男

生きている証ビールのグラス乾す ビヤガーデンのガラスのグラス過去を知る 孝 由 (シスターを染めるギヤマン朝のミサ

話しかけながら遺影のガラス拭く) 亡母の額ガラス拭き拭き話しかけ 金 吾

(ブランデーグラスを透す虹の彩 窓ガラス磨き幸せ遠く住む ガラス拭き今日より光る明日を待つ) 、豆粒のガラスに腹を覗かれる (ガラス拭くゴンドラずっと見上げてた) (窓ガラス拭く手が弾む娘の帰郷 ガラス窓パパの煙草を追い払う ウインドを鏡に齢が写ってる 肚中を覗くガラスを磨いてる (頻染めてワイングラスが揺れている (真直ぐに切れぬガラスをもてあます) 管吹いてガラスの花を咲かせます ガラス戸を閉めて私の城とする 珈琲館ガラスの中の女連れ ガラス窓女ばかりに気をくばり 窓ガラス開き匂いを入れ替える ウインドに写る姿に背を伸ばし 窓ばかり磨き幸せつかめない ガラス拭く今日よりましな明日のため グラス透って光は虹の花になる 胸の鼓動ワイングラスに頬染めて どうしても不細工それるガラス切り 吹き管の先にガラスの花が咲く ガラス戸を閉めてわたしの城下街 ゴンドラが高層ビルのガラス拭く 娘の帰郷窓ガラス拭く手が弾む 西和 方 たもつ 美智子 あき子 芳 黎之助 美恵子 トミエ 杏 香 子 村 郎 枝 水 着想・表現ともに立派な句 (ブランドのガラス細工に見る歴史 (なつかしい音に出合ったラムネ玉 (たかがガラス鏡に心写される (曇らないように心のガラス拭く (リードする妻で我が家はガラス張り) 鏡でも心の中は写せない ビードロがが語るロマンの旅に居る ガラス瓶薔薇の炎を閉じ込める 磨かねばくもりガラスの人生に 何もかも妻に握られガラス張り なつかしい音でラムネのガラス玉 透きとおるコップに写す恋一つ) 透きとおる玻瑠のカップに恋写す ビードロにいにしえ人のロマン秘め 命がけビルの窓拭く人もある 水割りの氷グラスで遊ばれる 想像を叱る風呂場のすりガラス すりガラス想像力を掻き立てる 躊躇するバックミラーにある無情 初心者にバックミラーのああ無情 ガラス瓶に炎の薔薇を閉じ込める フランスでガラス製品目が眩む 水割りの氷の音に遊んでる ガラス皿夏の味盛る細い指 火の玉を吹いて涼しいカップ出来 ふき子 方 君 志 姬 īE 美寿子 りつえ よしみ " りつえ トミス ネ 雄 枝 子 江 重 女

> 三面鏡わたしのうつを強く拭く 値を聞いてワイングラスをそっと置く 粉々のガラスが語る事故現場 中年の心を盗む色ガラス すぐ曇る心のガラス磨かねば 排気ガス苦しがってるビルの窓 意地悪な雨がガラスを又泣かす 窓ガラス鏡代りの夜勤明け ガラス張り当選するとすり硝子 恋猫のビー玉の眼が闇走る ガラス皿涼しい味を盛り付ける 議事堂をガラスの城にすればよい 美しくぼかす風呂場のすりガラス 涼しさをガラスコップに注ぎ分ける ガラス越し五体満足たしかめる 派手な音窓のガラスへホームラン ヒロシマを溶けた硝子が語り継ぐ ひろ子 よしみ

私の句

月光を浴びてガラスとなる裸身出土したガラス亡びの美学見る

接宛先へ送って下さるようお願いします。(お願い)句は葉書に3句以内を書いて、直

### 本 社 八月句会

八月九日(月)午後五時半 メンズファッションセンター

## 泊 梶川

―ダン吉・みつ子) (清記-楓楽

と寝屋川市の冨山ルイ子さん。

月間賞は北勝美氏

(大阪市)に輝く。 (受付―英壬子・寿美

司会一重人)

# 雄次郎

とっておきの話の内容は次のとおり。 東雲氏。おなじみ飛行機の話は、あちこちで 会は、滞りなく開会された。 披露しているため、残り少なくなったとかで われていないため、九十四人の出席で八月句 らしているが、まだ近畿地方には影響があら 超大型台風七号が、 「おはなし」は、急きょ依頼を受けた寺井 九州南部に被害をもた

泊へ

救急箱ほど入れてある

しげお

泊の旅から妻の長電話 泊の旅へ忘れぬ母子手帳

ダン吉

諷云児

泊の社長 足袋まで持って行く

雄次郎

返りで、それぞれにコツがある。 かない。飛行訓練の順序は、並列→垂直→宙 飛ぶ飛ぶ霞が浦に、という歌詞のようにはゆ ではもっぱら基礎的な訓練ばかりで、今日も その他、要領を使って試験に通った秘話に 「七つボタン」の歌には嘘があり、予科練

て披講に入る。 務局に勤務している納糸葉さんの紹介があっ の面白い話であった。 笑わされたり、異色の経験を持つ氏ならでは 西山幸さんの退職により、八月一 初出席は枚方市の前たもつ氏 日から事

素泊りで美味い地酒を飲みに出る

看病の一泊 姑と溝がとれ

満津子

カプセルでやっと自分をとり戻す 星空がきれいで一泊してしまう たった一泊こんなよろこびみせる母 物足らぬ一泊 魚のうまい旅 亡母の灯に一泊をする八月忌 泊の母へ持たせる貼り薬 泊の後ろ髪引く祖谷の里 泊の旅へひねもす鳴る電話 泊で音をあげたらし里帰り 福英 英壬子 満津子

社員研修 山小屋の一泊 雲上人になり 冗談のように一泊する電話 泊の旅へ残り火ぶっつける 泊で恋しくなった妻の味 泊で義理を果した夏休み 泊へ三日預ける犬の宿 泊の旅で絆をあたためる 泊に邪推を埋めた妻の影 一泊目からアゴを出す

> もう一泊しろとかじかが鳴き止まぬ 金婚の一泊 孫に見送られ 振り向けば一泊ほどの五十年 **追加したその一泊に謎がある 宿坊で一泊こころ洗われる** 塾がある一泊だけで帰る孫 一泊ですまなくなった孫の顔 一泊を二泊にさせる膳と部屋 一泊を老母と話しに盆休み 泊のノラが夫にみやげ買 泊の情けにふれる国訛り 泊ずつ代りばんこを老母が待つ 泊の旅 老妻のコンパクト 泊の旅へよく食べよく喋る

> > たず子

薫

美代子

憲太郎

いわゑ

雀踊子

泊の旅からコント二つ三つ 泊のスリル何かを期待する 泊の旅へ一年積み立てる 泊へ女ごころの試着室

「すんなり」 千 歩

新空港すんなりテナントまとまらず すんなりと寝て歯ぎしりと寝言いう すんなりとゆかぬ政治が面白い すんなりと叱言を聞いた目が遊ぶ すんなりと尻尾を捲かぬ自民党 耳打ちの温さすんなり胸を打つ すんなりとボーナス出した事が無い 太茂津 しげお 兆男

希久子 90

度

鬼の首すんなり取れる筈がない 後味の悪さすんなり行き過ぎる 船頭ばかり寄ってすんなりとは行かず すんなりと詐欺にかかったお人好し 親の名を言うとすんなり出してくれ 長男の嫁はすんなり決まらない しぶちんもすんなり出した義援金 長梅雨ですんなり出ない塩胡椒 値切ったらすんなり負ける売れ残 ワンテンポ置くとすんなり解ける謎 不思議にもすんなりついて来た彼女 謎かけた好意すんなり躱される 金持ちとわかりすんなりついて行く すんなりと悪知恵が出る飢えている 噴水の前ですんなり言えた愛 条件をすんなり呑んだから恐い すんなりと娘になってくれた嫁 すんなりとゆかぬドラマの甲子園 すんなりと旅の疲れを湯気が揉み 言うだけは言ってすんなり折れてやる すんなりと暴露するので面白い すんなりと家を忘れる鉄砲玉 他人にはすんなり見えている夫婦 すんなりと忘れられないのも女 たこ壺へすんなりたこが捕えられ すんなりと詫びる男の眼がきれい すんなりと寝たのかメガネ掛けている すんなりとラストダンスに誘われる パチンコにすんなり勝った事がない 雄次郎 しげお 東雲 雄次郎 たもつ 欣史子 諷云児 雀踊子 たず子 シマ子 笛 いわる 恭 隆 隆 弘 生 論 武

ツッコミがすんなりだからボケが生き この先がすんなり行くかまだ不安 すんなりと立つ幽霊に出会いたい すんなりの写真を妻が懐かしむ すんなりと大人になったように言う 美津留 いわる 仙庸 吉佑

すんなりと忘れてくれぬから困る

みつ子

八月の帽子すんなり鳩が出ぬ 美代子

すんなりと嫁かれてからの広い部屋 すんなりと閻魔の前を通り抜け (福)英 稚 代 子

すんなりと解けた謎から迷い出す 千 歩

題 藤井 一二三 選

愚かにも妻は味方と思い込む

ささやかな過失を女忘れない 結婚は互いの過失かも知れぬ 握手して別れ過失を許される 他愛ない過失で男の顔が出来 過失あまた引きずり生きている影だ 根性を褒めて過失を口にせず 里 萬 志 生的兆洋州香

その立場変えると過失ではすまぬ

過失相殺こんな夫婦の五十年

希久子

過失致死でも蟻さんに詫びている あやまちがあってシグナル付きました 過失責め人を憎まぬ思いやり

かすみ

ダン吉

あやまちと流れつづける河の幅 しくじりへまた子を連れて詫びにゆく 身に覚え過失見逃す思いやり これからへ過失を許す仏の手 鍍金して過失の穴を埋めてみる 白黒の過失正して風が舞う 海に向って叫ぶ過失が一つある 六法をそっと調べている過失 傍観をしていた過失はゆるされぬ 磯野家の過失は漫画になっている 謝って済まぬ過失に児がからみ 過失ではすまぬ他人の子も叱る ブランデーグラスの底に沈んでいた過失 汗かいているので過失咎めない 他人の過失を喜ぶ奴がいて困る つまずいた石に過失を責められる 過ちを許した後のいい寝顔 人類の過失を刻む原爆忌 一生の過失か管理職にいる 八間の過失を嗤う猿の群れ 尚 美智子 <sup>|</sup>岩美智子 しげお ただし たず子 友 配 太茂津 太茂津 憲太郎 美津留 弥 仙 4 子子 女

ライバルの過失喜んだりしない 過失懺悔に弥陀も大目に見てくれる 青春の過失 日記に伏せてある

戦争の爪痕

八月が重い

美代子

また過失らしいみんながそっぽむく 鏡掛け古いしくじり知っている 風化させてならぬ過失よ敗戦忌 酒のんでもう忘れている過失

武庫坊 諷云児

91

張り切りのすぎて息切れしてしま 切り口に職人の腕見せている 裁ち切ったつもりの絆ぶら下がり 植木剪定 明日のために苦しみを切り捨てる 指切りが迷子になった宵祭 切り返す意地を時どき見せて置 髪切って少しは若く見えますか よく切れるナイフが入れてある鞄 啖呵切る男の影が淋しそう 切り礼があるから最後まで黙り 口火切る男の後にボスがいる 飲み足らぬ仕草 徳利の雫切る 切り盛りの上手い女で掌が温い 躓いた石に過失を詫びている 爪を切る女は母になる覚悟 枇杷の木を切ってもどこかにある鬼門 封を切るこころがゆれる母の文 くらしの差見せて過失を詫びに来る 過失から育つ大きな夢もある あやまちを心のかてに得度する あやまちもあります長い坂だっ 過失には触れず明日の夢語 春の息吹を信じよう 岩本 雀踊子 た < みつ子 白渓子 たもつ 歌蕗友 岳 太茂津 たもつ Ξ みつ子 重 房 花 選 螢 人 葉 幸 風 妥協する爪はまあるく切っておく 羊かんを厚切りにするいい話 手のひらでスタスタ切っている豆腐 割り切って鬼の誘いに乗ってみる 深いこと知らずに手の鳴る方にゆ 穏やかな水に深さをだまされる 深い傷つけて僕から去って行く 離れても深い絆のラブコール 大根をすばすぱ切って気が晴れる ストレスを切絵の中に閉じ込める あたたか味残る電話をそっと切る さりげない母の言葉にふっ切れ 長い髪ばっさり切れば火のにお 髪切った訳は誰にも話さない 切れすぎて輪に入れない部下がいる 前進のためには過去を切り捨てる 言い切った火花未だに燃えている 四コマで切った政治が笑えない しがらみを断ち切る寡婦の小さい 切り捨てた言葉の中にある本音 大災という疵跡が深過ぎる フルムーン思い出深い街歩く つづくりの上手な母の糸切歯 女とはいろいろあって切れました 兼題 JII 背な る V 紫 香 たず子 達たず子 正紫正諷 道親 雀踊子 美津留 保 しげお ルイ子 選 云児 州 風 楽 坊 胤踏武 雄 男 女 さりげない言葉に深い読みがある 振り出しに戻って測る深い傷 いい電話 思わず深いお辞儀する 悲しみの深さ知ってる北の海 深爪を切った痛みを抱きしめる 深い訳あると判って距離を取る 深々と頭の下がる選挙前 煩悩を深く揺さぶる街の風 ライバルに傷の深さはみせられ 真っ暗い夜は眠りを深くする 私を捜しに深い森へ行く 愛情の深さ転勤して分かる 貧乏くじ引いて迷いが深くなる 読経して罪の深さから抜ける 今やっとわかった亡父の深い読み 言い訳がひとりの闇を深くする 深い訳ないがいつしか好きになる おそるおそる覗けば井戸の底見えず お茶だけの仲を深いと言う他人 つまずいた石に自戒を深くする 独り居の夜更けに深い胸の傷 奔放に生きて深追いなどしない 勘ぐってだんだん深い意味になり 愛情の深さを金で計られる 愛は一途に樹海を抜けて深くなる 深々と頭を垂れる父の樹よ 愛の深さとても測れぬ母の 深々と下げる頭の下心 女文字つい深読みをしてしまう X <sup>(岩)</sup>美智子 たもつ

勝

諷云児

武庫坊

歌

秋

文吐美寿森

来房子子文

みつ子

弘千正

直秀

白渓子

洋

希久子

村 郎美

いわゑ

傷口が深くて金で埋まらない 毒舌で鳴らした伯父も歳を知る 回らない舌 乳首吸う小さな舌にいのち見る ひと口の旨さへ舌がまるうでる テレビでは舌鼓うつタレントさん 舌鋒の髪かき上げる細い指 据膳が何よりという舌鼓 しばらくは舌に遊ばすさくらんぼ 舌鋒と舌鋒 枝豆食べながら 草深くなるにまかせている田んぼ 権力へふかぶかおじぎしてしまう 貯めるだけ貯めて疑い深くなり 父と言う顔になってる深い皺 美女の棲む森は深入りしたくなる 恋の矢が深くささって眠れない 深追いはするなと亡父の声がする 舌なめずりして売られ行く牛に逢う よく回る舌はビールの故だろう 深入りをした分怖いつけが来る 深すぎて石を落してみたくなる 口下手が言うことだけに根は深い 祖父ちゃんを振り回 高 希久子 希久子 しげお 欣史子 英壬子 紫 しげお 雀踊子 いわる 吐 満 良 選 子 州 香 知 よく喋る舌が神様売りにくる 饒舌な父うろたえる留守電話 姑さんの前ではいつも舌足らず 饒舌が済むと鼾の往き帰り 正直な舌だと鬼にほめられる 舌がもつれる理由は一つ外にある 母の舌 栄転が気軽に使う二枚舌 とりあえず出世をかけて二枚舌 選挙すみ舌も仮面も付けかえる 国訛りでしゃべると舌がうれしそう 老いて来た舌がルーツを恋しがる 本心は舌に乗せない赤い爪 大物を切る毒舌が憎めない 弁舌はさわやか心に隙がある 毒舌の背なに淋しい回り椅子 腎臟食 飽食の舌が忘れた栗の飯 目を閉じて男の舌に触れている 舌の先で遊ばせている赤い酒 切手を舐めた舌でお味見してい 毒舌家ポーカーフェースには負けた 舌打ちをしたのは私の影法師 弁舌と行動力が一致せず 小心を庇う毒舌とは知らず 一枚舌 敵も味方も餌にする し目と舌でやんわり骨を抜き 打って下さい仏様 父の舌より勝りけり 妥協妥協と舌が言う 個英 (新)正 (小)英 美代子 たず子 かすみ 雀踊子 Ξ 達 子 男 伸 楽 子 晴

#### ۲ ところ П 雑 優しい」 空 10月11日 道 音 港

毒舌家 うそほんところり転がす舌の上 よく出来る生徒 パトロンを甘く見ている舌を出す 真実を隠すと舌がもつれ出す 大根や豆腐の味に肥えた舌 枚の舌でぎくしゃく生きている 岸和田市文化祭 岸和田市民川 優しい文字で見舞状 (各題2句・ 岸和田市民会館地下会議室 舌出す癖がある (休日) 正午開場 午後2時締切 柳大会 小出 深日 白光子 内月子 雄次郎

薫

風

勝

美

道

胤

楓

楽

白渓子 希久子

◎参加者に植山武助遺句集を贈呈 1500円 軽食・大会誌 席

題

当日発表

橘高 野村 太茂津

薫 風

選 選 選

会



原稿用紙に清記をお願いします。 毎月**25日**締切・30句以内厳守。 原稿は川柳塔社事務所へお送りください 二百字詰

### 柳塔みちのく 小寺 花峯報

しのび逢い月がこっそり従いてくる ナイーブな私と契る細い月 いさぎよく月に告白して寝よう 天国も十五夜ですかおとうさん 月おぼろわたしの心見透かして 月ごとに体重増えてゆく不安 孫が来て月の童話がよみがえる 残月が言い訳をする赤い顔 朝帰り平和維持軍居て欲しい 早朝の電話安産の声弾み 花切手貼って女の果たし状 母親の起床ラッパが届かない 朝冷えを駆ける少年虹を見る 納豆をかきまぜ今日がスター

> 洗濯機深夜も回る共稼ぎ 懲りずまた男を洗う洗濯機

叶

羽津川公乃報 蛙

せかさねば手遅れになる癌告知 風の駅別れをせかすべルが鳴る

二ひ

タン吉

朝 さよ子

時 弥南

京

笑晴彦

無器用でせかせてならぬ子が居 美しい硯に文字が生きている 硯箱むかうと父の声がする

荒れ模様の顔に借金止めにする 人生の模様夫婦で織りつづけ 空模様悪くて嘘がつきやすい 決断は模様ながめたあとでする 模様替えしてゆっくりと使者を待つ 家中を模様がえして嫁をとる 色模様つけた新妻おかぼれす ポルポト派が苛立つ模様弾が飛ぶ 晴模様いのちを洗う風が吹く 花模様の服がわたしを遠ざける 初夏の風邪部屋の模様を変えて見る 水玉模様の女溺れるネオン川 一世帯同居の部屋に模様替え ルリンの壁桜並木に模様替え 一の甲羅に深い悩みの跡がある 田中 文時報 美恵子 美代子 はるお きみ子 嘉津江 螢

岸和田川柳会

サイクルに合わぬバイオの花が咲き 月欠けて満ちてゆっくり生きてます 親しさに気を許さないドアチェ 待ち合せ遅刻で恋も横を向き 親しさがいつか師弟の域を越え サイクルが狂い始めた党もある オランダ坂の雨に親しい人と逢う 富志子 柳宏子 白光子 萬 甘 翠

**千加子** 

父ぼけて泣きつづけている洗濯機

洗濯機夫を渦にしてしまっ 雨降りはお休みなさい洗濯機

五楽庵 ふじ子

那智山の土産も重い硯石

川柳後楽吟社

雑兵に絵筆を握る夢があり 雑兵のひとり大言壮語する 雑兵も五分の魂持っている 内閣は雑兵の乱で困ってる 閲兵式雑兵とても数の内 雑兵の声真実を訴える 戦もうこりごりですと星ひとつ

気遣えば一期一会が重くなる 新しい出合いに余生をかけてみる 空き箱をつぶすちょっとした殺意 もうよそう夫婦のつまらぬかくれんぼ 土壇場でパワーのなさを思い知る 垂れ幕の裾は風に媚びている 等距離で追う焦ったら負けになる たけ志 美智子 健 治

風の中行く子の手中に新刊書 枯淡の味を師と重ね 柳五 郎

笠智衆

仏心の仮面の裏の鬼と会う

佐加恵 金

飽食の時代に増える味音痴

自慢話中の嫌味も食べさされ

無口のが先ず賛成に手を挙げる

無理するな声掛けあって今日が暮れ

山とある大事残して駄句作り

94

雑用を待っていましたぬれ落葉 チャンネルをどこひねっても成婚日 ふるさととホタルと星と無人駅 邦道

青空が憎い日もある原爆忌 吉岡きみえ報

やかんで酌ぐ酒が男を裸にし 裸木に新芽が息吹く春の音 祖母の手に追えぬ裸の児が逃げる 句碑の建つ岬のどかな波の音 句碑の建つ丘にきれいな海が見え 絶景を消してしまったビルが建 ぶきっちょで裸のままの彼が好き マイホーム夢が形になって建 かおる

ふるさとのイメージ変えた道が出来 与根一 れいじ 峰

潮の引く道を通って亡父に会う

ふるさとの道だ裸足で歩こうか

二十年前とおんなじ夕陽だなあ

賜った命わたしの道をゆく

わたしの道をもつ一度振り返る 虹の橋渡りそこねた日を惜しむ

桂ゆき子 寿美 ちかし

引き際の美学

男が名を惜しむ

本当のことを言いたくなる裸

発展に山のいのちが削られる 満洲の夕陽忘れぬ父の背な あした逢う約束夕陽にして帰る 単身赴任夕陽と話す癖がつき 最後まで夕陽の如く走らんか 少年へ汚れた夕陽渡せない

面と向う言いたいことが消えて行く 面食いを気弱にさせたのは鏡 燈台は直立不動崩さない 燈台を仰いで高所恐怖症 燈台で眼下の生活など見ない 幾歳月燈台守りの妻も老い 満月へ燈台ゆっくり灯を放

ダイエットよりも手抜きで朝のパン パンのみに生きて野心のない男 やり投げも遊びのうちは面白い 石なげてメダカの平和乱すのか 話題だけ投げて鯨は宙に浮く 投げ銭のひねり花飛ぶドサ回 投げなはれ居直る妻へ置く茶碗 やわらかい言葉にとげのある女 み仏の笑みやわらかな結願寺

パン食べて酒を飲んでる日曜日 荒波にもまれギクシャク面をとり 相性のあう面だけは残しとく すり鉢の底から奇跡にはい上がる 千羽鶴奇跡を祈る枕もと 面通しされてもシラを切り通 白痴美に似る小面の冷やかさ パンくれる人だと鳩も知っている 千万当たれば奇跡信じます

燈台で小手かざす日の海は凪ぎ

芙佐子 荒 草

合掌の背がやわらかな影をもつ 猪太郎 頂留子 信 度 子 舟

代仕男 多賀子

佳句地十選 (8月号から

見

翠

喜与志

胸ばらしあとの空しさ倍になる

**石葉旅ガイド解説夢の中** 満腹を感謝されてる白いⅢ

それぞれに役目をもって指動 父と娘が一番つらい祝酒 そわそわと娘来る日は豆を煮る 花も嵐も踏み越えている八十路 太陽と約束があり早寝する しなやかな指に男も鮎も骨抜かれ 心まで映る鏡で怖くなり 除湿機に吸い込ませたい妻の愚痴

登美子

子

雲 柳

由多香

さと美

喋る口持つが聞く耳持たぬ人 敵に勝ち己に勝てぬ日の誤算

四島を返す気のない面構え 石器に残る原人ロマンの顔がある

高

尚子

史

植村客遊子報

距離置いて聞けばなんでもない話 死にぎわをどう生きようと神に問う 休むこと知らぬ暖簾がよく稼ぐ 宝石を知らない古希の太い指 口喧嘩出来る絆で嫁姑 日の丸がポツンとここは明治だな 酒好きな奴が幹事で慕われる サワ子玉 青峰

95

低姿勢相談事を持ってくる 古い事知っているのも取柄です 父の日は肉焼く庭に笑顔寄る 箸袋集めて旅の思い出に 冷飯にお茶ぶっかけて妻の留守 カメラには妻他所行きの顔見せる 咲き誇るつつじのしがらみからみつき お宮の鳩まだ何かくれとついて来る 人情の昔を恋うる老夫婦 客遊子 はる女

父さんも良く泣いたねと姑が言う 父の年とっくに過ぎて七十歳 よく稼ぐ父でお金は母が持ち 父を継ぐ気になり父の歳を知る 幅広い父の背に見るあたたかさ パパと呼ぶ柄かイメージ狂い出し 定年で料理教室行ってます

みき子 しのぶ

章千鉄保かなか 子秀治州め

犬死にか陪審員のぬるい罪

玄関の用心棒は父の

柳クラブわたの花

片上

英一報 シマ子

嫋やかな指が女を演じ切る 北欧の森メルヘンが美しい 作戦が内ポケットにある背広 左遷地もきっと夕陽が美しい 美しく咲いた二十歳を嫁がせる 美しい心下さい十字きる 美しい山河に住んで翔びたがり 美しく老いる心の灰汁を抜く わたくしを美化してくれる白い足袋 背広には縁のなかった墓洗う 燃えつきて後悔のない背広脱ぐ 折り目ある背広も闘志燃えている 窓際の背広に西日攻めてくる スタイリスト背広選びも楽じゃない 中 松幸 三千子 よし子

折れて出るチャンスを待っている新茶

ますみ

新茶買う店で美人に口説かれる 背丈より土台が先と足が言い 古里の土に馴染んだ土踏まず 寝たきりの素足を包む梅雨の冷え

美津留

火砕流どうかおさまれ願う民 子の望み親の願いとすれ違い 真相を明かさずに押す認め印 せっかちな話へゆっくり新茶つぐ

腕の傷父は平和を祈るなり

いじめっ子少しいびつな丸を描く 浅知恵もそれなりにある自己主張 いがみ合い丸い地球に住みながら 聞き流すことを覚えて丸く住む 丸吞みの暗記に骨がない脆さ 不機嫌も丸め込まれた糖衣錠 経験の浅さで揺らぐ処方箋 外堀がだんだん浅くなる焦り 浅瀬より沖には出ない処世 経験は浅いが見込みある気骨 へっぴり腰長いと思う丸木橋 つまずいた小石に思う浅い

> さち子 美智子

文秋報

高

昔はよかったと便利を喜ばず 昔の人はえらいと思う保存食 あじさいに誘う目星はつけてある カード氾濫その便利さについ嵌り

円満なポーズで猫がひる寝する 便利よく建てかえたのになじまない 佑

連中のワルの仲間に僕もいる

連中からわざとはぐれるくそまじめ パパとママどっちがえらいと困らせる

連中が口を噤んだ日の恐さ

父の日に料理習った娘が作る お茶めしと息子が父の真似をする

浅い瀬の安堵が足を滑らせる 駆け足の時代に夢が浅くなる 心までしみ入るように手を洗う 荒れた手の母が一番美しい

百合子

詣るよりえらい人だけ見て帰り 円満な輪が素晴らしい旅仲間 連中と呼ばれて抵抗感がある 円満に解決したは表向き

父の日を連れ回される百貨店 嫁がせる父の心も走馬灯 子に託し子に背かれた父がいる おぶさった父の背中は広かった よくもてた頃が自慢の父の酒

旅に出て伸ばし足りない父帰る

熱戦へ冷えた西瓜が駆けつける 拍手だけ大きく末席から送る 尻叩かれて西瓜一つが嫁に行く 末席が会社の鍵を持っている 末席の幹事仲居に口説かれる 子の家は便利づくしで落ち着かず 出直し選挙目星い人がおりますか 気の若い連中炎えるJリーグ えらい人ばかりで的が定まらず 東奔西走えらいえらいと言いながら 里帰り遺産の目星つけておく 便利になって帰省せぬわけにもい 正論を吐く末席に虹が立つ 末席の頃は憎んでいた汚職 生きるとはいいなあ西瓜胃にとどく 便利さに情緒がいつか薄くなり えらい口叩いた自分が火の粉浴び えら方はただ飾りもの天下り モンタージュ目星とあまりにも離れ 便利だがローンにあえぐ耕耘機 悪だくみする連中の寄るたまり 払うてくれぬ奴の目星は付けてあ 票の目星をどこにつけようか の粥の重さを知る情け 柳塔わかやま吟社 かじった西瓜に物言えず 内緒なんにも持たぬ主義 宮口 紀美女 栄美子 トミチ造 シメ子 鉄 新文 千文章智 勝 州男 良 治 梢

自分だけ輪の外にいる内緒 内緒事少女が鬼の耳になる 朱を入れた暦が内緒知っている 私もたまに内緒で逢いに行く 生涯を内緒で通す背の傷 巣立つ子をつかず離れず見ていよう 情けない女はいつも身構える 投げかけた情けふり向く日を信じ 情けない顔をするなよ 陽が昇る 禁煙の出来ぬ自分が情けない 現実と思う全快 西瓜食べ なまぬるい西瓜話は冷えたまま それからは西瓜ばかりを追うカルテ ぬるま湯の中で情けに飢えている 愛情を母の箱から小刻みに 白光子 佐代子 英好綾和 射月芳 登志代 高 IE.

笑 子成

松川

杜的報

美由紀

螢

## 倉吉川柳会 渡辺 善句報

言に一杯つめてある情け

親友が逝って心に穴があき 三歳がもう友達の好き嫌い 火と話し風と話して登る坂 赤い靴履いて歩けと坂が待つ ふるさとの川はドラマを知りつくす 人情が荒れると川も騒ぎ出す 人生に人待ち顔の坂がある 窓は五つ一日いちど開けてやる 一陣の風に友の正体見えて来た ゴム跳びの上手な友も逝っちゃった 小康 山康 美智子 サカエ ゆり子 よしえ

西瓜食うボスの背中はすきだらけ

天下り人柄よりも顔が利き

背なを押す友がいるから坂のぼる 古びたか心の窓が軋みだす まばたきもせず友達の死因聞く 窓に息吹きかけて書くひとつの名 窓際に灰皿のある席がある 流しびな川はやさしく抱きとめる 点と線つないで友の名を浮かべ 玄関のベルを押さない友がくる おふくろの窓は年中あたたか 13

とみお

枝

風

前

円満に返して欲しい北の島 円陣がしっくりいかぬ大ピンチ 円盤を見たと子どもは譲らない からの商人でした父の腰

温もりが胸につたわるお人柄 新婚へ招かざる客ひとり来る お招きにわくわくしてる衣紋掛け 両親を招く新居の木の香り お隣の食器も借りて人招く 円周に出発点がたんとある 円周少しずれても夫婦平和です ○一つ画いた仙崖の絵が売れる

お人柄は良いと仲人如才ない 来賓のバラが真赤な嘘をつく 人柄がそのままわかる運転ぶり 断わらぬその人柄を当てにされ 諷云児 年 白渓子 代女 的子

もう一度結婚したいお人柄

武庫坊 IE. 坊 的 坊

- 97

観光のために研修居眠りし 朝凪の岬に聞こゆミサの鐘 老いの背に孤独と言う字が書いてあり 繋がれて円の範囲という自由 舞う人も客も一つに薪能 ほどほどに目をつぶる術身につけて 青空へはためく路地の鯉のぼり 梅豆羅にも唐の津という港あり 飼い犬は情緒豊かに訴える 偶然の出逢い健康たしかめる 妻逝いて無上甚深だけ覚え 片面がふんわりこげていい餃子 村営のいで湯で紡ぐ半生記 葉隠れに梅二つ三つ熟れ残 サンプルを貰い使いもせず貯めて 赤裸々に顔が物言う真実を ヨットでも太平洋は乗り切れる 選挙時だけは賑わう丘の団地 物忘れの薬があればと医者笑う 長雨の音もうれしい音に聞 人柄が良いので退屈してる鬼 礼服をセットで買わす招待状 方円の水になれずに嫌われる 嫌な顔せず数えてる一円貨 真実は書けぬが嘘はなお書けぬ 人柄がにじみ出ている下駄の音 がガラリ変った正念場 久保 正剣報 ふさ子 しげお 佑 百合子 久仁於 喜久亭 ただし 7 ち 義 水福 達 て笑求 弘 郎夫 ょ 3 女芽 思い出せぬままに会釈を返しとく 会釈してくれたお人がわからない 螢火をそっとぬくめている孤独 喜びを結ぶ手の内まで覗く 結び目が少しゆるんだ倦怠期 信じ合う主の道草にもすがる 道草を伏せてまあるく抜ける風 尻敷かれバネの気持がわかります もつれ解く結んだ人を許しつつ もう離婚結びの神も思案どき 足腰のバネ取り替える医者ほし 靴の紐結ぶ磨くの新世帯 道草に落ちてる話罪がない これまでの道草決して無駄でなく 頂点の愛を結んで共白髪 全身のバネが伸びきる午後十時 おふくろの小包結び目が温 道草が思わぬ倖せ連れてくる 金箔の簞笥は持たぬ嫁でいい さあ街へ白手袋を振りかざし 人和む彼岸会里の墓詣り バネ利かぬ二人互いに庇い合い ネひとつ程よく生きている笑顔 いて飛躍のバネにする闘志 JII 柳ささやま へ花 平野百合子報 60 アサ報 正はる子 与呂志 千鶴子 ア和忠 とよ子 悦正正達英 幸 朴高 子子子 美 7 竜 明 栄養はともかく孫の食べ盛り 好物が少しずつ減る冷やっこ 得手というほどの事なしちらし寿司 夕陽から許しが出ないまま暮れる すべて許して安楽椅子が揺れている 許す気にさせる百万本のバラ たいがいの事は許してくれる母 森に入ると誰かにわたし許される 何事も許しやわらか紙おむつ 許し難い人へ先手は取っておく モデル地区同じ形のガラス窓 フロントガラス二人の行方知っている そわそわと孫を待ってる日曜日 黒豆を送りみかんが届く縁 金婚の盃に酔うくされ縁 縁の下あり喝釆の幕が開く 通夜の席はなし因縁めいて閉じ みちのくの旅のご縁で酒旨し 同病の縁でなぐさめ合ってます いい笑顔こころに栄養くれた嫁 手探りで握った指が縁となり ガラス戸の軌み任地の夫を恋う ガラスコップの水を揺すっている謀反 ガラスの森に割符抱いたまま眠る 一家団らん栄養剤を酌ぎこぼ 曜日妻のプランに従いていく 曜日壁の美人画ながめてる 宮北口川柳会

いわる

丸山よし津報

百合子

可

とみ子

つや子

ヒサ子

子

郎

-98

能義トミエ

澄

鹿 房 たず子 富喜子

太 子的

## 柳塔まつえ吟社 恒松 叮紅報

透析に余命をもらい今朝かえる 退院の荷物にそっと千羽鶴 モナリザの顔して試着室を出る 血の出ないようにさっぱり斬り捨てる 子離れがさっぱり出来ぬ意気地なさ 何もかも許すと空が晴れて来た ひろ子 絹子 しげお きよ子

オンザロックノクターン聴く夜の 老い進む調子の悪い補聴器と しゃくなげの雫に濡れる寺の道 どうもどうも手持ち言葉が底をつく 雨 道晚 ×

叱りすぎだった寝顔を拭いてやり ついて来る影が時々邪魔になる いい夢が見たくて枕低くする

立谷勇次郎報 諷云児

む音確かに聞いた鬼瓦 

夢之助

緋のバラの棘に気づかず身を崩す 雷の太鼓がほしい三歳児 雷が恐いとすがる美人局 無器用で雷だけはよく落とす 遠雷へふっと浴衣の衿合わす 対局のしじまに扇子ばたつかせ 栄転の影にむなしい風の音 向 定 十四郎 尚

ひっそりと都会はなれてみとせたち 美津子 フクヨ 利 西

雷が行くなととめる不義の

音痴でも子供寝かせた子守り唄 掃除機の音で消される妻の唄

空一ばい仕掛花火で好きと書く あの女も花火見せ場を知っている

女房にいつも気合で負けている 負けてたまるかあの手この手の策をねる

たかし

思いきり風船飛ばそ空しい日 風船が空の広さへ迷いだす 風船を吹いた過去のある議 銀行が孫に風船持って来る 父のない子にも風船揺れてやり ストレスが溜って風船旅に出 3

足音に妻の予感が冴える時 うすうすと子感察して茶を入れる まだ欲があるから予感当らない

逢えそうな予感駅まで急ぎ足 結ばれる予感の中で拗ねる恋 人並に走ってみたい夏帽子

菜園と私をつなぐ夏帽子 今年また妹に買った夏帽子 火砕流どこまでさらう夏帽子

きみえ

友

喪の底で星の涙が凍りつく 夏帽子背のびしたがるので困る 夏帽子山の男の喪が明ける 星空は悲しい酒を知っている

星空に甘い会話が欲しくなる 老母のことしか考えぬ

瞬を花火は生きて闇になる 星と握手をして帰る

言いたい事言えたら楽になるやろに

7 キク子

る

ちかし 登志子

房

鶴を折る不吉な予感消したくて いい予感ありそう玉子に黄味二つ

静 清 2

多賀子 畔 郎 17

仲人の仕掛花火に引っかかり 雷も花火も関係なく昼寝

遠花火離婚話をそっときく

叮 与 草 紅 一 丘 f

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

切りとった森に童話は生れない 世界中森が病んでる泣いている うとうとと鳥のさえずり聞いて朝 ウグイスとハミングしてます豊かです 森が泣くそれは男のしのび泣き きれいだね」九官鳥のご挨拶 智重子 かつ子 ちよえ

もう一度空とびたかろう鍋の鳥 里に出た猿に帰れる森がない 森追われキジまで里へ降りて鳴き 山ぼうし咲いて歓迎してくれる

昼寝してPKOを聴く身分 局田美代子報

人柄がわかる切手の位置確か 取締る方も見たがるストリップ 国会で賢い人がする喧嘩 われぬように生きたし薄化粧

闘病記いく度夏を病みぬけん 二つ聞き二つ頷いてから意見 梅漬けて干して女の四季がある みのる 代

負け試合涙で明日の虹を抱く

親に似た負けず嫌いをもてあまし 寿和寿政 夫美

キミ子 輔 武

99

風を掴んで女は雨期を脱ぐ覚悟 ささやかな義理の衣が脱ぎきれ 脱皮したようにズボンが脱いである 求人欄縁もないのについ見入り 角出していても絵になるかたつむり 平成の絵巻に馬車が消えている 円陣を組むと勇気が少し出る 和歌を聞き昔の風がよくわかる モナリザの微笑み心濡れている 撮り直しばかり濡れ場がはかどら 濡れ衣を晴らした七十六日目 濡れながら気長にパレード待つ人出 殼を脱ぎ明日が怖いほど見える 佳き友が居て一つずつ脱いでゆく 脱ぎ捨てた過去は語らぬ揚羽蝶 脱ぎ捨てた靴を揃える人が居る ペンを取る私を脱いでゆくために 地下足袋を脱ぐとやさしい父となる 十二単脱いだ重みがあすにある 春霞恋しいひとのシルエット 水槽のめだかストレス貯めてい 濡れ衣を七十五日闇に干す 酸性雨あびて案山子は思案する 濡れ鼠の男を許す火の女 枯野残照脱げばシャネルの5が匂う っていくばかり私の貯金箱 球入魂濡らした汗に悔いがない る 2 中2 小6史 千 与呂志 しげお郎 淑森修昌 春 居 幸 子屯 別なこと思うて愚痴を聞いている 夕焼けの雲がほしいと言う孫よ 母代りという姉に甘えてばかり 淡々と生きてゆきたし草よ樹よ 静水を越えろと叱咜する墓標 ショパン聴く雨音のないマンションで 真紅のバラ私を見てるときめきよ 新緑の森から足が出たがらぬ 螢とぶ闇のかなたの月日かな 神主ののりとへ亡夫が近くいる 雰囲気が好きでカラオケやめられぬ 梅雨入りへ玉葱少し抜いておく いつまでを生きて川柳綴れるや 長生きで曽孫の肌着夢も縫う 母ちゃんの声が聞きたい電話です 善人と見たのか蛇が動かな 青葉梟越冬までは平凡に 桃太郎にあやまる鬼を子は笑う 今はもう笑うて会釈する他人 食卓に家族の笑顔寄ってくる 笑っても泣いても一日二十四時 禅寺の静の中に夫と居る 生きて今ある幸せに感謝する エネルギッシュな草と聞い陽に焼ける プライドはまだかくし持つ苦笑い 派手を着て軽い足取り初夏の旅 マトの実日ごとふくらむプランター 11 宮崎シマ子報 いる ヤスエ 静 喜久恵 干蜎 のばら 伸子 とよ子 夏浪 洋 枝 朽 恵子喜子佳 子 芳 行商の魚で命つなぐ村 長雨に半分開いたたこ焼屋 雲行くも島動かぬも志 島の子は同じ民話で育てられ 霧晴れて見れば島影そこここに さわやかな気持で今日もボランティア 船がつく島は総出で出むかえる 無人島で暮してみたい余生かな 毒ガスの島があったと聞いている 幸知らぬまま蓬萊の島に住 眠るなら花に埋もれた小さ 上達の遅さへ情が絡みつく 上達をしたのか喧嘩しなくなり カルチャーにおだてられてるレオタード 上達をはらはら見せる一輪車 迫真の演技もむなしスタント まな板の上の魚ににらまれる 丸干しを手で焼く酒に親父の譜 空を飛ぶ魚をえがく子等の夢 魚の干物口開けたまま海を見る 水族館魚の笑い声がする 垂涎のまと土地土地の生造り あら煮きをしゃぶり男の貌になる 雨けぶる赤ちょうちんが招く路地 エリツィンが切り札に持つ北の島 悩を払う杖引く島遍路 尾市民川柳会 女傑におんな垣間見る

作一郎

とみを

IE. 子 美津留 かつみ 雀踊子 宮崎シマ子報

田実子 欣史子

あずき

島

千枝子

香

弘

生け造り鯛には何の罪もない 上達を越え先代の墓を訪う 錆びついた画鋲がとれぬ無人駅 花時計惚れた弱味で待たされる 初恋の思い出遠き旅役者 無防備にさせる女の京訛り 役者馬鹿親の訃報も目をつむる 揚げたてのフライわが家の嫁の デュエットに歩幅乱れる妻音痴 六坂を重ねた月日走馬灯 札束に眩み外した人の道 心開く霧はすっかり晴れていた 胸襟を開くあなたの手のなかで 開いたらワッと飛び込むパチンコ屋 開運の絵馬神様に近く吊る 開発を拒む 写経した筆と一緒に洗う罪 名筆展文字の躍動息をのむ 老いてなお俳画の筆で恋をする ちびた筆しずかに眠る小ひきだし 上達をした頃職場変えられる 放棄した償い重く子への枷 有頂天画鋲をふんで反省す 女形所作見せてやりたいギャ 、一ト開けて待っているのに誰も来ぬ 枚のはがきがくれた夏の海 言が言えず調子に乗せられる 尼崎尾浜川柳会 一本杉がある ル達 前田いわお報 味 向のあお 勇次郎 末貞一 シマ子 まさお 頂留子 三男 弘 # 宏 よしえ 澄尚 IE. 元 泰 平 紀直治 子利治治 迷うから地下街いやと祖母きらう 少年が決意を誓う北斗星 見栄張ると家計簿すぐにSOS 片意地な見栄が妥協を許さない 毬つきでひいふうみいを覚えた日 償いのつもりで妻の肩をもむ 償いの雨は斜めに降りしきる 恩人は償い切れぬままに逝き 償いもせずに転勤させられ 鍵っ子の母には見せぬ涙あと こらえます一人になって男泣き 原点に戻り迷いが解けてくる 言うべきか言わざるべきかガン告知 日記空白死ぬまで迷い続くだろ 流れ星わが燃えつきる時思う 愛犬の見栄すれちがう散歩道 結婚式見栄が揃ってすましてる 百人の美女に迷うて目が覚める 迷ってるふりをしている象の鼻 迷い深し何べん眼鏡拭いたとて 仏壇か新車にするか迷う歳 夢でまで迷うこれは地獄かな 結局は最初の眼鏡買うことに 迷うだけ迷って始めの案にする 通訳を迷わせている国なまり 適齢期すぎても迷う娘が一人 エルメスもセリーヌも好き未だ女 渡部さと美報

2 上等の肉を大きな声で買う 涙した数だけぬくい言葉持 さようなら口惜し涙が止まらない

### 夢之助 十四郎

政岡日枝子報

さと美

登志子

りんごくるくる祈るリズムでむいている よひょうよひょう鶴は祈りと翔ぶばかり 祈られる形に樅は立っている 祈っても祈りたらない神のムチ 祈り続けて飛び立つ鶴に目を瞠る 仁王様ひざをよろしくまず頼む 祈りの奥に静かな海が見えてくる 愚かにも祈ってばかりいる私 お題目百万遍の願 姉妹祈る願いは内緒なの 野仏は欠けているけど祈りたい おみくじも運を祈ってから開く 診察日のカルテに祈る日が続く 祈らねば箱舟はもう出てしまう 誰のため祈り続けているだろう 底辺の祈りへ神もそっぽむく 道半ば祈り足らない亀の足 りの列に真面目くさった夫がいる 明ける 富美子 てい子 恵ゆ千松 雀

希拓佳 叡宏 久子生秋子子

兼治郎子

正久恭雄峰昌

# 尼崎いくしま川柳会

温もりがほしくうろうろ夜の街 うろうろと地図を片手に観光地 広すぎてうろうろ捜す屋敷町 そうめんを静かにすする修行僧 キク子

英正みつける

司 子 子

ひろ子

諷云児

腹の底から笑ってみたい夜がある 腹割って話す味方がいてくれる 腹の底探りに来たか缶ビール 空き腹に昼のサイレンよく響く 芳澄正

加茂川の水で洗ろたお顔てこれ 空腹で帰る夫でありがたし 腹芸を見せて男の幕を引く 不平不満金魚は腹に溜めている かい

吉杜福鹿 太郎的一太

いびつでもトマト輝く無農薬

川のない心斎橋で待ち合わす すいすいと流れに添いし川トンボ 川向う暮らしの灯が点り出 議会解散菜っ葉服まで出馬する 真実を見せて悪女も恋をする ざりがにもふなももどった町 0 Ш

正 子

一笛

金婚になれば渡ろか天の川 くつろぎは川の流れの中にある

行 伊三郎

ていねいに生きたる亡母のひとえもの 妻の皺かけた苦労の風紋か 蝶にさえ選ぶ権利の花衣

フク子

勇次郎

正萬

治的香

年真

女代柳

気前よい人に傾く老い哀し ねじ巻くと明治まだまだ動きます 結願の遍路も土産忘れない

世直しへ次の選挙がおもしろい 時どきは自分に水をかけてやる 時報とは合わぬ時計で用が足り ゆっくりと来る幸せは間にあわず

歌佳武《子秋坊女

悪戯を他人行儀で詫びに来る

ーレムに霊歌流れるマルコム忌

ため息を風船に乗せ空の旅 飽食と暇とテレビとため息と 父の日もいつもどおりのいってらっしゃ カレンダー終身刑と知らず剝ぎ 五七五並べただけの日の焦り の親父にチャンネル権がな だけ貼ってポスター 10

父の日の朝犬だけが尻尾ふる 父の日の父に手向けるワンカップ

三猿の教え無駄口たたかない 罪ひとつ花壇の隅がくずれてる 夢のある花壇の線を引き過ぎる 一枚の辞令 男を輝かす 太陽の輝きパリッと白を干す

**比呂志** 

重洛鉄

酔心

母ちゃんの口にはとても敵わな 陰口と知らず笑顔でやって来る 出しはせぬはずだった老婆心

神仏よいつまで怒る火砕流 機川柳サークル卯の花 川島諷云児報

もう一度怒って欲しい老父の鞭 怒らせてしまう不器用なわたし 雲の峰父の怒った顔になる 花盗人笑い羅漢を怒らせる

風説の流れを止める術がない 足音は女裏木戸あけておく 足のツボゆっくりもんで明日の ふる里に桃の流れる川がな 喜怒哀楽出せぬ不揃いのリンゴ 夢

ひかり 武庫坊 恵美子 茶の子 江

> 少年の蒼さが日ごと褪せてゆく 少年と歩くと急ぎ足になる 流されるままに流れたいろは 坂

> > かおり お

希 我 川 柳 志 勝 童 弘

仲好くなった頃に別れるバスツア 抜けたよな主人で店が流行ってる 少年の瞳が父の樹を揺する 少年の無口漫画と仲がよい 澄んだ目の少年が押す車椅子 冊の本で少年目を覚ます

美津留

目の前の終点にまだ悟れない 海に沈む夕陽は過去を語らない いつまでも吹いてはいない父の風

英 〆 スミー 女 子

猿の社会に劣るよ政治改革論 穴を掘る妻と二人の穴を掘る

本蔭棒 しげお

ひと呼吸してから跳ぼう水たまり 怒らせて帰った彼がまた電話 思い出は好い事だけと限らない

범田 公一報

諷云児

城北川柳会

恐い話が心の隙へ攻めてくる 老い呆けの妙薬嫁のやさしい 青畳新築までの長い坂 卒寿そこ健康管理に心して ため息も時にはからだ休めます 寿美礼

風邪で寝る独りぼっちが身にしみる 流の嘘聞きあきるシャンデリア 八重子

-102 -

白渓子

毎日の食が薬の健康美 歳時記にハウス野菜が背を向ける 弱かった父が残した薬箱 子離れにため息ばかりついている 生きているあかしに米も靴もへる 高い壺買ってため息出るばかり チィチィプン孫によく効く唾薬 ため息で肩の荷ちょっとおろしてる 路地裏に卯の花咲いて夏見つけ 捨てようと誰も言わない祖父の杖 医療過多畳の上で死なさせぬ 裏切りを知らない花で通い合う ため息は止めよう今日の青い空 あい子 倫子 登美子 久留美 頂留子 昭子 ただし 春史静 公白達柳 峰子影

さざなみのダムの底から笛太鼓 泳ぐ事下手で深海魚とならん 溺れない程度にこの世泳いでる 口八丁手も八丁で泳いでる 終の旅茜の雲でしてみたい

風步

たくましく力士のような夏の雲

柳塔鹿野みか月

自分史に匿さにゃならぬ罪ひとつ

苦い涙を甘い涙に今日替える 行きずりの過ちだった名を匿す おふくろの味匿しどころを聞いてい 大切なものほど匿す場所がない 恥多き過去を匿して生きている 鳥たちよ匿した栗を取りにこい 青田風吹きこむバスでふるさとへ

みさ子

明正

恵

想い出をぽつりと祖母のしぶ団扇 信じよう最後に笑う阪神と 風流な風団扇からゆれてくる 日米友好青空結ぶ太い紐 満塁に団扇が骨をさらけ出す 安らぎのひと時朝の茶がうまい

八重子

寝たきりへまた巡り来る夏祭り

太鼓かく白髪が目立つ村祭り 花火見て故郷の祭り見えて来る 埋み火を祭り囃子がかき立てる

吉太郎

ふる里をこよなく愛す夏祭り

夏祭りハモだスイカだお渡りだ

直洋祥昭しずえ次子司子え

お祭りが済むまで選挙あとまわし 夏祭り右往左往の京浪華

馬

郎 洗笛

そういえば母のヒステリー聞かないな 浮き沈む子船見守る深い愛

孔美子

目の色が本気に変わる摑み捕

かりん

17

睦富

三千代

実

クーラーに慣れて団扇のロマン消す

満ち足りて深い眠りに誘われる

ロケットが地球の雲を抜けて行く 夏雲は祭り囃子が好きという ギャルみこしかぼそき足は役たたず ヤングより老いが張切る夏祭り 手土産の祭り寿司待つ母がいる

敗戦の悲報を知っている団扇 ゆとりなど預けたままで母が逝く 孫寝かす団扇に眠気誘われる

> 敝英純保恭 子子子次子子 勘忍袋のゆとりが風に破れそう 雑学の深さ世渡り迷わない

武 怒らせた掌うちわ母の亡父がわり 上手下手越えて楽しい筆握る もう素顔みせたゆとりの対話する 団扇の風で母が看病してくれた 匿してもかくしきれない色が出る み仏の匿う視野に居る安堵 服のお茶にもあった謀りごと

11

しげる

ライバルを偉いと思うことがある 葬式で知った近所の偉い人 札数える妻の横顔他人めき 欲ばったせいか壺から手が出ない 退職金リュックで持って見たかっ 今なれば愛より金を選ぶのに 摑み合いした弟と頼り合い しっかりと夫の癖をつかんでる 調子よいロボットがいて首になる あなたの投げた小石で調子狂い出す 大の字に寝てる両手に欲がな 一円のおつりゆっくり待っている た 頂留子 みずき 紀美女

くに子 騙したら化けて出るよと欲を出す 調子狂った時計私をおびやかす もう一つ買うて抽籤券貰い 動かない証拠を摑む事故現場 わたしにしか偉そうに言う人がない

智恵子 はるお きみ子 節

喜与志

月子報

偉人には遠い家系で温かい 欲ばって坂がだんだんきつくなり 長靴を履いているのが偉い人 偉い人隣におっておちつかず もっぱらに妻が偉いという噂 鬼ごっこ淋しい心摑まれる 摑まれたハートに鎖つけられる 餌を引く蟻を欲とは笑えない お父さんを偉いと言って聞かせよう 赤い服金のあるほうへついてゆき 欲望の電車に終着駅がない 昭天岳智 東柳花凡泰 人子雲太梢子子梢

池

金余り外国の土地買いあさり

い咲きかましまへんで咲きなはれ

水琴窟跳ねてささやく水の精

昭昭淳登和紅宗

子夫

落書きも古代のものは値打ちもの

吐く息が白い煙の寒い 打吹川柳会

いらいらがつのりキリキリ胃が痛む 年を経て引きずっている恋の傷 いらいらのもとはコンビの無神経 辻褄を合す先手を忘れない ため息とため息別な声をだ

大空を画布に落書きしてやろう 櫛の歯が欠けた女の度胸みる 順送り一番弱いので止まる 無礼講ここにも年功序列あり ポケットが浅くて愚痴がすぐこぼれ

息抜きをするのに丁度よい場所だ 今更と言うが言わねば分かるまい 四の五のと今更言うな愚痴になる 古手紙亡母の青春のぞき見る 般若経はいらいら病によーく効く 真実が漏れないように蓋をした

夢破れグラスに残るひと雫 木の雫悪に染まらず海に行け 父の樹の零

男にして貰う

トシエ

いらいらと沸騰しとる湯気たてて

石花菜 かつみ

坂上りきれば涼しい風の声 雨風にめげず新聞 晩酌が過ぎてリズムに乗るイビキ そよ風の波紋に浮かぶ池の 大風に守りはしかと鬼瓦

三津江

朝を行く

しげお

濡れ衣の傘の雫を強く切る 物余りいずれ枯渇の時がくる 笑うたら甘い雫をくれるひと 狂うのが上手い女と飲んでいる 海鳴りを聴いてるたしかなる余白 余るほどないから知恵が湧いてくる 余りものでも喜んで母笑顔 あじさいの雫が愛を裏返す 振り返る心の庭へ酒しずく

おさむ

勇

月

生真面目で落書き一つ出来ません

天

雨やんでバラの雫にあるいのち 余りもんと違いまっせと念を押し ばらを打つ愛の終りの一 追憶の頁を濡らす花雫 歯車が狂う夫婦 の隙間

言うことを聞かない欲のな

男

雫する汗が明日を主張する

美柳 維透文

雄

弘朗報

宍道湖の一滴故郷の岩清水

みをき

いらいらする花には蝶も寄りつかぬ 仙玲 よしえ 獏 善

> 母逝った朝の空気は動かない 強がりを捨ててやさしい風に逢う 裏木戸の壁が気になる蟬しぐれ 思案まだ蛇口の水が止らない どんな壁あっても妻となら行ける

つむじ風落葉の宿をかき散らし

節 ひさ子 白 峰

玲 とみお 惠

> 明るくて大きな返事 孫の嫁素直な返事可愛くて 笑い声壁の向うに温い部屋 久しぶり並ぶ枕は孫の顔 ひとりもの壁と話がうまくなり 湯上がりにひと風入れる青すだれ 壁ひと重むつみ合ってる隣組風止めば落葉きれいに庭の隅 高い壁根よく越したかたつむり

孫の

朝 島 仲

子

コスモスがゆれて短い陽が落ちる

ヤス子

定

昭 美恵女

金丸のバカと落書きしてあっ 新人のお陰チームに幅ができ お陰様その心根があったかい いらいらを示す親爺の煙草盆 呆け封じ今更何を始めても

た

弘雄小松良

生盛 Z

久子

むらくも句会

明朗報

葉 良 子朗生

百は三林代を高蔵 幸 子

-104 -

### 風が出たらしい庭木がしゃべ り出す 明 朗

嘘一つ人を泣かせる罪づくり ほんとか嘘か脱いだ帽子が知っている 泳いでも泳いでも辿り着けない母 病名の嘘を信じて化粧する 薬吞み死にたいなどと嘘の皮 木村 0 海 明人報 ひかり いさむ

秘密にはウトイ男で頼りない 梅雨空へ別れた人の思慕つのる 复空に少し<br />
浮気な流れ星 人生を一期一会で幅広げ 農業の苦労知りたるミニ菜園

> くに子 白柳子

マツエ

日曜日孫にはまごの時間割 嫁が掌を叩くだろうよ突然死

栄光の叙勲の陰に妻がいる 貼り薬病の重さ知っている 嘘ついて甘える母がいてくれる 公約に嘘も混じえて選挙戦

> スミエ マサエ

嘘ついた子供をエンマはいじめてる 大臣は派閥の数で決められる 喪の電話着てゆく服を考える 水清き川面に鯉も群れをなす 濃町の虚偽の防止を信じたい

伽名子

かおり

生くる日が続けと花の苗育て

チカエ

仙

雨の日は雨の詩あり筆を選る 票固め代理に持たすのし袋 泥水に命をさがすカンボジア

IE.

ラムキンを揺れば童話の音がする 宅急便母の素顔がつめてある 久世川柳クラブ 二宗 吟平報 きくる 志

小なみ子

やりくりの家計は母の胸一つ

伊久栄

**圡手箱の中に幼児が秘めてある** 

晩酌が利いてのんびり皺がのび 締切日迫りのんびりしておれず 雑学をかじりのんびり今日を生き のんびりのいつも遅れてゆく会議 夕焼け小焼け遊びつかれた幼い ひとつずつ捨てて美しく老いる のんびりの余生へ趣味の友がある のんびりと暮らそう喜寿を生きのびる のんびりと生きたし思う事多し H すみれ正仙 恒吟 半山

## 赤川

棘ひとつ抜いて優しい風にあう 書きつけを握ってあどけない代理 コマーシャル少し割引して聞こう 千鳥 快 功 萌 泉 風

菊野 暖

## 僕川報

旅先で孫の喜ぶ物を買う 初対面少し言葉をあらためる 沈黙が誤解を招く羽目になり 影になり日向になって支えられ 影法師共に歩いて我が家まで 上手下手かまわず趣味は楽しもう ハンサムな医師にうっとり言いそびれ 米寿越えやがて卒寿の祝 い酒 久静正まつ 子代枝ゑね

混浴の弾む話で若返り

## 柳ねやがわ

高田

IE.

雄

幸せな未来の地図を描くふたり 原料が屑紙ですと再生紙 ちぎれ雲故郷はるかなみやこ草 退院を待つ朝顔の蔓が伸び プライバシー守る子供の世界地図 口喧嘩ひとやま越せど雨止まず 待ちぼうけ両手広げて星

平

野菜屑生かして母の料理好き 財産がないが美人に生んである 日が沈むと妻が鎖をかけにくる バランスを知らせてくれる足の裏 円満退職なんて本人思うてず 相思相愛なのに私が苦労する 天井に地図を残して梅雨上がる 義理欠いた夜半身にしむ雨の音 全集を読み終えるころ桜桃忌 妻がなお僕の出世を夢見てる

黙ってもわかる心が熱くなる 父の日に似顔絵かいた子と語る 本店とバランスとれる良い支店 バランスが崩れ夫婦でまた揉める 不器用に走りつづけた母の地図 屑選って生計立ててる町の隅 同時通訳日本語の美が薄れ 八十路まだ余熱を抱いて坂登る 英壬子 柳宏子 とし子 女

かすみ

時弘 たもつ あやめ 黎之助 一風 直

シマ子 勇太朗 欣史子 君

波留吉

-105

子らの声途絶えて外はいつか雨 ここまでは俺もどうやら地図どおり 大雨に大丈夫かと娘に電話 英光三

億の話に慣れて私の諭吉さま

明子郎

林

聖書ボロボロなれどまだ神を知らず

智恵子 希久子 あずき

雨の夜を愛し終戦秘話を読

淋しくてさびしくて本積み上げる 螢に会ったことは誰にも話さない 貸借りがあって夫婦をやめられぬ みつ子 いわる

長雨にゆらりと胸の深海魚 どの頁開けても響く本がある 酔いざめの水くれたまま無言劇 ロボットの誠実さには負けている 点滴のリズムつゆあけ待つように

パソコンエラーを繰り返し愛は無機質 浮遊する夢よほたるは点滅す

年に百冊の本読めますか

皇太子殿下のしずかなるファイト

IE

風坊

中もくせい川柳会 田中 正坊報

ところ

3000円(記念品·昼食·発表誌 泉屋ホテル(青森県黒石市

八月の雲はかなしい顔である

ツピ着た子供神輿に憎い雨

肩の力を借りに来る

千羽鶴あと一羽だけ折ればよい 吉太郎 きく子 史 郎

住吉はラスト浪花の夏祭

騒々しく雨戸を叩く通り雨

類はようやく地球救う気に

引き際の良さを手本にいたします お手本を口三味線で舞うて見せ 塩壺を母が手本にせよと言う じゃがいもが転がっていて農家留守 (小)英 田英 し明英 佳 蕗 ば 光子子 秋 児

塾通いみんなおんなじ悪さする スポーツ紙持っておばはんよう喋る かあちゃんの包帯いつもゆるすぎる 定位置にようやく慣れた帽子掛 主義一つ持てば手本にされる村 一人居て一人のために茶を入れる 杜 武庫坊 的

۲

白渓子

客と来た子のお行儀を教えられ

氷屋の旗

少年の日の夏よ

ワープロが手本通りにならぬ指

石像がズラリと見てる夏の雲

包帯の指でカレーの汗を拭く

とき 11 柳忌 9月23日 (祝) 午前10時 П 東 北川 川柳大会 柳 連 盟

伸びる 宿題と選者(各題2句 寿 片方 佐々木文子・火 西谷 東山·風 黒石市錦町33-冬眠・席題 栄坊・同じ 高野六七八 ちば東北子 小出 柳田健二

会 席

000円

題

### 東大阪市 民川 柳大会

ところ とき 各題2句·午後1時締切 東大阪市立社会教育センター 10月17日 (日) 近鉄布施駅北へ徒歩5分 正午開場

やんわり 色 妖 j 久保田 坂 寿海 啓

当日発表 įĽ, 置 つとむ 文秋 虎 選 選 選 選 選 選

### 南画 原玉青卒寿記 のこころ回顧展 念

直

ところ 三越百貨店アートフォーラム 主 9 月 10 H 読売新聞大阪本社 5 20 日

#### 9月各地句会案内

A.C.	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	1日(水)午後1時から 並ぶ・半分・余程・都合	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る $\overline{m{\tau}}$ 593 堺市堀上緑町 $2-16-3$ 河内天笑
尼 崎いくしま	3日(金)午後1時から そわそわ・耳・反省・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔わかやま	5日(日)午後1時から 脱ぐ・抜く・猫	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 得る・民・栄養・ポスト	八尾市立学働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川柳塔まつえ	11日(土)午後1時半から 続 編・商 オ・家 風	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅
西宮北口川柳 会	13日(月)午後1時から 空港・さめる・ひらり・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
高槻川柳 サークル 卯 の 花	14日(火) 正午から 窓・女・欲・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島凞云児
富柳会	16日(木)午後1時から 山・告白・拘(こだわ)る	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南 海川柳会	17日(金)午後6時から 幾度・問題・時代・記入	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳ねやがわ	19日(日) 正午から 跡・根性・ミステリー・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉
南大阪川柳会	19日(日)午後6時から 相打ち・快適・残念・立つ	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
もくせい 川 柳 会	20日(日)午後1時から 秋・図鑑・うっかり・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
京 都	24日(金)午後1時から 穂 ・殺 す ・返 事	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
岸和田川柳会	24日(金)午後6時から サンゴ・墨・赤面・続編	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
東大阪市川 柳同 好 会	25日(土)午後6時から 叩く・河・世話・煙	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの市民川柳会	26日(日)午後1時から 鼾・会議・ページ・(玄人)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

<sup>★</sup>日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

## 編

★去る5月、

## 記

散策しながら考えた。 ものではないかと、高原を し、海は眺めるよりも泳ぐ

登山は初めてだ。ロープウ があるが、こんな効率的な 高ロープウエーで標高二、 は全長三、二〇〇米の新穂 四〇米の畳平に立ち、 ★夏山にはいささか思い出 スカイラインで標高二、七 で北アルプスに出かけた。 のでこの7月、バスツアー 山へ行きたくなってきた」 香にひたった。「海を見て 五六米へ一気に登った。 しばらくぶりで海の 大阪から一路 一泊で鳥羽 表することとしている 集の刊行で、近く要項を発 ので、早目にお申込みをお 記念号を飾っていただきた ★細川護熙を首班とする連 願いする。三番目は合同句 もあって人数に制限がある 会だが、これは会場の定員 誌友は一人残らず参加し 行事でもあるので、同人・ の参加を締め切るが、 九月末、全国誌上川柳大会 事業がスタートした。 い。次は新春一月の記念大 ★『川柳塔』八〇〇号記念

## 原点に戻れ

有のことと言えよう。 に達するという。同人誌として稀 に創刊されて以来、近く八○○号 て『川柳雑誌』として大正十三年 わが『川柳塔』が路郎師によっ

らに違いない。 え難い思いが燃えたぎっていたか 道を選ばれたのは、 たにもかかわらず、 路郎師が『番傘』の重鎮であっ "人間陶冶"とは あえて荊棘の 自己革新の抑 か。 燃えるような情熱ではないだろう 自己の心に求め続けた先人たちの

た青春にいのちを燃やしたのであ 師のみならず、 ことでなくして何であろう。路郎 人々も、また、それぞれにそうし 自己の根源を絶え間なく革新する 六大家と言われた

望されるのは、生きるとは何かを ひるがえって今日の川柳界に待

済から、身近では、狭い住 ている。広くは、政治、経 けでも、目も、心も青く澄 色めがね 青いお空を ストレスの攻撃にさらされ れた人を除いて、みんな、 ★今の世の中、余程、恵ま んでくるような気がする。 はできないが、見ているだ るほど、青い空を飛ぶこと 可愛い歌声が聞こえる。 んだから 飛んだから」と ★「とんぼのめがねは な時には、自分を見失って う。疲れると余裕がなくな もできない気がする。そん り、壁にぶつかったと感じ いたら、少しは落着くだろ どに寝転んで、青空を見て 人が多いのではないか。 れらに疲れて、神経症に近 気を遣う人間関係など。そ 笔 ★そんな時に、広い野原な い精神状態に追い込まれる 車ばかり優先の道路 周りは壁ばかりで、息 らえるし、他人も許せる。 楽になる。自分も許しても ない。そう思ったら、気が ければ、 と気が付くに違いない。 かも知れない。余裕をもつ 後戻りすれば、道はあるの 横を見れば、または、 ★人間一○○%善人もいな つまらないこだわりだった て、自分を見つめ直せば、 "ある秋の日の反省。(み いることが多い。ちょっ 一〇〇%悪人も

山は自分の足を使って登降

あればいいのだが。

Œ

いいものだろうか。やはり

こんな横着なことがあって

『日本改造法案大綱』にオ バーラップする。杞憂で

をベースにしたものと聞い

そう言えば小沢一郎の『日 本改造計画』は、北一輝の

母方の祖父に当るという。 の近衛文麿を思い出した。

て成程と思った。しかし、

軍事施設へ通ずる軍用道路

のスカイラインは、 エーはともかくとして乗鞍

山頂の

立政権が発足した。かつて

#### 作品募集

初步 茴 銀水川 課題吟 香の 河 柳 教 (3句) 室 プ 売 花 系 抄 塔

鋏 3 小河黑西

月号発表 9 久富青出内川尾 縮 まこと 光田 代額

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌 友、茴香の花欄は女性、その他 はどなたでも投句できます。

選選

读

選

吉岡美房担

選 選

\_ [ HI] < \_ 眼 12 庫 月号 初步教室「裏

#### 夜市川柳募集

第4回 鏡 西山 幸選 ハガキに3句 9月末締切 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

印 発編集兼 年年 価 (版市阿倍野区 分 六 三千八百円 七千五百円 百

振替口座大阪8-JII ラ第2ビル202号室 明 (送料 社巌

T-545

発行所

#### 本社 9 月 句 会

投 会 席 兼

슾 日

書 題

場 時

9

Ă

6

H

メンズファッ

3

ンセンタ 後5

2

\* 4

cm

СП

1葉

に1句を書

(62円切手5枚)同封のこと

場

85

地下鉄谷町4丁目下

電06.9

机

橘吐河西

2

高田内口 薫

一子 3 厘

選選選選 選

#### 本社10月句会 3日(日)

兼題 「これから」「思 感」「伝える」 「厳しい」「腰

#### NHK川柳作品募集

課題「予感」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 9月10日締切

〒540 大阪市中央区馬場町3-43 NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

9月26日(日) ラジオ第1放送

午前11時5分から

#### 西日本文字放送作品募集

課題「再会」 橘高 薫風選

ハガキに3句 9月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20 大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

JI

柳

### 九月号

定価

### 第2回

# 千歩の絵画展

# 日本画・きりえ

発売

の他)に広告、大きな反響を呼び、

好評を博して

います。

Ö

大阪市中央区道頓堀1-9-14 ギャラリーミドー2F

地下鉄田出口が便利です) 御堂筋道頓堀南詰



10月5日 (火) から 10月10日 祝 まで

最終日は午後5時まで午前11時~午後7時

いりました。 流れの速さについていけない拙い絵ですが、その後の 昭和から平成へと、歳月は、 またたくうちにすぎてま

歩みをならべることに致しました。皆様のご批評をいた だき、新風を糧に精進をつづけたいと願っております。 ご高覧賜りますよう。 お待ち申し上げます。

八尾市中田2-302 0729 - 98 - 0928 杉 T

※川柳作家必携の書Ⅲ 全国の新聞(読売・朝日・毎日・東京・中日・そ 第二 卷 刊行

①第三回全国川柳大会〈主催·日本伝統美保存会※ 品抄※佳作入賞作家など、全入賞作家2014人 最優秀・優秀・女性奨励賞受賞者の色紙・作家作

②明治以降有名作家の作品を、 て収録。 の作品…… 創作参考の例句とし

③創作川柳の保存欄。あなたの川柳作品を日誌形式

で記入保存できる編集。

付き・ボール箱入れ保存本。 【装丁】A5判・上製本仕上げ・ビニールカバー

平成川柳作家抄」

数と住所氏名を書いてお申込み下さい。 【申し込み方法】※代金後払い。ハガキに注文冊 【定価】1850円(消費税・送料別

〒 195 東京都町田市金井385

芳文館出版・川柳作家抄係

六百円 (Ext 五十一円